こっちを見るなあ!」
ジャスティスは全身真っ赤になって
ライオットに抗議した。

フラッシュ・オブ・ザ・ブレイド
「神雷閃光剣撃!」
ハヤテの剣から放たれた閃光の熱波は
魔導の竜巻を断ち、盟者に突進した!

ロエルからジャスティスを奪うと
ライオットは守るように彼を抱きしめた

とはできません。
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。 また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡するこ
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

口絵・本文イラスト ぽぽるちゃ

目次

【プロローグ】
ろうじょう
【第一章 ワイマール/籠城】
こうせん
【第二章 ワイマール/抗戦】
はいしん
【第三章 ワイマール 背信】
とうごく
【第四章 ワイマール/投獄】
【第五章 ワイマール/決戦】 【エピローグ】
あとがき

【プロローグ】
ようやく光が見える。
そして耳には、ごおごおと言う風鳴り。
「............ やっと出口だぜ」
辺り一面の雪が、少年に光を向けていた。
きょうれつ
じふぶき
ほね
強烈な地吹雪は大地を駆け、顔を上げることすら許さない。まして寒気が骨にしみる。
少年はトンネルを抜けると、高台から街を見下ろした。 彼が生まれ育った街も、雪に埋 もれている。
しかし生者の街ではない。
かたむ
まちな
建物はみな崩れ落ち、傾き、瓦解していた。さながら墓地を思わせる街並みである。
じゅうせい
そしてその墓地のどこからか、無数の銃声がここまで聞こえていた。
おやじ
「兄貴、待ってくれよォ!」
呼びかけられ、少年は振り返る。
「バウザーの親父、うまいことやってるな」
暗いトンネルから現れたのは、十人ほどの人影である。
みな十二、三歳。一様に白い冬季野戦服を身につけた少年兵だった。
「ねえねえ、レイズの兄貴ィ・・・・・・」
年若い少年兵が、息を切らせて呼んだ。
じゃしん
「本当にここから...... 邪神に見つからずに逃げ出せるのかよォ?」
よくよう
ひどく抑揚のついた大陸公用語だった。
ひとみ
はだ
くろかみ
レイズと呼ばれた少年は、浅黒い肌に黒い瞳を光らせている。黒髪は縮れてこそいない
が、アフロス系の血が混じっているのだろう。
するど
あつかん
つら
がま
よく見れば、両耳にはピアスがぶらついている。 ふてぶてしく、鋭い威圧感を備えた面
構えであった。
おれ
「俺が知るワケねぇだろ、バカ野郎」
くちびる
地図を見ながら、厚い唇をひん曲げた。
き
「それを確かめに来てるンだ。 間抜けなこと訊くんじゃねェよ」
みのが
「だって邪神がよォ、ここだけ見逃すほど間抜けなワケないじゃん?」
不安な顔が幾つもうなずく。だがレイズは、寒さをこらえて鼻をすすりあげた。
じゃま
「とにかく......他のルートは全部、 邪神に邪魔されたンだ。残るはここしかねェ ハナシだぜ」
レイズは、不敵な笑みを浮かべてみせた。

…って
その笑みに、他の少年たちも微笑する。
みよう たよ
昔から妙に頼りがいのある少年だった。
「とは言ってもよォ……..」
びしょう
レイズは、改めて周囲の風音に耳を澄ました。トンネルは、かなり大きなものだ。直径
てんじょう
ごと
およそ十メートル。コンクリート製の天井からは、雪解け水が雨の如くしたたっている。
やつ
「この先、邪神がいるかどうかなんて….他の奴に調べさせりゃいいんだヨなあ」
びんぼう
「そうだよ、なんで俺たちの分隊なんだよ、ちょオ貧乏くじじゃん」
「って言うかよォ… 兄貴、 本当にくじ引きで負けたンだろ?」
問われて、レイズは目を丸くする。
「あれっ、よく分かったな、お前ら」
いつせい
少年兵たちは一斉にうなだれた。
「これだよ!ちょオ最悪! ちょオ不運!」
「って言うかさァ、引く前に言えっつーの! そしたら俺が引いたのによォ!」
「うるせェ、お前ら! 分隊長は俺だぜ!」
毒づいて、レイズは一人の少年を指さした。
だっしゅつぶたい
「アーキン、お前、後ろへ伝令だ。 脱出部隊をここまで前進させろってナ」 「レイズの兄貴は?」
りょうかい
とうとつ
くらやみ
オーロラ
「俺たちはあと五百メートル進む」
いちべつ
地図を一瞥して、レイズはうなずいた。
「市外まで、まだーキロだ。バウザーのおっさんが時間を稼ぐにも限界があるからナ」
了解、と言い残し、少年兵は後方へ駆けだした。 レイズは地図をしまい込む。
「よし、前進だ。 また散開しな」
「あーあ、ちょオ貧乏くじ」
「って言うかさァ、休みたいぜ、いい加減」
ひび
不平不満を響かせて、少年兵たちが左右に散った……その時だった。
「レ、レーイズっ!」
唐突に呼ばれた。割れんばかりの大声で。
「バカっ、声がちょオでかいよ!」
「って言うか、アーキンの奴……………」
いつせい
こうちょく
少年兵は一斉に振り返り・・・・・・硬直した。
あかむらさき
暗闇が、赤紫に発光している。
らんぶ
極光を思わせる光の乱舞が、地下トンネルに広がっていた。だがその乱舞は、闇黒からの鳴動を伴い
、立ち尽くすアーキンに肉迫していた。

ともな
にくはく
じくうわいきよく
「時空歪曲だ!」
「逃げろ、アーキンっ!」
さけ
じゅうこう
叫んだ少年兵たちは、ライフルの撃鉄を上げ、銃口を振り上げる。
だがアーキンは、見る間に膨れる光の渦を、ただ見上げるしかできなかった。
「あ......ああっ............」
《ブル・ダガシュー》
《ギレ! ブル・ダガシュー》
ほうこう
きょたい
こうかく
咆哮と共に、巨体が異空間から飛び出した。三メートル近い巨人は、全身を青い甲殻と白い獣毛に覆われている。アンバランスなほど長い両腕には、ナタ状の爪が二本伸びていた。
りょううで
ふぶき
じゅうもう おお
メフィスト・クラス
邪神長級。
じゃしんぐん
全十二位階によって分類される邪神群の中でも、下位の第十一位の邪神である。
だがたとえ下位であろうと、人間がかなう存在ではない。それを証明するかのように、吹雪の巨人ドゥルガは、長大な爪をアーキンの頭上に振り下ろした。
「アーキン! 逃げっ...............!」
にくかい
だんざん
叫んだレイズは、戦友が肉塊に断斬されるのをまともに見た。
血しぶき、人間としての形が消失する。 幼なじみであった。
「くそっ、やっちまえ!」
少年兵たちのライフルが火を噴いた。
単発式だが、訓練された射撃は間断なく、邪神に命中していく。貴重なゾダニウム徹甲弾は、青い巨体をぶち抜いていった。
だん
《ブル・ダガシュ!》
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
メフィスト
じんじょう
こうら
はば
ちょうだん
だが邪神長ドゥルガの甲殻も尋常ではない。射撃の半数は、厚い甲羅に阻まれ跳弾となる。ましてまだ二百メートル以上、離れている。
火花を散らしながら、邪神は前進、少年兵との距離を狭めてきた。
はな
くらやみ
とぎ
すきま
さけ

きより せば
ねら
「首を狙え! あそこが剥き出しだ!」
レイズは、冷静に暗闇に目をこらした。
「甲羅が途切れる隙間を狙うんだ!」
んで初めて、レイズは自分のライフルを邪神に構えた。他の者とは違う、照準器付の七・六二ミリ狙撃銃である。
そげきじゅう
ばや
スコープ
素早く銃口を上げ、邪神の頸部に照準を合わせる。息を整える。 わずか一秒以下で。
れいてつ
「......死にやがれ」
握るように引き金を絞った。
冷徹な銃弾が、邪神の肉体に穴を穿つ。
てつこう
のどもと
この暗闇で、二百メートル近く離れた邪神の弱点を見事に撃ち抜いた。喉元から青黒い体液を撒き、邪神は怒りの咆哮を震わせる。
ほうこう ふる
ま
《ブル・ダガシュ!》
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
ぜつきょう
そうてん
もんぜつ
絶叫にもかまわず、レイズは照準を外さない。遊底を引き、次弾を装填。悶絶するドゥルガの眼球めがけ、引き金を握り絞った。
かたき
「アーキンの仇だ!」
つらぬ
かんつう
きょじん
再び唱えると、レイズの銃弾は邪神の目を貫き、頭蓋を貫通した。巨人の後頭部から、ばっと体液が四散する。
ひざ
どろ
ようかい
白い巨体は膝を落とし、トンネルの泥だまりにぐずぐずと溶解していった。
「ふう........」
かんせい
すごうで
レイズは、安堵の息を吐く。
息を呑む仲間たちも、やっと歓声を上げた。
「やったぜ、兄貴! ちょオ凄腕じゃん!」
げきしゅ
「って言うかさァ、さすがは義勇軍一の狙撃手だぜ!」
たが
少年兵たちは、手を高く上げ、お互いの掌を叩き合う。
ざんし

レイズは、邪神ドゥルガの残滓に駆け寄り、続けてアーキンの残骸を見下ろした。唇を噛み、目を伏せる。
てのひら たた
ざんが
くちびる
とつ
だがその耳が、突然幾つもの銃声を捕らえていた。同時に湧き起こる悲鳴。トンネルの奥から、再び邪神の咆哮が轟いた。
とどろ
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、 ギ‥‥‥》 《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、 ギ‥‥‥》
だっしゅつぶたい
「まずい！ 脱出部隊の方だ！」
たま
レイズは、狙撃銃に弾を込めた。
「あっちは女子供と負傷者ばっかだ！ まともに襲われたら全滅しちまう！」
おそ
ぜんめつ
さけ
叫んだレイズは、急いで泥を蹴立てた。
「ま、待ってくれよ、兄貴ィ！」
だ
やみ
もど
だんまつま
少年兵たちも銃を抱き、闇の奥へと駆け戻る。 重なる悲鳴は、やがて断末魔へと変わっ ていった。

《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ‥‥‥》
《チ、 ギ、 ギ、 ギ、 ギ、 ギ‥‥‥》
するど
空間を突き破り、鋭いカギルを備えた青い足が、何本も異空間から飛び出してくる。
できそこ
体長二メートルほどもあるカニとクモの忌まわしい出来損ない。位階第十一位の邪神、邪神長イ・リヴは、二十匹ほどの集団となり、地下トンネル内にあふれ出した。
じゃしん
フイスト
びき
「各隊、射撃開始！」
いつせいしやげき
護衛指揮官が右手を振る。単発式のライフルを構えた兵士たちは、一斉射撃を開始した。轟音と硝煙がトンネル内に満ちていく。
ごうおん しょうえん
とつしん
もうそく
きょり
おど
だが斉射を難なくかわした邪神群は、狂ったように突進を開始した。猛速で距離を詰め、護衛部隊に躍りかかる。
「わ、わあっっ！」
きば
先頭の兵士らが、まともに邪神に抱きつかれた。 ひっくり返り、悲鳴を上げる。鋭い牙で喉を裂かれ、カギ爪で下腹を斬り開かれた。そのまま邪神イ・リヴは、突撃を継続し た。

けいぞく
だれ
「後退しろ！ 後退だ！」
誰かの悲鳴がこだました。
「居住区へ戻れ！ ここじゃ全滅だ！」
トンネルには、十台ほどの六輪トラックが連なっていた。だが車列は、急に反転などできはしない。
焦る心がクラクションを鳴らし、その警告音が焦燥感をかきたてた。
あせ
しょうそうかん
かやろう
「早く下がれ！ 馬鹿野郎！」
「邪神が来る！ 早く！間に合わないぞ！」
のが
どろ
荷台には、びっしりと人間が乗り込んでいる。 老人、子供、身重の女性。そして包帯だ
らけの兵士たち。
むていこう
無抵抗の彼らも、我先に荷台から飛び降り、逃げ出せない者は悲鳴を上げた。
「待ってくれ！ 置いてかないでくれ！」
「子供を......子供をお願いします！」
まど
逃げ惑う人の群れに、邪神たちが飛びかかった。トラックの運転席に突っ込み、荷台にも駆け上がる
。血と悲鳴がしぶいた。
《チ、 ギ、ギ、 ギ、 ギ、 ギ……》
はんきょう
邪神たちの歓喜の声が反響する。
どとう
逃れんとする人波は、怒濤となって地下道を逆流した。
きょうらん
ほんりゅう
だがその狂乱する奔流の中から............
「.........わあんっ！」
よご
小さな女の子が弾き飛ばされた。
勢い、抱いていた犬の人形も地に転がる。
泥に汚れた宝物に、少女はすぐ駆け寄った。
「あーんっ、ペロちゃん！」
もど
おとな
泥にもかまわず、両手にしっかと犬の人形を取り戻す。逃げ惑う大人たちにもかまわず、少女は安堵
の笑みを浮かべた。
だいじょうぶ
「大丈夫だよ、ペロちゃん。お部屋に帰ったら、リムロ、洗ってあげるからね」
こうちょく
言って顔を上げ、少女はその場に硬直した。
《チ、ギ、ギ、ギ、 ギ、 ギ······》
せま
少女の眼前に、邪神のカギ爪が迫っていた。
しかも列を成し、血肉に飢えて。
「逃げるのよ！ リムロちゃん！」
誰かが少女の名を呼んだ。

だが助ける者はいない。
よだれ
しゅうあ。
まもの
小さな女の子は、ただ頭上の悪鬼を見上げるだけである。涎を垂らした醜悪な魔物たちは、喉を鳴らしてにじり寄った。
のど
「レ、レイズ・・・・」
人形を抱きしめ、リムロは目をつぶった。
「レイズ兄ちゃん、助けて! 兄ちゃん!」
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、 ギ‥‥‥!》
わななきが絶頂に達する。
せつな
先頭の邪神がカギ爪を振り下ろした......その刹那である。
「リムロっ!」
じゅうせ
声と共に、銃声が鳴り響いた。
しつ
だんだん
こうかく
こつにく
はさい
トンネルを疾駆した弾丸が、邪神の腕にぶち当たる。甲殻にめり込み、骨肉を破砕した一撃は、邪神の腕を吹き飛ばしていた。
たの
「レイズ兄ちゃん!」
頼もしい声を耳にして、少女は目を開いた。
しゅんかん やみ おく
瞬間、闇の奥に小さな光が見える。
それは駆けつけたレイズのピアスだった。
「伏せてろ、リムロっ!」
じまん
そげきじゅう
そうてん
レイズは立射の姿勢で、自慢の狙撃銃を矢継ぎ早に速射していった。
装填し、照準し、引き金を絞る。
しぼ
その一連の動作を二秒でこなした。
じゃしん
正確な銃撃が、次々に邪神を射抜く。
かみわざ
ざんぎゃく とっしん
神業が、残虐な突進を食い止めた。
《チ、ギ、ギ、 ギ、ギ、ギ‥‥‥》
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、 ギ‥‥‥》
こうら
邪神群は、背後からの射撃に右往左往する。がちがちと甲羅をぶつけ、逃げ場を求めた。
あしもと
そこへ遅れて、トンネルの先から少年兵たちも駆けつける。彼らは、邪神の足下に転がった死体の数に凍りついた。
こお

「兄貴! ちょオやベェじゃん!」
「って言うか、あれリムロじゃねエか!」
ねら
「ああ、気をつけて狙えよ!」
散開した仲間に、レイズは声を飛ばした。
「みんなが逃げるまで撃ちまくれ!」
おお、と仲間たちも射撃を開始した。
少年兵たちに、レイズほどの腕はない。
かんげき
けいぞく
だが装填の間隙を衝かれぬよう、順番に射撃を継続している。
「来てくれたか、レイズ!」
「態勢を整えろ! 我々も応戦するんだ!」
きょうげき
後退していた護衛部隊も、挟撃に出た。
かべぎわ
間断の無い銃撃に、たまらず邪神もトンネルの壁際に後退していった。
「油断するなよ、包囲するンだ!」
ほうこう きょうしん
だが彼らの目の前で、 再度時空が歪み始めた。トンネルが咆哮に共振する。
《ブル・ダガシュ!》
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
その声に、邪神イ・リヴも反応した。
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ······》
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、 ギ······》
レイズは、息を呑んで整息した。
「新手が来るぞ! みんな下がれ!」
じくうわいきょく
メフィスト
きょたい
時空歪曲から現出したのは、邪神長ドゥルガの巨体であった。
青い巨人は、ぬうっと地下トンネルに一歩を踏み出す。
かた
ひざ
ひじ
その巨体に、生き残ったイ・リヴが、わらわらと群がっていった。肩に、膝に、肘に。
きえつ
こうい
喜悦の声を上げ、イ・リヴは巨体にカギを打ち込んでいった。その合体行為を、ドゥルガも喜悦を上げて歓迎する。
かんげ
きえつ
「まずいぞ! ゾダニウム弾を...............!」
いっせい
たた
じゃしん
じゅう
護衛部隊は一斉に、ドゥルガの巨体へ弾丸を叩き込む。だが合成邪神の肉体は、その銃撃をものともせず、反撃の絶叫を走らせた。
げき
ぜつきょう

《ギレ! ブル・ダガシュー》
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギー》
「あぶねエぞ、下がれ!」
おそ
レイズの警告は、 すでに遅かった。
最前の兵たちが、一撃で斬り裂かれる。
ざんが
その残骸を踏み潰し、合成邪神は前進した。
せま
いつせん
後退する市民たちを追って、うち捨てられたトラックに迫る。さらにカギ爪を一閃。 六
輪車は、金切り声と共に四散した。
「ちくしょう、なんて奴だよ!」
かいむ
少年たちは、銃撃を邪神の背に浴びせかけている。だが肉体にめり込む弾丸は皆無だ。
メフィスト・クラス
テイ
・クラス
もはや邪神長級ではない。より上位の第十位、 邪神鬼級が相手なのだ。
レイズは、ベルトから残弾を引っこ抜いた。
「さっきと同じだ、狙いは.........」
とうとつ
あわ
と唐突に、慌てて仲間の射撃を制した。
あしもと
ふる
ゆうぜん
「やめろ、お前ら! リムロに当たる!」
見れば、合成邪神の足下で、身を丸めたリムロが震えている。
悠然と踏み出す合成邪神の一歩を、泣きそうな顔で見上げていた。
「リムロ、逃げるんだ!」
だ
はな
少女も、犬の人形を抱きしめたまま、遠く離れたレイズに助けを求めた。
「レイズ兄ちゃん!助けて!」
えもの よだれ
ま
リムロの悲痛な声に応じて、合成邪神が嬉しげに吼えたてる。
足下を見下ろし、小さな獲物に涎を垂らした。
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギー》
「レイズ兄ちゃん!」
きょだい
たた
巨大な爪を振り上げ、一気にリムロへ叩き下ろした。
「リムローっっ!」
「リムロちゃん、逃げるんだ!」
さけ
逃げる負傷者たちも振り返り、叫んだ。
リムロが目をつぶる。
レイズは、その場から駆けだそうとした。

その頭上から......
しっぷう
赤い疾風が飛び降りてきた。
てんじょう
とつじょ しんく
トンネルの天井には、幾つも通風口が設けられている。 その一つから突如、深紅の電光
が急落下してきたのだ。
「いえええええええいいっっ!」
ごと
いつかつ
雷鳴の如き、一喝である。
けん
じゃしん みぎうで
いちげき
外套をなびかせ、鋼材ほどもある剣を上段から振り下ろす。 合成邪神の右腕に、一撃は
音をたててめり込んだ。
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギー》
あつけ
ひじ
邪神の右腕が、肘から斬り飛ばされた。
だが呆気にとられるリムロめがけ、邪神はなおも斬られた腕を振りかざす。
ひとかげ
しかし現れた人影も、着地するやリムロを背にかばい、長大な剣を頭上に据えた。飛び散る体液を浴
びつつ、邪神の腕を強靭な刃で受け止めた。
きょうじん やいば
「ふーっ、間に合った! さっすがあたし!」
やけに明るく、力強い声であった。
ひとみ かがや
よご
深紅の瞳は輝きに満ち、汚れた外套は戦旗の如くたなびいている。
せいこう
ぶつかる大剣の刃は、ばちばちと聖光の火花を散らせていた。さらに背にもう一本、同一の剣も背負
っている。
ローマナ系特有の活力に満ちた瞳。
年は、まだ十代半ばに見える。

はんきょう
おたけ
こわね
だがトンネルに反響したのは、戦神の雄叫びを思わせる力強い声音であった。
「ったく、どこもかしこも邪神ばっかで嫌になるわよっ!」
さが
きょたい
はら
ゾダニウム大剣で、邪神の巨体を突き飛ばす。退きざまに、袈裟懸けに斬り払った。
かた

こうかく
たた
硬い甲殻にもかまわず、叩き潰し、体組織をぶち割る。
《ギレ! ブル・ダガシュー》
ぜつきょう
体液を宙に撒き、邪神が絶叫する。
くちびる
満足そうに、彼女は赤い唇を舐めてみせた。
「す、すげエ...・・・」
のど
レイズはごくりと喉を鳴らした。
ごかく
たった一人で邪神と互角に戦える......
そんな人間などいるはずがない。
またた
だが目の前の彼女は......
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
ふんぬ
合成邪神は憤怒の声を上げ、右腕を震わせた。
めきめきと音を立て、切断されたカギ爪が瞬く間に再生する。
《ギレ! ブル・ダガシュー》
「しつこいんだよ、下っ端がっ!」
さけ
しんく ひとみ
たいけん
叫んで深紅の瞳も、真横に大剣をふるった。
げきとつ
カギ爪と大剣が正面から激突する。
かんだか
ねんえき すばや としゃ
たんじゅう
だが甲高い金属音と同時に、合成邪神は口から粘液を素早く吐瀉した。黄色い胆汁が頭上から降り注ぐ。
「ちいいっっ!」
大剣を振りほどこうとする。
りょりょく
だがそれは合成邪神の膂力が許さない。
あえて敵手に得物を残したまま、彼女は背後へ飛び退いた。撒き散らされた粘液が、じゅうっと床を焼け焦がす。
ゆか
まね
「バカな、なんて真似をしやがる!」
あわ
そげきじゅう
レイズは、慌てて狙撃銃を構え直した。
「武器無しでどうするつもりだよ!」
援護射撃の照準をつけようとする。
スコープ
その照準器に映った彼女は..
せいぜ
笑っていた。凄絶な笑顔で。

こお
戦いの中でこそ生まれる笑みが、レイズの背を凍らせた。そして彼女は・・・・・・
「その剣、後で返してもらうわよっ!」
言うなり、左手首をひねった。
回るはずがない方向に。
じょうわん
さらに上腕を抜き外してみせる。
てんだんとう ほうしん
ねら
くちびる
中から現れたのは、四〇ミリ自動擲弾筒の砲身だ。素早く狙いをつけ、唇を舐める。
「あんたはここまでよ......!」
ごうおん
ひび
轟音が、立て続けに響いた。
擲弾が邪神の頭にめり込み、腕を吹き飛ばす。足を食いちぎり、肩を切り裂いた。
悪辣なほどの速射であった。
《ギレ! ブル・ダガシュ!》
あえ
邪神が喘ぎ、もがき苦しむ。
こうげき
それでも攻撃を止めようとしない。
せんりつ
誰もが戦慄した。
《ギレ! ブル・ダガシュー》
《ギレ! ブル・ダ.........!》
どうたい
ついに邪神の胴体が、二つに折れた。
床に青黒い体液がどっとあふれる。
どろ
合成邪神だったモノは、そのまま力無く、泥の中に崩れ落ちていった。
「あ、兄貴ィ.....」
しん
りつぜん
少年兵たちは、 深紅の戦士に慄然とした。
レイズも、彼女の正体に低く呻いた。
せんがいき
「戦鎧鬼............」
畏怖の言葉を投げかける。
「あれが戦鎧鬼......」
逃げる者も、戦う者も、みな察していた。
きゅうきょくへいき
脳以外の肉体をすべて人工化し、無数の武器を内蔵した究極兵器。戦争の化身。
それが戦鎧鬼である。
知らぬ訳ではない。だが彼女の戦いぶりは、畏怖すべきものであった。
「手こずらせたわね、まったく...............」
にくかい
たいけん
彼女は、肉塊から自分の大剣を引き抜いた。
すそ やいば
外套の裾で刃の体液を拭い落とす。

その姿に、何も知らないリムロが、とことこと近づいていった。
「お姉ちゃん、誰なのお?」
深紅の戦鎧鬼はにっこり笑い、大剣を背にしまい込んだ。
「あたし? そおねえ......」
まえがみ
わざとらしく、前髪を払う。
はら
「ま、正義の味方
って奴よ」
とつぜん
「おい、危ねェぜっ!」
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギー》
じゃしん しかばね
突然、レイズが邪神の屍を指さした。
きょたい
だっ
巨体に群生していた邪神イ・リヴたちが、再び結合を解いている。 宿主から脱した青いクモは、戦鎧鬼の背中めがけ、わななきながら躍りかかった。
「まだやる気っ............!」
戦鎧鬼は、今一度大剣の柄に手をかける。
こわね
ひび
だが頭上から、新たな声音が鳴り響いた。
テイクワン
「第一撃!」
さけ
てんじょう
きょうがく
しつぷう
澄みきった声が、力強くそう叫ぶ。
レイズは天井を見上げ、驚愕する。赤い疾風に続き今度は.........純白の天使が降臨した。
むく
白い水鳥を思わせる無垢の聖衣。
こがら
せいせんじょう
それをひるがえし、小柄な少年が降り立った。手には輝く聖戦杖。少年は邪神の群れに、結んだ聖印を突き出した。
ラウンダバウト
「迂回衝撃弾!」
ほとばし
少年の聖印から、電光が送った。
うな
とつしん
とつさ
電光は唸りをあげて、邪神群に突進する。 邪神イ・リヴの群れは、咄嗟に散開した。
だが電光も空中で四散する。
でんげき
かた
こうら
たた
しゅんじ

ひき
あとかた
邪神を追尾した電撃は、堅い甲羅を叩き割り、吹き飛ばす。瞬時に、四匹の邪神が跡形
もなく消え去っていた。
「本当にしつこい奴ねっ!」
せんがいき
こし
けんじゅう
きんぱつ
深紅の戦鎧鬼も、腰から大型拳銃を引き抜こうとする。だがその背を突き飛ばし、金髪
の少年は今一度聖印を振り上げた。
テイク・トウ
「僕に任せて、ライオット! 第二撃!」
少年は突進する邪神群に、再び力強い声を叩きつけた。
バイ
「神聖炎熱堕撃!」
しんせいじん
らんぶ
ほのお
邪神イ・リヴの群れの周囲に、神聖陣が浮かび上がる。乱舞する古代神聖文字が、炎の渦を噴き、逃
げ惑う邪神を焼き尽くした。
に
まど じゃしん
《チ、ギ、ギ、ギ、ギ、ギ......》
つめ
それが最後の呻きだった。
「お、お前は............!」
少年の正体に気づき、レイズは声を上げる。だが振り向いた少年と視線が合った途端・・・・・・息
が止まりそうになった。
とん
やわ
はだ とうじき
柔らかな金髪が揺れ、白い肌は陶磁器を思わせた。まさに聖画の天使そのもの。
ひとみ
かんしょく
とつき
その水色の瞳に、レイズは吸い込まれそうな感触を覚えた。咄嗟に声が出てこない。
クルセイダー
かんせい
ひざまず
クルセイダー
聖印をつくった。
サウンド つか
クルセイダー
しょうかん
ため
代わりに、リムロが元気な声を上げげた。
「わあっ! 聖戦官様だあっ!」
同時に、周囲からも歓声が上がった。
逃げる市民は立ち止まり、跪いた。
兵士も銃口を下ろし、喜びを噛みしめる。

みな指を折り曲げ、印をつくった。
しん
そして少年に対し、真摯な礼をとった。
「聖戦官様だ・・・・・・聖戦官様だぞ!」
「おお......なんとありがたい・・・・・・」
ほほえ
少年も微笑んで、創世神の印
聖戦官・・・・・・創世神に選ばれし奇跡の遣い手。
彼らには、召喚の為の複雑な文言を起動できる集中力が、高度で長期間に亘る修練に耐える力が、
そして何よりも不屈の信仰心が求められた。
ふくつ しんこうしん
わた
つえ
あかし
彼が握る杖は、ただの身分の証ではない。
かがや き ほうせき
どな
よご
頂点に輝く希宝石メタライトは、創世神アイオロスの力を召喚する媒体なのだ。
サウンド
いつざい
奇跡を授けられた者数万人に一人の逸材である。
クルセイダー
それが聖戦官である。
それが...............目の前の少年であった。
みなさん、大丈夫ですか!」
せんがいき
ほか
「君、ケガはない? どこも痛くない?」
びしょう
少年はリムロを振り返り、微笑する。
「うん、リムロ、平気だよお」
だいじょうぶ
「他に怪我をしてる人は
しんく
しかし答えたのは、深紅の戦鎧鬼である。
「大丈夫じゃないのはあたしよ!」
ふんぜん
怒鳴って、憤然と立ち上がった。
どろ
突き飛ばされた戦鎧鬼は、泥に半ば埋まっていた。赤い髪も、赤い外套も、汚泥で真っ黒に汚れている。拳は怒りに震えていた。
こぶし いか
ふる
「あれ、ライオット、いつ......なんでそんなとこで転んだの?」
「あんたに突き飛ばされたからよ!」
「あれえ、覚えてないなあ・・・・」
頭からぼとぼとと汚泥が地にしたたる。
たた
むな
きょとんとする少年の胸ぐらをつかみ、戦鎧鬼・・・・・・ ライオットは両手を震わせた。

「あ、あのよ、あんたらいったい......」
震えが治まるのを待って、レイズはおずおずと歩み寄った。
だがライオットは電光の速さで振り返る。
ふろ
「礼はいいからまず風呂っ!」
叩きつけるように言い放った。
「詳しい話は後よ! あたしの美貌が激減してるじゃない! とっとと案内しな!」
「わ、わかった・・・・・・」
クルセイダー
かほそい声で、レイズは後ずさる。
きんぱつ
だが今度は金髪の少年の番だった。
「ここはもうワイマール市なんだよね?」
「ああ、そうだぜ、お前ら......」
きゆうえん
「うん、救援に来たんだ」
少年も一礼して、笑ってみせた。
じゃしん
「聖戦官ジャスティスと申します。
　　　ワイマール市が邪神に包囲されたと聞いて......今、いたところです。どうぞ、よろしく」
クルセイダー
少年・・・・・・聖戦官ジャスティスは、小さな手を差し出した。
あつけ
やさ
てのひら
呆気にとられたまま、レイズは手を握り返す。 やけに暖かく、優しい掌だった。
着

【第一章 ワイマール/籠城】

かつて惑星には、八大陸があったと言う。
めっぽう
だが大変動は、八つの大陸を一つに変え、無数の文明を滅亡へと追いやった。
オールド・ハザード
《古代災厄》と呼ばれる終末である。
じゃしんてい
はんらん
すべては邪神帝ルシフェルが為した、 創世神への叛乱だった。
ほうちく
せんめつ
創世神を放逐した邪神群は、生き延びた人類社会の殲滅をも欲していた。
以来、二千年。
たが
人類と邪神群は、互いの生存を懸けて、いつ果てるとも知れぬ戦いを繰り広げていた。
フロンティア
《新大陸》
そう呼ばれる大陸の至るところで・・・・・・

その地下都市を、 ワイマールと言う。
およ
都市区画は、地下十二層に及んでいた。

居住区、商業区、行政区と地下へ進み、さらに深部に工業区、動燃区が広がっている。
さいくつ
そして最深部である採掘区は、地下六〇〇メートルに達していた。
無論ワイマールも、都市国家レーベンブルグに属する一都市にすぎない。しかし辺境の一都市にしては、あまりに未曾有の都市設備であった。
みぞ
建設にあたっては、レーベンブルグのみならず、ザクセン地方の他都市国家も協力した。聖教会、新大陸十字軍も資金と人材の双方で莫大な支援を施している。
フロンティア・クルセイダーズ
そうほう ばくだい
しえん ほどこ
なぜこの辺境に・・・・・・
きょうこく
ワイマールは周囲をイゴン山脈に囲まれ、交易路はフルダ、ホフ両峡谷を通じてかろうじて保たれているだけだ。
険しい地形に加え、厳冬も長い。
れいか
日中でも平均気温は零下四〇度以下。
そんな厳しい土地に、莫大な投資をするほどの価値があるのだろうか......
だが価値はあるのだ。
聖鋼ゾダニウム。
きた
じゃしん
やいば
ていこう
聖なる力を帯びたその金属は、鍛えれば邪神を斬る刃となる。それは邪神に抵抗できる唯一の資源であった。
ゆいいつ
ろうじょう
まいぞう
籠城は、ゾダニウム鉱山を守るための戦いであった。ましてワイマールの採掘量・埋蔵量は、ザクセン地方随一である。戦略上、最も重要な拠点であった。
りょう
ずいいち
きょてん
それゆえに、包囲されていた。
ぜつめつ
無数の邪神に・・・・・・絶滅の日まで......

温かいシャワーが全身を打っていた。
(やっと着いたわ......)
あんど
つか
とうはつ
はだ
せんじん
安堵しながら、ライオットは疲れた頭髪を洗い清める。肌にこびりついた戦塵も、削るように落としていった。
あた
かえん

（どうなる事かと思ったけど......）
かんらく
（なんとか陥落前に間に合った・・・・・・）
与えられたのは、二人部屋だった。
居住区は、地下第一層から第三層を占めている。中でも広々とした部屋であった。
浴室も広く、久しぶりの温水にライオットは安堵の息を吐いた。
らぎょう
そして......自分の裸形を見下ろした。
さい
一見、十六歳の少女である。
だが肉体のあちこちでは、接合部位が剥き出しになっていた。電子機器を外部接続するプラグも見えている。
せんとう
戦闘モードを起動すれば、シャワーの温かさを感じることもない。それどころか灼熱の火炎放射、極寒の冷気にも動じはしない。
ごつかん
しゃくねつ
とたん
（だけどなんかホッとする......）
（この気持ちも造り物なのか......）
ざばざばと赤い頭髪を洗い流した。
そんな気持ちになるのも久しぶりだった。
はだか
だがいつも、裸の自分を見ればそう思う。
どうにもならぬのを知りながら...........
（バカね、あたしも......）
からだ
ライオットはタオルを身体に巻き付け、濡れた髪に指を入れた。
「ジャスティス、お待たせ!」
とうとつ
言って、唐突に浴室から飛び出した。
さ
途端に、絹を裂くようなか細い悲鳴がこだまする。
「き、急に出ないでよ！ ライオット!」
あわ
少年は、慌ててタオルを引き寄せた。
きが
今、着替え中なんだから!」
かべ
ほ
かわ
見れば、ジャスティスの聖衣は壁で干されている。冷気に濡れた下着も乾かそうと、少年は全裸になったばかりらしい。
相棒を、ライオットは平然と見下ろした。
いつしょ
「なあによ......せっかく脱いだんなら、あたしと一緒に入ればよかったのに......」
「そ、そんなことできる訳ないだろ！ こっち見るなあ!」
こし かく
ま
か
少年はタオルで腰を隠し、壁に背を向けた。全身、真っ赤に染めている。

ふともも
無理もない。ライオットは太股の付け根まであらわにしているのだ。
「もおっ、なんて格好してるんだよ!」
ろ
「いいじゃない、風呂上がりくらい......」
「服ぐらい着てよ、ライオット! ぼ、僕だって男なんだぞ!」
「ああ、そうだったわね」
にやりと笑い、彼女は相棒を眺め回した。
「たまに確かめないと、忘れそうだからさ」
「忘れるなあ! 僕は男だあっ!」
しり
「その割にかわいいお尻してるわよね」
「あーっ、もお!出てけーっ!」
こうぎ
ライオットは、抗議と飛んでくるタオルを笑いながら避けていく。
「まあいいじゃない。温水シャワー使えるなんて、ありがたい話だわ」
だいじょうぶ
「本当、水は大丈夫みたいだね」
ジャスティスは、替えの聖衣をかぶってうなずいた。だがライオットは、首を横に振る。
えんぐん
「違うわ、水しかないの。 雪解け水が豊富だから......だから援軍も安心してんのよ!」
かみ
濡れた髪を、タオルでしごいた。
おく
「そりゃこの積雪だからね、進軍が遅れるのはしょうが しょうがないわよ。でもさ、軽装備の部隊を先発させるぐらいしてもいいじゃない!」
たの
きょうこうれんたい
「仕方ないよ、頼みの教皇連隊が来てないんだ。 レーベンブルグ軍だけじゃ、勝てないよ」
ちっ、とライオットは舌を鳴らした。
フロンティア・クルセイダーズ
おそ
「新大陸十字軍も案外、動きが遅いのね」
だま
ほほえ
ジャスティスは、黙って微笑んだ。
るろう じゅんれいしゃ
クルセイダー
彼も流浪の巡礼者とは言え、新大陸十字軍に属する聖戦官である。
せいきし クルセイダー
じゃしん
んとう
聖騎士と聖戦官で構成される新大陸十字軍こそ、対邪神戦の専門戦闘部隊だった。彼らは各地に聖教会を持ち、市民生活の防衛に従事している。
クルセイダー
せま
せんぱつ
だが十二教皇と呼ばれる指導者たちは、独自の機動戦力を有していた。選抜された聖騎士、聖戦官で構成されるエリート部隊、教皇連隊がそれである。
とうちゃく
かんらく

ワイマールへの援軍は、その教皇連隊の到着を待っていた。だが待ち過ぎれば、陥落の危機が迫ることになる。
まん
「僕、我慢できなかったんだ・・・・・・教皇連隊が来るまでなんて・・・・・・」
「分かってるって。だから来たんじゃない」
きんぱつ
ライオットは数日前を思い起こし、相棒の金髪を撫でてやった。
「来たからにはやるわよ、いいわね?」
「うん、僕、全力で戦うよ、いつも通り」
「それはだめ!」
くちびる
急に口調を変え、ジャスティスの頭をこづく。 ライオットは、うんざりして唇を曲げ た。
サウンド
「今のうちに言っておくわよ。あんたが続けて使える奇跡は二回まで! いいわね!」
「三回だよ~」
ぼやいて、ジャスティスは唇をすぼめた。
「それが僕の全力じゃないかぁ」
「全力使っちゃまずいって.........あんただって分かってるでしょうが?
あたし、あんたのために言ってるのよ......」
「うん、ありがと。 でも......」
ちんもく
少年は、うつむいて沈黙する。
ライオットは、心配げに相棒を見下ろした。
今まで何度、辛い思いをしたことか。
分かっていても、同じ事の繰り返しだった。
そんなジャスティスだからこそ・・・・・・
(せめてあたしだけは......)
忠告したとて、聞きいれもしない。
たんそく
頑固な相棒に、ライオットは嘆息した。
「ま、気をつけるのよ」
かべ
いちぐう
と、壁の一隅が呼び出し音を鳴らす。
部屋に備え付けられた都市内通話器が、二人の沈黙をかき消した。
「はい、ライオットよ」
『義勇軍司令官がお呼びです』
通話器は、事務的にそう告げた。
『行政区第七地下層、統合作戦本部までおいでください。 定例会議にご出席いただきたいのです』
「すぐ行くわ」
ライオットも事務的に答える。
もど
せんがいき
通話器を壁に戻すと、一転、戦鎧鬼の顔を取り戻した。
とたん
こし
ろうじょう
「呼ばれたわ。会えるらしいわよ、このワイマールの指揮官に・・・・・・ここまで籠城を持ちこたえた、義勇軍の司令官にさ」
ジャスティスもこくりとうなずいた。
クルセイダー

少年もまた、聖戦官の顔つきに戻っていた。

「うわあ、広いね......!」
ドアが開くなり、ジャスティスは感嘆の声を上げた。
地上から第十二地下層まで連なる大型エレベーターは、大型車両でも運搬できる代物だ。大仰な駆動音が耳障りだが、速度も速い。
そのエレベーターを降り、二人は行政区と呼ばれる第七地下層へ歩を踏み出した。
途端に、長く広い街路が四方へ伸びる。
とうかつ
街路の左右には、ワイマールの政治行政を統轄する部署が整然と並んでいた。
「まあ、お役所通りにしてもさ...・・・・・」
腰に手を当て、ライオットは白い息を吐く。
「こうも殺風景だと気分が滅入るわね」
照明は落とされ、街路は薄暗い。
こお
かんしょく おどろ
体温を常に自己調整できるライオットも、吐く息が凍りつく感触に驚いた。ジャスティスも聖衣の上に防寒着を重ね、浸透した外気に耐えている。
しんとう
びら とうちゃく
二人はすぐに指示された扉に到着した。
「間もなく定例会議が始まります。 どうぞ」
左右の衛兵が敬礼を送る。
統合作戦本部...............とは言っても、大会議場をそう呼んでいるらしい。広々としたホールには、無数の連絡士官が集まっていた。
れんらく
「第六階層指揮所、定時連絡を............」
「第二工兵小隊、第四十六区画へ・・・・・・」
「ゼードラー中隊長、本隊がお呼びです」
並んだテーブルには、無数の通信機材が列を成している。飛び交う声もざわめきのように部屋に満ちていた。
そのテーブルを行き過ぎると・・・・・・
だいしきゅう
「これ、第三補給部に大至急!」
えんたく
きんぱつ
かがや
やわ
こうさい
ひとみ
一人の少女が、円卓の正面で指示を飛ばしている。 腰まで届く金髪は生気に輝き、柔らかな光彩を放っていた。青い大きな瞳には幼さも残るが、横顔は凛としたものだ。
えりしょう
ひとふ
ちょうけん たずさ
あかし
襟章の付いた冬季野戦服の腰には、一振りの長剣を携えている。指揮官の証であった。
よ じょう
やせんびょうとう
「これ、第四地下層の余剰物資です、急いで再配分するように伝えて・・・・・・あと、野戦病棟の空きベッド、確認できる? 第十二区画で凍傷者が三人が出て······ええ、お願い!」

かくにん
とうしようしゃ
けいこう
少女は、金髪が乱れるのもかまわず、周囲の士官たちに指示を下していた。義勇兵たちも、携行連絡器に向かって声を飛ばす。
さながら小さな司令部である。
（なによ、子供までいるじゃない......）
ライオットは、思わず唸った。
ひろう
きわ
誰もが疲労の極みにあるはずだ。

しょうすい
みじん
だが少女に、憔悴は微塵も感じられない。
それどころか、見ているだけで活気が湧いてきた。天性の素質と言わざるをえない。
(あんなに若い指揮官もいるんだわ)
そば
かんたん
思った側で、ジャスティスも感嘆した。
「なんだか......すごい子だね......」
その声で、周囲の視線が集まった。

いあつかん　あつとう
士官たちはジャスティスの聖衣に気づき、ライオットの威圧感に圧倒される。
「あの方が......今日いらした......」
クルセイダー
「おお、聖戦官様と・・・・・・」
もく
ジャスティスも黙して一礼した。
きんぱつ
そして金髪の少女も、ふと視線を上げた。
「ああ、お待ちしてましたよ!」
かたさき
おど
少女は鮮やかな金髪を肩先で踊らせ、ライオットの手を強く握りしめた。
じゅうし
ごらいえん
「ワイマール義勇軍司令官、銃士ロエルと申します。御来援、感謝しております」
「あ、あんたがワイマール市民義勇軍の最高指揮官なの?」
あき
おどろ
ライオットは、呆れるほどに驚いた。
いく
「いったい幾つなのよ? 若いのにしっかりしてるわね」
きょうしゅく
そんな、と言ってロエルは恐縮した。
「驚かれますよね、まだ十三歳ですから。ただ、生き残った評議員は私だけですし...
父評議長を務めていましたので」
「評議員? その若さで?」
「十二歳過ぎれば、就労年齢ですから.........　父が存命なら良かったのですが、先の襲撃で亡
くなり...............まあ、父の代理というわけです」
ロエルは、恥ずかしそうに金髪を掻いた。
だが一万二千人の絶望した市民がすがりついた少女なのだ。市内警備を担当する銃士で
あり、若すぎるほどの評議員。
しゅうげき
ひそう
みじん
ましてーか月前に父を殺されている。　なのに悲壮さは、微塵も感じられなかった。
(ただの十三歳じゃないわ)
フロンティア
「えっ、ジャスティス様が?」
おな
たくましい、〈新大陸〉の女であった。
「僕と同い年なんて......信じられないよ」
ジャスティスの言葉に、ロエルは少しだけ頬を紅潮させた。
こうちょう
「ごめんなさい、年下かと思って......」
「様、なんて付けないでください」
あいさつ
ジャスティスもいつも通りの挨拶を返す。
じゅんれい
「僕、ただの巡礼です。　ザクセンは僕の故郷だし...............まあ、間に合って良かったです」
二人は向かい合って、手を握りしめた。

へきがん
共に金髪碧眼、典型的ザクセン人である。
と、そのロエルの横顔に、傍の士官が案じる顔を見せた。
にじ
しん
どことなく似た二人であった。同じ人種というだけではない。 純真さが自然と滲み出ている。芯の強さも感じられた。
かたわら
からだ
いっぱい
ろうじょう
どの
「ロエル殿、御食事の用意が・・・・・・」
「後にするわ、これから定例会議でしょ」
「しかし今朝からずっと食事抜きではありませんか。それではお身体が......」
だがロエルは、健気にウィンクして見せた。
「食べれる時に食べればいいのよ。それができないなら何食でも抜くわ。みんなだって、お腹一杯食べてる訳じゃないしね」
まえがみ
言って、前髪を掻き上げる。
ライオットは、頼もしそうにロエルを見た。
「籠城向きね。さすがだわ」
せんがいき
みよう
すると戦鎧鬼の横で、妙な音が響いた。
ひび
お
とつぜん
赤くなったジャスティスが腹を押さえ、照れ笑いをしてみせる。
「えへっ、僕はお腹空いてたみたい......」
ざか
「しょうがないわね、育ち盛りは............」
「なら、ジャスティス様に御食事を......」
言ったロエルに、ジャスティスは真っ赤になった。
がまん
「い、いいんだ、みんな我慢してるのに」
「あら、でも......」
「そうそう、我慢は身体によくないぜ」
突然、割り込んできた声に...............
ライオットは思わず背後を振り返った。
クルセイダ
おうえん
「しかし聖戦官が応援に来たとは聞いてたが......まさか子供とはねえ」
きょく
長身巨軀が、入り口に踏み込んできた。
にお
口元に湯気の立つカップを運び、うまそうにすすり上げる。その湯気の匂いに気づき、ライオットは眉をひそめた。
まゆ
「なんなの、あんた? これから会議だっていうのに酒なんか呑んでるの?」
「会議だから呑むのさ」

にやつき、男はもう一口すすってみせた。
きんぱつ
あと
こんわく
さっそく
ずうたい
刈り込んだ金髪をがりがりと掻く。
ゆうぜん
たばこ
白い野戦服を着慣れた男は、悠然と曲がった紙巻き煙草に火をつける。二メートルに達するほどの大男であった。
困惑しつつも、ロエルは笑ってみせた。
しょうかい
「えっと........紹介します、 ジャスティス様」
「ジャスティス・・・・・・だよ、 ロエル」
ようへい
ぐうぜん
「じゃあ、ジャスティス・・・・・傭兵のバウザーよ。 偶然この街に居た縁で、市民義勇軍に参加してもらったの」
「よろしく頼むぜ、ジャスティス」
「は、はあ......どうもです」
けいしょう
たばこ
早速、敬称を省き、バウザーは少年の小さな手を握りしめた。煙草をふかしたままの傭兵に、ライオットは顔をしかめた。
たよ
「図体はでかいけど、頼りになるの?」
どうかなと笑い、バウザーは席に着く。
あご
ライオットは今一度、その男を見回してみる。角張った顎はもちろん、首筋に無数の傷痕が残っている。 野戦服を適度に着崩し、動作を自由にしていた。
きくず
ふるつわもの
どこから見ても、戦場の古強者である。
信用はできそうである。
信頼できるかは別だったが。
「おっと、さっきはありがとよ」
ひび
今度は、ひどく若い声が響き渡った。
わた
入り口には、一団の少年兵が姿を見せていた。その先頭に立つ少年が、鼻をすすりジャスティスに視線を向ける。
しょくりょう
「けど助けてもらってなンだが、あんたらが来たおかげで食糧分ける頭数が増えたンだぜ。そこんとこ、良く分かってもらいてェな」
「レイズ! なんてこと言うのよ!」
はだ
ロエルは立ち上がって、先頭の少年の袖を取った。だが浅黒い肌の少年は、乱暴にその手を振りほどく。
「だってそうだろ! 二人兵隊が増えるヨか、牛が二頭来た方が今はありがたいぜ!」
「お前、うまいこと言うなあ」

たた
感心して、バウザーは手を叩いた。
まゆ
だ
ライオットは、ふてぶてしい成りの少年を眉をひそめて見下ろした。
ちかごろ
「誰かと思ったら、さっきのガキどもじゃない。まーったく、近頃のガキは礼儀ってもんを知らなくて困るわ」
「けっ、礼儀だとヨ!」
ピアスをいじり、少年兵は鼻を鳴らした。
おそ
ひんみんがい
わめ
「恐れ多くもこのレイズ様はよォ、ワイマールの貧民街じゃ、ちっとは名の知れた男だぜ!助けてもらったぐらいで礼でも言うと思ったら大間違いだぜ!」
おおまちが
ていおう
「そおそお、レイズの兄貴はワイマールの帝王! ちょオ有名な救世主!」
「って言うか、義勇軍一の狙撃兵!」
えがお
そげきへい
喚く少年兵に、ライオットは頭を抱えた。
「こんな奴らとやってけって言うの?」
だがロエルは、血相を変えてジャスティスに頭を下げた。
ふだん
「ごめんなさい、ジャスティス! この子、普段から教会にも行かないような子で......」
「ああ、僕は別にいいですよ。あの子の言う通りだし」
ジャスティスはにっこり笑って言う。
その笑顔が、レイズの怒りに油を注いだ。
おれ
「あの子ォ? 俺をあの子なんて呼ぶな!」
むなもと
レイズは、ジャスティスに近づくと、ぐいとその胸元をつかみ寄せた。
「レイズ! 失礼よ!」
クルセイダー
「うるせェ、ロエル! 聖戦官だからって、俺がビビると思ったら大間違いだぜ!」
さすがに、周囲のざわめきが停止した。
あわ
ロエルは慌てて、顔面を青くした。
「ライオットさん! 止めてください!」
「えっ、なんでよ?」
ライオットは、急の指名に視線を泳がせた。
しんけん
だがロエルの声は真剣である。
「あの子、乱暴なんです! いつも喧嘩ばっかりして! 私の言うことも全然きかないし...............だいたい信仰心ってものが......」
しんこうしん
ゆうぜん
だがライオットは悠然と、椅子にだらしなく腰掛けた。
こしか
「なあに、不良少年君ごときが、 かなうジャスティス様じゃあないわ。 ほら...............」

確かに............ジャスティスは笑っていた。
天使めいた笑顔で、レイズを見つめている。
「ああ、ごめん。僕、君のこと年下だと思ったんだ。間違ってたら許してね」
「許してね、じゃねェよ! お前、だいたい幾つだよ!」
「僕? 僕は十三歳。君は?」
「じ、十二歳だよ......」
おどろ
へえ、とジャスティスは驚いて笑う。
おとな
くしゅ
「大人っぽい顔してるけど、やっぱり年下なんだ。レイズだよね? これからよろしく」
ごき
にぎ
両手でレイズの手を握り、にこにこ笑いながら振り回す。呆気にとられるレイズに、仲間たちが檄を
飛ばした。
「兄貴、ちょオ負けてるよ!」
「って言うか、年上だからビビってんの?」
「バカ言うんじゃねェよ!」
握手を振りほどき、レイズは叫ぶ。
さけ
えがお
だが目の前では、まだジャスティスがにこにこと笑っている。 その笑顔に、レイズもた
まらず口ごもった。
フロンティア・クルセイダーズ
「だ、だいたいよォ、新大陸十字軍が負けたから、俺たちがこんな苦労してんだぜ!」
「あっ、そうだよね」
ぜんめつ
クルセイダ
「だろォ? 街を守るのが役目なのに、さっさと全滅しやがって! 聖戦官だって十人も いたんだぜ!」
「うん、それも聞いたよ」
クルセダー
「だからよォ、俺は聖戦官なンて信用しないワケ? 十人いても勝てなかったンだぜ?
だったら今更、お前一人来ても勝てるワケねェだろうが? ああン!」
いまさら
「そおそお、兄貴の言う通り!」
じゃしん
「って言うか、理路整然って奴?」
クルセイダー
びしょう
しかし聖戦官は、微笑を崩さずうなずいた。
「本当、レイズの言う通りだよね」
「だろォ? お前一人来ても、たいした役には立たねェんだよ!」
いつしょ
「うん、きっとそうだね。だからさあ、一緒に戦おうよ!」
再び、ジャスティスはレイズの手を握った。
そげきへい
おうえん
「君、義勇軍一の狙撃兵なんだろ? だったら僕に力を貸してよ!
応援が来るまで、一緒に邪神と戦おう! 力を合わせれば、絶対に勝てるからさ!」
「はあ?」
レイズは、もう一度呆気にとられた。

だが構わずに、ジャスティスは握手を続ける。 にこにこと笑ったままで。
ぜん
少年兵たちは唖然として、口を開けた。
「ちょオ............変な聖戦官」
クルセイダー
「って言うか、あいつ、絶対おかしい......」
ぼうぜん
くしょう
ロエルは呆然とし、バウザーは苦笑した。
「たいした相棒だぜ、ライオット」
ようへい
傭兵は、音を立てて酒をすすった。
あき
クルセイダー
「呆れた聖戦官だな。 レイズよか一枚上手だぜ」
だま
ライオットも黙って微笑するだけだ。
ほほえ
そんなやりとりには気づきもせず、ジャスティスは微笑みを輝かせた。
「よろしくね、レイズ!」
「あ、ああ、よろしく............じゃねェ! 俺の話はまだ終わってねェぜ!」
とうはつ
いらだつレイズは、頭髪をしきりと掻いた。
「だからよォ、俺が言いてェのは...」
「もうその辺にしておけ、レイズ」
ひび
低く響く声が、その場を制した。
だばなし
「定例会議の時間だ、無駄話は後にしろ............」
その声に、一同が振り返った。
ジャスティスは、思わず声を詰まらせる。
とつさ
ライオットも、咄嗟に身を硬くした。
ゆうき
現れたのは、幽鬼のような男だった。
くろかみ
みわた
長い黒髪を背に垂らし、青ざめた顔で一同を見渡した。ふらついた足を支えるのは、に入った曲刀である。
きょくとう
全身、死相とも言える姿だった。
鞘聯
さと
「すぐに始めます、 ハヤテ様・・・・・ところでこちらが......」
うなずいたロエルが言いかける。
だが悟ったのか、すぐに男は言葉を制した。
ルセイダー
せんがいき
「存じている、聖戦者ジャスティスと戦鎧鬼ライオット・・・・・・」
「あんたは......?」
れんらく

問うライオットに、男はうなずいた。
「ヤマトの国の住人、ハヤテだ。義勇軍のいわば‥‥‥軍師役を務めている。今夜からは、
我々の軍議にも参加していただこう・・・・・・」
無表情なまま、一礼をする。
そして彼の言う、軍議が始まった。

えんたく
一同は、円卓に会した。
連絡士官やレイズの仲間たちは、席を外されている。代わりに義勇軍の上級士官を始
め、市民の代表らしい人物が入室していた。
(なるほど民主的な街だわ‥‥...)
おどろ
ライオットは、驚くと同時に感心した。
みと

都市国家に属しながらも、 ワイマールは自治独立を認められている。
それほどまでに、戦略的に重要な都市なのだ。
ワイマールが産出する戦略物資は、幾つもの都市国家、聖教会、新大陸十字軍に分配されている。い
ずこかの庇護を受け、分配に偏りが出れば争いになりかねない。
ひご
かたよ
にぎ
選ばれた評議員は、まさにザクセン地方の命数を握っていると言えた。
「すまんが、このままで失礼する............」
なが
とハヤテだけが、運ばれてきた長椅子に身を横たえた。動きはややぎごちない。
つら
「まだ立つのも辛くてな......」
「なあに構わねえさ」
おうよう
バウザーはだらしなく椅子に背をもたれさせ、鷹揚に破顔した。
きんしん
「ただ、居眠りはするなよ。 不謹慎だからな」
「おっさんじゃあるめェし!」
レイズは、耳のピアスをいじくった。
「ハヤテの大将は、礼儀正しいおサムライだぜ! 俺たち被支配階級とは違うワケ」
いつしょ
「けっ、俺とお前を一緒にすんな」
「よろしくやろうぜェ、被支配階級」
バウザーは、さも嫌そうに顔をしかめる。
だま
だがハヤテは、黙って会話を無視していた。
わか
わり
(若そうな割に......)
ライオットは、その横顔を観察した。
死相さえなければ、美しい男であった。
たんせ
ま

青ざめているが、端整な顔立ち。睫も長く、憂いに満ちた表情は涼やかでもある。
みよう
恐らくまだ三十代。だが妙に老成した感があり、それでいて青年のような横顔だった。
「静かにして、みんな……」
たた
しょうかい
おうえん
クルセイダー
せんがいき
ロエルが手を叩いて、軍議を開始した。
「まず、紹介します。
　　応援に来てくれた聖戦官ジャスティスと戦鎧鬼ライオット……今日からお二人とも、定例会議のメンバーに加わっていただきます」
ジャスティスは、周囲に深々と礼をした。
椅子にもたれ、ライオットも一礼する。
ロエルもうなずき、二人に向き直った。
「それで……お二人にはいろいろお訊きしたいことがあります。幾つか質問を……」
「まずは援軍だ」
口早に、ハヤテが問いかけた。
せっしょく
じゃしん
「我々はここしばらく、外部との接触を断たれている。
　　邪神側が、断続的に通信妨害を行っているせいだ。
　　おかげで援軍がいつ来るか、皆目つかめていない」
かいもく
せつぱく
切迫した声であった。
一同の視線もジャスティスたちに集まる。
そしてハヤテは、息を整えた。
フロンティア・クルセーダーズ
ちゃくとう
そうねん
「レーベンブルグ軍でもいい、新大陸十字軍でもいい・・・・援軍はいつ、どれだけの兵力を
　　持って救援に来るのだ? それを聞かねば、この先の籠城に見通しが立たん……………!」
せき
言って、ハヤテは咳ごもった。
ろうじょう
心配げに見つめるロエルにうなずき、ジャスティスが立ち上がった。
「あと一週間だとお考えください」
はっきりとした声で言い切った。
となり
「レーベンブルグ軍は、すでに二個師団二万四千の兵力をもって隣の衛星都レマーゼンに着到しています。新大陸十字軍教皇連隊が到着次第、こちらに進撃する手はずです」
きょうこうれんたい
しだい
しんげき
「まったく、ちんたらしやがって……..」
えんたく ながぐつ
どかんと、レイズが円卓に長靴を載せた。
はな

「レマーゼンならここから五oキロと離れてねエぜ。 この寒波とは言え、急げば二日とかからねえ。
とっとと来ればいいんだよ」
「意見を言う前に、まず足を下ろせ!」
壮年の士官が、血管を浮かせて怒鳴った。
ほう いもう とつば
「邪神の包囲網を突破するには、教皇連隊のような精鋭部隊が不可欠だ! そんな事も分からんのか!」
へいへいと笑い、レイズはそっぽを向く。
真っ赤になって激する士官をなだめ、ロエルは今一度ジャスティスを見つめた。
「では数日中に、レマーゼンまで教皇連隊が来てくれるのですね?」
ちが
こんきょち
れんらく
「それは間違いありません。 すでに根拠地ゲルマニアを進発したと連絡がありました」
「おお……!」
びみょう
一同は大きくどよめいた。
ゆいいつ
えんぐん
彼ら唯一の希望は、援軍である。
だれ
かんき
その希望を強める言葉に、誰もが歓喜の声を上げた。ただし、ハヤテ以外は....
「微妙な日数だな……」
あご
軍師は、顎をつまんで叩くように言った。
ふしん
ライオットは、不審そうに問いかける。
ほきゅう
「なによ、補給物資が心配なの?」
「もって五日だ、それ以上は無理だろう」
さらりと言ったハヤテに、ジャスティスはぽかんと口を開けてみせた。
しんこく
「そ、そんなに深刻なんですか?」
「元々、 ワイマールの人口は七万ほどなの」
代わって、 ロエルが口を開いた。
じゃしん しゅうげき
ろうじょう
「それが邪神の襲撃を受け……現在、籠城しているのは一万二千人弱。
小麦だけでも一日当たり一〇トン近くが必要なのよ」
しょくりょうじきゆう うと
まじめ きょうがく
食糧自給に疎いジャスティスは、真面目に驚愕する。まさに終局であった。
せきばら
そこで、 ロエルが一つ咳払いをした。
こども だっしゅつ
「なんとか女子供は脱出させたいけど・・・・・・」
「まったくだ」
けがにん
ハヤテも、重苦しい声で語り始めた。
じゅうしようしゃ
せんとう

むだ
「それに重傷者だ・戦闘要員以外に貴重な食糧を使うのは、物資の無駄だからな」
あた
「怪我人や子供に食糧を与えるのが......物資の無駄なんですか?」
ジャスティスの顔が険しくなる。
だが気にもせず、ハヤテはうなずいた。
「一人見捨てて、一人助ける。それぐらいの計算ができなければ、籠城など無理だ」
クルセイダー
そうではないかと問うて、聖戦官の少年に目を向ける。ジャスティスは、ただ沈黙した。
ライオットも、あえて無言でいる。
ちんもく
ハヤテの意見は、軍師らしい正論だ。
あま
無傷で勝てるほど、甘い戦いなどない。
「けど食糧は、まだましなのよ」
ロエルは、健気に笑って言った。
だんぼう
しんにゅう
とうし
「問題は燃料なの。暖房無しでは、零下六十度の寒気が侵入するわ......みんな凍死ね」
しせつ
いのちづな
確かに地下十二層の施設を暖める燃料こそ、この都市の命綱だ。戦略や戦術を語る前
に、まず補給を語るべきであった。
「まあ、逃げる訳にもいかねえからな......」
きんちょう
ひくつ
ひび
緊張を解くように・・・・・・湯気の立つカップをすすり、バウザーは卑屈な笑いを響かせた。
みなごろ
あきら
じゃしん
じゅうだん
こうふく
「邪神相手に降伏はできねえ。皆殺しだからな......それに奴ら、諦めもしねえだろ」
「ええ、それは期待しないで」
ロエルは、ぎこちなく笑ってうなずいた。
「地下にゾダニウム鉱山がある限りはね」
それさえなければ、こんな包囲戦にはならなかったであろう。
こうせん
しかしだからこそ、ロエルたち義勇軍が一か月も抗戦できたのだ。豊富なゾダニウムで銃弾を量産し
、邪神群を迎え撃つ。他の都市では決してできない戦法である。
むか
「だからあれだけの邪神を投入してるんだ、まったくキリがねえぜ」
バウザーは、さも嫌そうに顎を掻く。
その声が終わらぬうちに、ライオットがゆっくり挙手を示した。
きつかく
「それが錯覚なのよ」
ライオットは、座したまま発言した。
たび
そうぐう

「あんたら街に閉じこめられて出ようとする度に邪神に遭遇してる。だから街の外周にびっしり邪神がいると錯覚してるのよ」
「錯覚? そんなバカな!」
「本当なの?」
こうさ
レイズとロエルの声が交叉する。
だがジャスティスも力強くうなずいた。
サンクチュアリ
つ
「もしそれだけの邪神がいるなら、包囲などする必要はありません。聖防陣を突き破り、一気呵成に鉱山施設を破壊してしまうでしょう。 それをしないのは…… 邪神の戦力にも限りがあると言うことです」
かせい
せつ
じゃしん
すでにジャスティスの声は、邪神退治の専門家のものである。
ライオットも落ち着いた声で続けた。
「邪神どもは……あんたらを監視してるのよ。逃げ出そうと動き出せば、そこへ戦力を集中する。だから何度も叩かれる…………」
たた
きょう ふ
がいえん
「ですから僕たちも街の外縁で邪神群と遭遇しました。
しかし一点突破すれば、追撃は一度だけでした。
そう何度も攻撃できる余力は、敵にも無かったんです」
こうげき
人々は、その言葉に息を呑んだ。
「邪神の戦力にも限りがある……」 ロエルは、少年の言葉を復唱した。
「と言うことはわたしたち……」
「ええ、勝てる見込みがあります」
ジャスティスは強い声で断言した。
しょうもう
おうえん
「邪神も消耗しています。 持ちこたえれば、必ず応援が来ます。
その時には必ず、街の内側と外側から邪神を挟撃できるでしょう。
その時こそ、勝利の時です……!」
きょうげき
クルセイダー
そしゃく
一同は、聖戦官の言葉を咀嚼した。
ロエルも力強くうなずくと、おもむろに軍師を振り返った。
「・・・・・・ ハヤテ様はどう思われます?」
軍師はうつむいて指を組み
やがてライオットに問いかけた。
きしゅう
ぼうぎょせん せんめつ
「敵は最初の奇襲で、三重の防御線を殲滅した。防備の一個師団もろともだ・・・・・・」
恐怖を思い起こし、座が静まり返る。
クルセイダー
じんち
とうし

「一万の兵はもちろん、十人の聖戦官もすべて陣地ごと凍死していた。
それだけの魔導を行使する邪神か血盟者が指揮を執っているはずだ。 その脅威をどうする?」
けつめいしゃ
きょう
しょうこ
「直接、戦わないと分からないけど・・・・・・」
ざっくばらんに、ライオットは口を開いた。
ノイズ
「その手の強力な魔導は、 何度も使えるもんじゃないわ。 二度目を使ってこないのが、
その証拠でしょ?親玉も消耗してると思うのは………甘いかしらね?」
あま
めいもく
めぐ
ハヤテは、瞑目して思考を巡らせた。
おんぞん
「敵が戦力を温存している可能性もある。 我々に援軍が来る・・・・・・ぎりぎりの時までな」
にんしき
それもまた、冷静な認識である。
だがバウザーが、笑ってその声を制した。
「いや、その可能性は低いぜ」
ななもと
たばこ
バウザーは、胸元から煙草を取り出した。
ろうひ
「一日過ぎれば、援軍もワイマールに近づく。時間の浪費は、敵にこそできねえだろ。
邪神は必ず、ここ数日に襲撃を集中するぜ」
うげき
ロエルは同意を求めて、 軍師に振り向く。
「ハヤテ様……?」
「分かった……とにかく決戦は近いと言うことだ……ならば、あと六〇〇名動員しよう」
そくだん
ハヤテもまぶたを開き、即断した。
ふくそう
「現在、義勇軍の兵力は約一二〇〇名だが……一八〇〇名まで増員し、再編制するんだ。それ以上の動
員は、後方活動に支障が出る。 明日中に、銃を取ってもよいと思う者を集めるんだ。
すぐに再編制にかかるぞ」
ししょう
じゅう
と、初老の男性が立ち上がった。
服装から察するに、都市行政官らしい。
「青年男性は、ほぼ全員従軍しております。 これ以上動員するならば、動員年齢を引き上
げるか引き下げるかしませんと・・・・・・」
「両方やるしかないな。 でなければ、六百名も集まらんだろう」
ハヤテは、ため息を吐いて司令官を仰ぐ。
ほほえ
ロエルも微笑んで、ジャスティスとライオットを指し示した。
えんぐん
「幸い、心強い援軍が来てくれました。 お二人は、
反撃の決定打になってくれるはずです。その事を伝えれば、みんなの士気も上がるんじゃない
かしら、 広報官?」
若い行政官が起立して、うなずいた。

「その手で動員をかけます、お任せを」
みわた
せきばら
ロエルは一座を見渡し、咳払いをした。
れつせい
「私たちは確かに劣勢です。 しかしまだ負けてはいません。
援軍が来るまであと数日、耐え抜きましょう......!」
「援軍が来るならやるしかねえなあ......」
レイズに向かって、ロエルは軽く微笑んだ。
きょうきゅう
「私たちの街は、 ザクセン全土にゾダニウムの武器を供給してるのよ。それを忘れないで」
かんらく
じゃしん きょうい
さら
「ここが陥落すれば、 ザクセン全土が邪神の脅威に晒される・・・・・・敗北はできん」
だれ
きょうたん
ハヤテの言葉に、誰もが無言で同意する。
ライオットは正直、士気の高さに驚嘆した。 (さすが一か月耐え抜いただけはある......)
ジャスティスと黙して視線を合わせる。
少年も固い結束を目の当たりにして、嬉しそうに微笑んでいた。
「物資の統制に関しては、後で報告します」
ロエルが散会の合図を出した。
かんりょう
「ハヤテ様は防衛区画の再検討にかかってください。 明晩には再編制を完了します。
それまで各自、各部隊に戻って警戒を続けてください、以上!」
もど
けいかい
いそが
「やれやれ忙しくなるぜ」
バウザーも立ち上がり、背を伸ばした。
「ま、今夜だけはいい夢でも見るとしよう」
ふる
ライオットは、両手を黙って見下ろした。
こぶし
奮い立つ戦意は拳に込められ、言葉になどできはしなかった。

んけい
〈主よ......大いなる凍てつく陰茎よ......〉
〈我が腹に新たな落とし子宿し給え......〉
あんこく
あた
〈我が腹に新たな種を・・・・・・与え給え......〉
闇黒に向かい、男が語りかける。
よくよう
ひび
こわね
抑揚の無い響き。 ざらついた声音。
いの
その忌むべき祈りに、闇が鳴動した。
めいかい

おくそこ
きえつ
冥界の奥底から、喜悦の声が湧き起こる。
《エグ……ンガイ・ヴェール・・・・・・》
《エグ・・・・レグ・・・・・・ンガイ・ヴェール・・・・・・》
ふる
闇黒を震わせる声に、男はうっとりと目を閉じた。
いだい
〈おお、偉大なる主ンガイ・ヴェール・・・・・・>
だ
<早く我が身を抱いてくれ......〉
はら
〈早く我が身を孕ませてくれ......〉
男は闇黒に身を投げ出した。
渦巻く闇黒は、その裸形を包み込む。
えんりょ
今度は男が鳴を上げる番だった。
〈ああ・・・...至福の時だ・・・・・・〉
〈たまらぬ......主よ、私は......〉
しょうがい
〈私は生涯、主の妻たる事を誓おう......〉
〈ああ......主よ......我が夫よ......〉
みもだ
闇黒の愛撫に、男は身悶えを繰り返した。
全身が痺れるような快感に包まれる。
ふく
と、男の腹が異様に膨れ上がった。
おのれ
男は嬉しげに身をくねらせ、己の下腹を撫でさすった。
〈さあ参れ・・・・・・落とし子よ......〉
〈遠慮はいらぬ・・・・・・我が腹を裂け・・・・・・〉
とつぜん
さけ
応じて、くぐもった叫びが聞こえた。
うで
と突然、黒い腕が腹を突き破る。
だが男の喜色は変わらない。
ただ快楽に満ちた表情を続けるだけだ。
うで
にぎ
ほほえ
飛び出た七つの指を持った腕を握りしめ、男は満足そうに微笑んだ。
はもん
こしやく
〈生まれ出たか、新たな落とし子よ......〉
腹をさすり、男は語りかけた。
クルセイダー
〈ワイマールの街に聖戦官が入った......〉
ろうじょう
<小癪な義勇軍も籠城を続けるようだ・・・・・・〉
ぎぎっと腹の中で何かが叫ぶ。

嬉しげに、男も目を細めてみせた。
〈心配するな、私も行く......〉
〈偉大なる主ンガイ・ヴェールのため・・・・・・〉
男は闇黒を抱きしめ、まぶたを閉じた。
〈芽生えた希望を摘み取ろう.....〉

サンクチュアリしょうかん
「聖防陣召喚・・・・・・」
ジャスティスは目し、とんと聖戦杖で床を突く。聖光が音もなく広がった。
光の波紋は、やがて古代神聖文字の連なりへと転じていく。
「ふうっ......」
さんぱつ
あせ
金髪の少年は、額の汗を拭った。
ぬぐ
すでに燃料庫の床には、聖防陣が描かれている。だがハヤテを振り返り、ジャスティスは弱ったような表情を見せた。
せいき
アイフエンス・サウンド
こうせいぼうへき
「本当は防御用奇跡の方が効果的なんです。
攻性防壁にもなりますし......でもここ全部、防御用奇跡を付帯させるのは僕には無理ですので......」
少年が指したのは、ワイマール地下層の立体地図である。そこにはハヤテの手によって、無数の赤い書き込みがなされていた。
サンクチュアリ しょうかん
サウンド
朝から各所をまわり、
ジャスティスは聖防陣を召喚し続けていた。奇跡と異なり、神官や聖騎士でも描ける聖防陣は、最も汎用的な対魔導防御策であった。
はんようてき
ノイズぼうぎょさく
サンクチュアリ
「僕の知っている防御用奇跡では、 効果時間が限られています。 その点、聖防陣なら半永久的だし‥‥‥ でも一日十か所が限度かな」
ほどこ
「それでもやってもらおう。 元々施されていた聖防陣は、
しょうもうせん
できれば、消耗戦が机上の空論となるぞ」
もど
うなずき、少年は地図に視線を戻した。
しせつ
ろうじょう
サンクチュアリ
らかた破壊されたのでな
きょてん
赤い印は、鉱山施設や給水プラントなど籠城に不可欠な重要拠点だけを特定している。
さらに重要拠点同士をつなぐ、地下の動脈路。 居住区などは、すでに見捨てた形だ。
「全てを守ろうとすれば、結局全てを失う‥‥‥たしかザクセンの古い格言にあったな」
「ええ、そうですね」

「今までは快適な居住区も、老人や重傷者用に使ってはいたが......もはやその余裕もない。
全ての者が等しく籠城の苦しみを知り.....堪えるしかない」
「本当に......戦争ですね......」
ジャスティスは、大きくため息を吐いた。
その背後で‥‥‥
「ねえ、本当にこれを喰うつもり?」
かた
ゆか
ライオットが、乱暴に崖から荷を下ろした。
に投げ出したのは、壊れた木製の椅子である。目の前には壁の廃材、引き剥がした床板が山のように積み上げられている。
はいざい
「これをそのまま食べるのではない」
ハヤテは言って、椅子の足を取り上げた。
とりよう
けず
「塗料が塗られた表面を剥がし、中の部分をおがくずの如く削り下ろす。
それをパン粉に混ぜるのだ。比率は二対一」
「げーっ!」
せんがいき
代用パンの製法に、戦鎧鬼は顔をしかめた。
せんしつ
「いくらおがくずが繊維質だからって、喰う気なんて起きないわね.........」
「でもそれでパン粉が三割浮くんだよ」
ほほえ
少年も板きれを手にして微笑んだ。
そ しょく からだ
ぜいたく
「粗食は身体にいいんだよ。 贅沢は敵さ」
すてき
だんぼう
きゅう よ
「違うわ。 贅沢は素敵なの」
早朝から運ばれた木製品を、市民たちがおがくずに削っていく。
燃料庫とは言え、隙間もないほど避難民が集められていた。
ひなんみん
かしょ
いつしょ
「暖房する箇所も限定するしかない。守るべき場所と守るべき者を一緒にすれば、それだけ節約できるだろう」
あんど
けん つえ
青い顔のハヤテは、剣を枕に歩を進める。
しょくりょう
「まず為すべきは、新たな食糧の調達と燃料の節約だ。
その心配を取り除かねば、市民たちも安堵はできんからな」
「やりくり上手な軍師さんね」
「ただ、持ちこたえているに過ぎん」
褒めるライオットに、ハヤテは目を伏せた。
ろうじょう
あや

「窮余の策だ。あと一線越えれば、籠城そのものが危うくなる......」
ハヤテは、不満そうに舌打ちをする。
確かに危険な策でもあった。
だんやく
食料庫、燃料庫、 弾薬工場、給水施設。
じゃしん お
せんとう
いかにも邪神が襲って来そうな場所にまで、避難民が集められていた。そこで戦闘が起きれば、必ず
巻き添えが生じるだろう。
それを知りながら、策を進めている。
ライオットは、不本意な心情を思いやった。
さいぜん
「仕方ないわ... 現状では最善の策よ」
「他に策もない......そろそろ、レイズも食糧調達を終えたはずだ。様子を確かめよう」
とびら
言ったハヤテは、燃料庫の扉を開いた。
と、その重さにたまらずふらつく。
「やだ······肩、貸すわよ」
かた
ゅんかん
せんがいき
言って、ライオットが軍師を支える。だがその瞬間立ち止まり、戦鎧鬼は口を結んだ。
「あ、あんた、病気ってまさか......」
こわ
かた
ライオットの手は、 軍師の腕に触れていた。その顔が強ばるのを見て、 ジャスティスも
表情を硬くした。
「ハ、ハヤテさん......?」
おどろ
「.........驚くことはない」
そで
歩みを止め、 ハヤテは通路の壁に身をもたれさせた。 軍師は、二人の前で袖をまくる。
ぎょうし
二人は、 軍師の腕を凝視する。
ハヤテの右腕には、黒いただれが幾つも走っていた。膿のようにも見える。
「ハヤテさん、魔導に・・・・・・」
しんしょく
「ああ、肉体を浸食されている......」
穏やかな声でハヤテは言った。
「私はヤマトで邪神退治の職にあった。 それが返り討ちでな...・・・長くはないだろう」
「けどどうして、この地へ?」
さが
「配下を全て失い、私だけが生き残ってしまった。 死に場所を探しに旅に出て......ここま
で来たという訳だ」
もど
袖を元に戻し、ハヤテは白い息を吐いた。
からだ
「でも、その身体で戦えるの?」
「これがある限り........」
つえ
ハヤテは、杖代わりの剣を差し出した。

ふうま
「ヤマトでは...... カタナと言う。 銘は封魔。 ヤマト語で魔を封ずると書く」
「これが...... カタナ・・・・・・」
ジャスティスは、言いかけて絶句した。
ライオットとて同様である。 ハヤテの言う通りなら、この剣は遣い手を選ぶ。
ゾダニウム製の剣ではあるが、誰にでも振り回せるものではない。遣い手に奇跡を与える剣なのだ。
だれ
サウンド あた
神話めいた武器と言っていい。
ののし
ライオットは今一度、 ハヤテに肩を貸した。
「でも、カタナは遣い手の命数を削ると言うわ。 自分の命も大事にしてよね」
「わかっている............」
ふる
涼しげな視線をかすかに震わせた。
のぼ
三人はゆっくりと、冷え切った通路を階上へと昇り始めていった。

つか
「ねえ、レイズの兄貴、もうちょオ疲れたよ」
「泣き事言うな! まだ仕事は終わりじゃねーんだよ!」
ひび
罵り合いは、階下まで響き渡っていた。
せんがいき
戦鎧鬼はハヤテを支え、階段を昇りきる。
通路の左右は、コンクリートだったはずだ。
たた こわ
はだ
それがドリルとハンマーで叩き壊され、地肌が剥き出しにされている。
土から染みだす冷気に、通路の気温も急激に低下していた。
「寒いでしょ、これかけて」
「すまんな......」
マント
ライオットは外套をハヤテにかけると、集まった少年兵たちに歩み寄った。
「あんたたち、ちゃんとやってんの?」
だれ
みよう あつか
あね
「これはライオットの娘さン・・・・・・」
あいさつ
「おい、みんな、挨拶しろい!」
うやうやしく、少年兵たちが頭を下げる。
妙な扱いにライオットは、気色ばんだ。
「誰が姐さんなのよ、誰が! それにしても掘ったもんねえ・・・」
おくゆ
土中には、大きな穴が穿たれている。奥行きは、十メートルにも達しているだろうか。
「ねえねえ、こんな土の中に食べものなんてあるのかなあ?」
ジャスティスも興味深げに目をこらす。そこへ穴の中から、黒い影が飛び出してきた。
「う、うわああっ!」
おどろ

じゃしん
「そんなに驚くンじゃねェ！ 俺は邪神か！」
どろ
白い野戦服を泥まみれに変え、レイズは歯を剥きだした。両手にバケツを下げている。
「なあんだ、レイズか。びっくりしたよ」
「なンだとはなンだ！ 俺は肉体労働してンだぜ！ お前も少しは手伝えっつーの！」
「鼻の頭、泥ついてるよ」
「ケッ‥‥‥拭いてくれよ、さっさと」
そで よご
言われるまま、ジャスティスは袖で汚れを拭き取ってやる。
せんがいき ほほえ
なが
その二人を、戦鎧鬼は微笑ましく眺めた。
「どうなの、レイズ？ 成果の方は？」
「へっへっへ.........ほらよ、この通り！」
えもの
すばや
悪意に満ちた顔つきで、レイズはバケツから獲物をつかみ出す。 続けて、素早くライ
オットの鼻先に突きつけた。
りょうせいい
うめ
その手の中では、太った青黒い両棲類がじたばたともがいている。
ごげっ、ごげっと無様な呻き声が響いた。
ひび
「なーによ、食用のブタガエルじゃない」
かた
ぽってりした腹を指先で弾くと、ライオットはつまらなそうに肩をすくめた。
かわい
「もっとうまそうな食材があるかと思ったわよ。 期待して損しちゃった」
らくたん
「......可愛くねえな
呆れて、レイズも落胆する。
たた
その肩をぽんとハヤテが叩いてやった。
たくわ
とうみん
「この時期は、栄養を蓄えて冬眠しているからな。わずかに掘れば、すぐに見つかる。よくやったぞ
、レイズ」
うれ
猟果に満足する軍師に、レイズは嬉しそうにうなずいた。
びき
とりにく
「こういう事なら任せてくれよ。 何千匹でも取ってやるぜ。 味は、まあマズい鶏肉程度だけどよ。
ザクセンの名物料理だからな」
あらそうと言って、ライオットは相棒を振り返った。
「あんたもザクセン人でしょ？ 懐かしいふるさとの味じゃないの」
だが背後にジャスティスはいなかった。
はる
通路を遥か十数メートル。
きょうふ
ゆが

そこまで怯え、逃げ去り、うずくまったまま、恐怖に顔を歪ませている。
「僕、 それだけは苦手なんだ～」
ふる
なみだめ うる
情けない声を震わせ、 ジャスティスは涙目を潤ませた。
は
「子供の頃、皮剥ぐの見て怖くなったんだよ。それから二度と食べれなくなってさ~」
「今でも子供!」
クルセイダー
「情けねエ聖戦官だぜ、まったく!」
あき
ここら
ライオットとレイズは、呆れて声を合わせた。 ハヤテも必死に笑いを堪えている。
こし
けいたい
ひび
その軍師の腰で、 携帯通話器が鳴り響いた。
「私だ、何かあったか?」
せんとう
そろ
『ロエルです、 新規の戦闘要員が揃いました」
音声は、ライオットたちにも聞こえている。
そう
『行政区第八階層、多目的ホールに来てください。 各部隊の再編制作業を』

「承知した、 すぐに行く」
笑みを消し、軍師はライオットに向き直る。
「来てくれ、新兵が待っているそうだ。 彼らを任せられる者は......そう多くない」
「分かったわ.....ジャスティス?」
クルセイダー
振り返った目の前で、 聖戦官の少年は泣きそうな顔になっていた。
「僕はこっちを手伝うよ〜」
そ
なるべく中身から目を逸らし、ジャスティスはプタガエルのバケツを手にしている。
しょくりょうこ
「これを食糧庫に運ぶんだ〜僕にかまわず、行って来て~」
なんじゃくやろう
「しっかり持て!ったく、軟弱野郎!」
ののし
しつせき
おく
すすり泣き、罵り、叱責しながら、少年兵たちは通路の奥に進んでいった。

なが
びしょう
その背中を眺め、ハヤテは微笑した。
クルセイダーどの
たよ
「しかし聖戦官殿は・・・・・・まるで子供だな・・・・・・・彼だけが頼りなんだが・・・・・・
」
「戦うところを見たら、気が変わるわよ」
ライオットは、赤い髪を掻き上げて笑った。
「あの子は絶望を希望に変えてくれるわ。 そういう子なのよ、あの子」
「分かった、期待しよう」
しせん
軍師は、強い視線をライオットに向けた。
「何度でも変えてもらうぞ。 勝つまではな」
言って、軍師は通路へ歩み出す。
けんそう
少年たちの喧噪も、通路の奥へと遠のいていった。

（こいつらで戦うのか......）
かく
ライオットは、失望を隠せなかった。
多目的ホールに整列するのは、老人と子供ばかりである。負傷者すら列に並んでいる。
彼らは次々、軍服を受領していく。
おそ
じゅう
にぎ
じゃしん
だが恐らく、銃など握ったこともない者ばかりだろう。
邪神を前に、果たして引き金が引けるのか。そんな不安すら頭をよぎった。
「心配そうですね、ライオットさん?」
問いかけて、ロエルが歩み寄ってくる。
かったつ
だれ
総司令官たる彼女は、凜とした顔つきで新兵たちの前を横切った。
その闊達な足取りに、ライオットは面倒そうに顔を歪めてみせた。
めんどう
ゆが
「誰だって心配するわよ、さすがにロクな奴がいないわね」
こかつ
「まともな人的資源は、とっくに枯渇してますよ。頼りになるのは戦意だけです」
そう言うと、ロエルは紙片を差し出した。
んが
せんとう
戦鎧鬼は、その戦闘序列に目を落とした。

『義勇軍本部中隊 定数一〇〇名
さんぼうちょう
指揮官ロエル 参謀長ハヤテ

第一戦闘大隊 大隊指揮官バウザー
第二戦闘大隊 大隊指揮官ベーケ

第三戦闘大隊 大隊指揮官キュンメル
第四戦闘大隊 大隊指揮官ネーリング

戦闘大隊(各定数四〇〇名) は
三個戦闘中隊(各定数一二〇名) で編制

各戦闘中隊 小銃八四丁
たん きかんじゅう
短機関銃三六丁
軽機関銃九丁
はんよう
汎用ロケット発射器九基」
「新兵の配分はもう終わっている」
歩み寄り、ハヤテも横から説明を始めた。
ひま
「第二から第四大隊には、今夜から周辺の警戒に就いてもらう。 訓練してる暇は無いので な.....
古参の下士官でかためておいた」
「ふーん......で、第一大隊は?」
「あえて新入りを集めた」
軍師は、一隊の新兵を指して言う。
しょうもう
「だが第一大隊は決戦部隊とする。 もし敵に余力があった場合、全部隊を消耗させるのは まずい。
温存し、予備兵力に回す」
「うまくいくかしらね?」
うなじを掻き、ライオットは身をよじった。
「新兵ばかりの部隊を機動予備にするの? しかも決戦部隊として?
指揮官のバウザーは場数踏んでるっぽいけど...」
「あたし?」
「だから呼ばれたのだ、 分からんのか?」
おどろ
かた
たた
ハヤテの不意の指名に、ライオットは驚いた。その肩をほんとロエルが叩いてみせる。
いつしょ
せんとう
「お願いします。
ライオットさんが一緒なら、新兵も心強いと思うんです。それこそ......戦闘経験は豊富でしょうし」
あら
「第一大隊を補佐しろって事ね......でも、あたしの教育は荒っぽいわよ」
お好きなように、とロエルは微笑む。
ほほえ
「もうバウザーが新兵に接見しています。 後はお二人にお任せしますので」
「お二人ねぇ...」
たの
よろしく頼む、とハヤテも肩を叩く。
なな
連れだって司令官と軍師が立ち去ると、ライオットも多目的ホールを斜めに進んだ。
とうとつ
ぜつきょう
そして唐突に、絶叫する。

「なあによ、バウザー！ あんたさぼってんじゃないの！」
「俺がさぼってる？ 失敬な、第一大隊長様に向かって」
「だってまた呑んでるじゃない！」
「呑まずに済めば、親も喜んだろうになぁ」
かか
ようへい
ゆか
酒のカップを抱えた傭兵は、
ごろりと床に寝そべっている。新兵たちはその前に整列し、どうしたものかと困惑顔だ。
あき
こんわくがお
ライオットも、心底呆れて頭を掻いた。
「あのねえ、あたしも第一大隊長補佐なのよ！
あんたがそんなんじゃ、やる気なくなっちゃうじゃないの！」
いっぱい
「そう慌てるなよ、軍服の受領はまだ終わっちゃいねえ。 一杯呑む時間くらいあるだろ」
しょくりょうなん
「まったく............この食糧難にどこからくすねて来てんのよ！」
「酒の方から勝手に歩いて来るのさ、いい奴だろう？」
はいご
絶句するライオットの背後に、一人の士官が近づいた。
どの
「失礼します、ライオット殿.........バウザー大隊長殿の副官を務めますクルーガーです」
「ああ、よろしく..............」
かんりょういた
ふんれい
「間もなく軍服の受領が完了致します。 大隊長殿から新兵に、是非とも奮励のお言葉をいただきたいのですが......」
「お言葉あ？」
かく
ライオットは、生真面目そうな副官を睨んだ。クルーガーも困惑を隠せていない。
まちが
「あんたね、相手を見てモノを言いなさいよ。お言葉なんて期待するの、間違ってるわ よ」
「それはそうかもしれませんが......」
しらふ
「させるなら素面の時にしなさいよ。 素面の時があったらの話だけどさ」
わき
その会話の脇を、次々他の大隊が行進していく。
厳しいかけ声と、整然とした靴音を鳴らし、各部署へ戻っていくのだ。
ぶしょ もど
くつおと
新兵たちはもちろん、他の大隊の指揮官たちまで、第一大隊の様子に目を丸くしていた。
とつぜん
そして突然・・・・・・
「バウザー殿、寝てる場合かっ！」
ぜつきょう
そうねん
そてき
壮年の士官が、血管を浮かせて絶叫した。
その表情に、ライオットは見覚えがあった。
昨日の定例会議でレイズに激高した、あの士官である。

つまらなそうに、バウザーはまぶたを開く。
「なんだ、キュンメル大隊長ですかい」
「なんだではない！ 貴官の第一大隊は新兵中心ではないか！
基礎的な行進を覚えさせ、さっさと訓練に入らんか！」
「行進なんざ省略ですな。うちは実地訓練で行きます。 おかまいなく」
「おかまいなくうっ！」
ぼくしょう
ライオットは、爆笑をこらえた。
こかつ
いくら人的資源の枯渇とは言え、とんだカタブツ大隊長だ。 笑いたくもなった。
「これからバウザー大隊長は訓辞をしますので、 キュンメル大隊長」
が
ライオットは、さらりと笑顔を造り上げた。
とつぜん
たた
しょぞん
「新兵に必勝の信念を叩き込む所存です。どうかご心配なく」
「ふんっ、しっかり頼むぞ、 決戦部隊！」
キュンメルは、頭から湯気を出す勢いで立ち去っていった。
くしょう
それを見送り、ライオットは苦笑したまま上官を振り返った。
「さて、いい加減、重いケツを上げなさいよ。でないと新兵ちゃんたちが不安がるわよ」
「とは言ってもなあ......」
大きく伸びをして、あくびをかます。
ようやく立ち上がったバウザーは、カップを手にしたまま、新兵たちに近づいていっぶしつけな視線
で、一同を見渡した。
みわた
「しかし聞いてはいたが、本当にガキとジジイばかりだな。 ロクな奴がおらん」
「あんたよりはマシかもよ」
「俺よりハンサムは一人もいないぜ。 と......」
ふと、視線を止める。
突然バウザーは、一人の少年兵を手招いた。
「お前、ちょっと、ちょっと・・・」
「じ、自分でありますか?」
ようへい
じんち
「そうだよ、まあちょっと来い」
呼び寄せるや、全身を見回した。
「お前、この街の者か?」
「いえ、行商に来て、たまたま・・・・・・」
「道理で靴が小さいはずだ。 すぐに代えろ」
あしもと
傭兵はにやついて、足下を指した。
「陣地には雪解け水が染みだしてる。 すぐに靴は濡れるぞ。 毛布を切って、 靴下を造れ。
それから一つサイズの大きな奴を履くんだ。でないと血行が悪くなるな」
慣れた視線で、服装を点検していく。
「靴の裏には鋲を打て。戦闘回廊は暖房が止まって凍ってる。滑り止めだ。紙屑を拾っ
て、野戦服と下着の間に挟んだ方がいいな。いい寒さしのぎになるぜ」
「は、はあ......」
次々と下される言葉を、少年兵は感心して聞き入った。

「防寒対策なら、地元民の方が詳しいはずだ。なにせ長年、この寒さを経験してる。ちゃんと周りの
年寄りどもに聞いておけよ」
笑って、傭兵は新兵たちを見渡した。
とうし
「とにかく寒さへ備えろ。 戦う前に凍死しちゃあ、おしまいだ。分かったな?」
旦那、と一人の老人兵が声を上げた。
からだ しん
あたた
「なら、ライ麦酒を持っててもいいかね? ありゃあ、身体の芯から暖まるでな」
むろん
「ザクセンウォッカだな。無論、かまわん。俺も呑んでる」
言って、カップをすすり上げる。
「ただし飲み過ぎるな。 ライオットがうるさい」
「バウザー!」
いっしゅん
えがお
抗議を笑い声がかき消した。 新兵の顔には、一瞬にして笑顔が広がっていた。
(案外、こいつ......)
ライオットは感心した。
まだ戦うバウザーを見た訳ではない。
ふっしょく
しんらい
しかし一瞬にして、新兵の不安を払拭してみせた。 兵に信頼され、かつ信頼する。
それができるのも、良い指揮官の資質であった。
じゅう
「じゃあ行こうぜ、 ライオット。こいつらに銃の持ち方から説明してやらんと」
「分かったわよ、大隊長殿」
どの
ライオットは、おどけた敬礼をしてみせる。
だが形ばかりの表敬ではなかった。
地下都市ワイマールに昼夜の別はない。
日光も射さず、風を感じることもない。
ひとかげ
つか
だが深夜に近づけば、通路を行き交う人影も絶え、わずかな照明も消え失せる。
夜の冷気を感じながら、 ジャスティスは白い息を宙空に吐いた。
「やっぱり寒いね、夜は......」
「ったく、こんな夜中まで働かせやがって!」
たお
疲れた声で、レイズは通路に倒れ込んだ。
「朝からパン一個だけで、こんな重労働させやがって! 明日は休みにしてほしいぜ!」
「ホントホント、ちょオ腹ペコ!」
「って言うか、次は別任務ね」
かいちゆうでんとう
懐中電灯を握った少年たちは、暗い食糧庫からようやく這い出してきた。お互いの顔を照らす力もな
く、次々通路にへたりこむ。
すみ こし
食糧庫の荷さばきを終え、
ジャスティスもさすがに疲れたらしい。通路の隅に腰を下ろすと、膝を抱えて小さく座した。
ひざ かか
おそ

「みんな、もう遅いよ。 疲れてると思うけど... おうちの人の所へ帰らないと」
ひんみんがい
「けっ、帰るうちなんかねえさ。俺たちゃ、貧民街の捨て子だからな!」
いつせい
レイズが吐き捨てるように言うと、みなが一斉にうなずいた。
「そおそお、俺たちちょオ寂しい人生なの」
「って言うか、家族って何?」
ひび
少年兵たちは、疲れた笑いを響かせる。
せん
だがジャスティスは、真っ直ぐレイズに視線を送った。
「レイズ、 君・・・・・ご両親、 いないんだ......」
「顔も知らねェよ。 ま、どうせ口減らしに捨てたんだろうけどな」
少年兵はあぐらに転じ、ジャスティスに疲れた顔をしてみせた。
「俺の分隊は全員そうだぜ。 育ちが悪いせいか、しぶといのが多い。だから生き残って る」
きたな
「ちょオ汚い手で悪いな、 デフってんだ」
あくしゅ
そばかすだらけの太った少年兵が手を差し出す。 ジャスティスは笑って握手を交わした。
「デフだね、よろしく。 君は......」
あいさつ
「ジャム。って言うか、挨拶は初めてか」
サングラスをかけた、やはりアフロス系の少年とも手を握り合う。ジャスティスは、レイズの仲間全員の名を教えてもらった。
「みんな以前は、ゾダニウム鉱山で働いてたンだぜ。この街にはそれしかねエから.........」
「へえ、偉いんだなあ」
「まったくだ! 一日十六時間、休む間もなく働かされてよ。それもはした金でだぜ」
こうどう
「そうそう、ちょオ暗い坑道でさ」
「って言うか、あの仕事、もうヤだぜ」
デフとジャムを筆頭に、少年兵たちは不満を口にする。
クルセイダー
いたわ
だが聖戦官は、労るような声で言った。
「でも、この街を守ろうとがんばってる やっぱりみんな偉いよ」
「仕方ねェだろ、生まれた街なンだ」
レイズは、捨て鉢に笑った。
「今はこうだが......このワイマールだって、けっこうイイ街だったんだぜ」
かしや
「ああ、中央通りの菓子屋、うまかったな」
「また第四公園で遊びてよ」
「中古バイク屋も燃えちまったしなあ」
なつ
かつてを懐かしむ言葉は、後を絶たない。
びしょう
ジャスティスは、暗がりで微笑を見せた。
ねんれい
「・・・・・・みんな、動員年齢に達してないんだよね。 でも、志願して戦ってるり偉いと思うよ」
やっぱ
「みんなが感謝してるワケでもねエぜ」
「そんな事ないよ、考えすぎさ」

「けっ、昨日この街に来たばかりのくせによ。知ったようなクチをきくぜ」
また笑いが湧き起こる。 親しげな笑いが。
とうはつ
それでもジャスティスは、笑っている。
だま
ただ黙って、レイズを正面から見つめていた。気恥ずかしくなったのか、レイズはまた頭髪を掻きむしった。
じゃしん
こわ
「ただよ、自分の街が邪神にぶち壊されたのが気に喰わねェだけさ。友達も大勢、殺されたしな。せめて仇だけは討たねェと」
かたき
「兄貴は、ちょオ仇討ってるよ」
そげき
「って言うか、狙撃の名人だしな」
仲間に言われ、レイズも胸を張った。
ねら
「まぁな。俺に狙われて逃げ切れた邪神はいねェぜ。百発百中さ!」
うらや
そう語り合う少年兵たちを、ジャスティスはなにか羨ましそうに見つめていた。
かた くつおと
そこへ堅い靴音が近づいてきた。
かいちゅうでんとう
同時に、強い懐中電灯の光が向けられる。
「ジャスティス......あんたなの?」
とたん
「あれえっ、ライオット?」
突如現れた光に、少年たちは目を伏せる。
だが立ち上がったジャスティスは、暗がりに相棒の姿を認めていた。
むか
「どうしたの、迎えに来てくれたの?」
「バカね、そんなんじゃないわよ。 新兵訓練の帰り道なの」
ライオットは、こつんとジャスティスの額をこづいた。
かんせい
途端に少年兵たちから歓声が上がる。
クルセイダー
「よォよォ、お迎えですか、 聖戦官様あ!」
にく
「仲の良いことで! 憎いなあ!」
「そ、そんなんじゃないよお!」
ジャスティスは真っ赤になって、聖戦を振り回した。笑って少年兵ちが逃げ回る。
あき
ライオットは呆れて、めまいをこらえた。
「あんたたちも早く帰んなさい。リムロちゃんがずーっと待ってたわよ」
「やベッ、忘れてた!」
おそ
「あいつ、遅いとちょオうるさいんだよ!」
「って言うか、六歳のくせに生意気!」
そうぐ
かつ
あっと言う間に装具を担ぐと、 少年兵たちは通路へ駆けだしていった。

とたん
「じゃあな、ジャスティス! また明日!」
「姫サンとよろしくやれよ!」
「もおっ! レイズ! みんな!」
笑い声と共に、消えていく。
後には、二人だけが残された。
「なんだか、みんな急いでたね」
「それだけリムロが心配なんでしょ。 あの子も親に捨てられたらしいから......」
「そうだったんだ............」
サンクチュアリ
くも
途端に、ジャスティスの表情が曇り出す。
かた たた
ライオットは、相棒の肩を叩いてやった。
なかす
「あんたもお腹空いたでしょ。特別に夜食、もらってあるわよ」
ほく
「うん、でも僕、やる事があるんだ......」
「なによ、こんな夜中に・ ・」
「聖防陣、描かないとね......」
ふところ
しる
ジャスティスは、懐から一枚の紙片を取り出した。 ハヤテが書き記した、
地下市内の防衛構想図である。
「言われたところ、まだ全部描き終えてないんだ。
少しでも早い方がいいから...・・・人で描いてくるよ」
「一人じゃ心配ね、あたしも行くわ」
「いいんだ、僕一人で」
言うと、ジャスティスは笑いかけた。
「ライオットこそ、休んでよ。 まだ寒冷地用の機能設定、 調整してないんでしょ?」
「ええ、まあね......けどさ......」
「これは僕一人の仕事さ。 ライオットはいつでも戦える準備しておいてよ」
ライオットも笑って、うなずいた。
「仕方ないわね、二時間したら帰って来るのよ。明日も早いんだから」
「うん、分かってるよ」
しんぱいしよう
ほほえ
つか
れんらく
「何かあったら連絡してよ、いいわね?」
「心配性だなあ、ライオットは」
微笑んだまま、駆けだしていく。
疲れているはずなのに......
からだ
あの小さな身体のどこから、そんな気力が湧いてくるのか......
(心配性かあ.....)
くしょう
ライオットは、相棒の言葉に苦笑した。
(その通りだから、仕方ないわね......)
もど
来た通路をゆっくり戻り始める。

ひとかげ
動燃区から上層の工業区へ連なる、長いスロープ状の通路だ。 人影も無く、 光も無い。
おとな
(いつかジャスティスも大人になる......)
(その時、あたし、何してるんだろう......)
いつしょ
(まだ一緒に旅してるんだろうか......)
時々思う事があった。
旅の終わりを願いながら、 その先に思いを馳せる事が......
くさ
のぼ
工業区の油臭い通路を抜け、さらに行政区に昇っていく。 それでも思いは消えなかった。
(早く、あの子の旅を終わらせてあげたい)
(でもその後、あたしは......)
(あたしはどこに行くんだろう......)
まだ二年に満たぬ旅である。
だが永遠に続くようにも思われた。 せめて安らかな形で旅を終えたい。 ライオットが、
そう願った時・・・・・
(あれ............)
不意に、通路の先に光が見えた。
とびら
小さな会議室の扉が開かれ、かすかに照明が漏れている。
のぞ
立ち止まり、中を覗いたライオットは、しばし部屋の様子に見入ってしまった。
てつしゅう
「えっと......この地区はもう撤収が終わったし..............この地区の人を移すのは...そうか
、 ここしかないのよね......」
えんたく
さんらん
会議室の円卓には、無数の地図と書類が散乱していた。その乱雑な紙の渦と、一人の少女が必死に格
闘していた。
かくとう
「がんばってるわね、ロエル...........」
「やだっ、びっくりした!」
声をかけられ、司令官の少女はびくっとこちらを振り向いた。くすくす笑いながら、ライオットは会
議室に入っていく。
「独り言が聞こえたんで、ついね・・・・・・」
おど
「もおっ、脅かさないでください!」
じゃま
「ごめん、邪魔しちゃったわね」
「いえ、もう寝ようと思ってたんですよ」
そう言って、書類をかき集める。
たの
ライオットは、円卓の端に置かれたティーセットに目を止めた。
「シロン茶、 あるじゃない。 今、淹れるわ」
「そんな、私が・・・・・・」
だいじょうぶ
せんがいき
「大丈夫よ。いくら戦鎧鬼だって、お茶ぐらい淹れられるから」
「す、すみません・・・・・・」

あま
ほうこう ただよ
間もなく、深夜の会議室にシロン茶葉の甘い芳香が漂った。
湯気の立つカップを二人ですすり、自然と微笑み合う。
ほほえ
どの
「大変ね、司令官殿は......」
「そうですね。防衛計画は、ハヤテ様がいるからお任せしてますけど······居住区からの避難が、なかなか進んでないんです」
「動燃区や工業区に避難させるんだものね」
つら
「老人や負傷者には辛いと思います......」
「でもやるんでしょ?」
「もちろんです。 でないと勝てませんから」
笑って、きっぱりと言い切った。
そうごう
力強い言葉に、ライオットも相好を崩す。
「頼もしいわね、感心するわよ・・・・・・」
くず
「ひとつ、訊いてもいいですか?」
急に、ロエルがカップを置いた。
えんりょ
湯気の向こうから、少女は遠慮がちな視線を送る。 ライオットは、無造作にうなずいた。
「どうぞ、 なに......?」
「どうして、 来てくれたんですか?」
いまごろ
今頃、問いかけてきた。
じゅんれい
とちゅう
「ジャスティスには訊いたんです。巡礼の途中なのに、どうしてここに来たのかって.....」
「で、あいつは何て言ったの」
ほう
「来たかったから...って。 放ってはおけなかったからって言うんです」
その通りよ、とライオットもカップを置く。
「あたしは、あいつの旅にくっついてるだけなの。ジャスティスが行くと言ったから、あたしも来た。それだけの事よ」
「でもどうしてそこまで・・・・・・」
「だからさあ......」
まえがみ
言葉を重ね、ライオットは前髪を掻いた。
「それがジャスティスなのよ。
くどくど説明なんかしたくないけど・・・・・・自分より他人が心配な奴なのよ、あいつ」
すご
やさ
「ええ、私も凄
・・優しい人だと思います。 けど優しすぎてなんだか......」
おもしろ
ど
戸惑いの笑みを浮かべる。
ライオットも、同意するように短く笑った。
フロンティア

「いいじゃない、それで。 そういう奴も新大陸にいるって事よ」
「ライオットさんも優しいんですね......」
「面白いからくっついてるだけ。 あたしはお守り役みたいなもんよ」
ひとしきり笑い、カップを飲み干した。
「明日も早いし、もう寝るとするわ」
「待って、私も出ます」
「分かった、じゃ照明消してね」
ライオットは、冷たい通路に踏み出した。
かか
きんぱつ
その後に、書類を抱えたロエルが追いついてくる。 暗がりに、金髪をきらめかせて。
ぬく
なぜか夜に、温もりが感じられた。

【第二章 ワイマール/抗戦】

「ふざけるなッ!」
どせい
お
怒声と共に、テーブルが蹴り倒された。
ゆか
続けて、無数の食器が床に投げ出される。
だいい
りょう こ そうぜん
突然のけたたましい響きに、 第一食糧庫は騒然となった。
「何しやがる、レイズ!」
「それは俺が言いてエよ、さっさと朝飯寄こせって言ってンだろうが!」
いど
レイズは、力任せに挑みかかる。
だが配給官の男も、まだ小さな少年の胸ぐらをつかみ、強引に締め上げた。
「お前ら本部中隊のメシは、とっくに給食部に送ったよ! 文句なら給食部に言え!」
「その給食部が足りねエって言ってんだ! ちょうど俺たちの分隊の分がよ!」
「何してるの!」
駆けつけたロエルは、息を切らせている。
ひとがき
食糧庫には、つかみ合う二人を中心に人垣が出来ていた。一方に配給官たち。もう一方にレイズの仲間たち......
「二人ともとにかく手を放しなさい!」
「言っとくけど、悪いのは配給部だぜ!」
突き放すように配給官を解放し、レイズが吼えた。
「今朝のメシが届いてねこんだ! 文句言うのは当たり前だろ!」
「だから送ったと言ってるだろう!」
「来てねこもんは来てねーんだよ! 腹が減って戦争ができるか! それでなくても一日パン一個だぜ! 邪神に喰われる前に、飢え死にしちまわあ!」
じゃしん
いらだ
苛立ったつま先で、床を蹴り飛ばす。
にら
配給官も、血走った目で少年たちを睨んだ。
「こっちだってちゃんと仕事をしてるんだ! ケチつけられる覚えはないぞ!」
「だからねえモノはねえんだよ!」

「もう、ちょオ腹空いたよ」
しせん
「ンだと!」
「って言うか、とっとと朝メシ出せよ」
少年兵たちも、配給官たちをねめつける。
その視線に、一人が舌を打ち鳴らした。
「お前ら......もう喰ってんだろ............?」
こんたん
「本当はもう朝メシ喰って、もう一食くすねようって魂胆じゃねえのか!」
「こいつ......!」
「レイズ!」
どごう
とうとつ
こうさ
レイズの怒号とロエルの悲鳴が交叉する。
だが殴りかかろうとする寸前......
「あのお......」
きんぱつ
せいせんじょう
いつの間にか、二人の間に金髪の少年が立っている。
　　聖戦杖を手にしたジャスティスは、にっこり笑って配給官を見上げていた。
クルセイダー
「な、なんです、 聖戦官様......?」
「あ、あのお.... 僕の分、ありますか?」
のんき
唐突に、呑気な声で言う。
「僕も朝食まだなんです。 でももしあるなら、僕の分をみんなに......」
「ジャスティス様・・・・・・」
こんわく
配給官は困惑した顔で一同を見た。
レイズもロエルも不思議そうに、 ジャスティスの背中を見つめている。
びしょう
金髪の少年は、それでも微笑を続けていた。
「それならいいですよね?」
「いや、しかし......」
「ジャスティス、あんた何言ってんのよ?」
不意に、背後からライオットも現れた。
みよう
はら
だれ
眠そうに赤毛を掻き、ライオットは周囲の妙な空気を追い払った。
「あんたの一食分でレイズたち全員が満腹になるわけないじゃない。計算してよ」
「けどさ、お腹減ってちゃ戦えないよ」
「だからあんたも食べなきゃだめ! あんただってお腹空いてるでしょうが」
「そ、そんな事ないよ!」
あどけない顔で言うと......
ジャスティスの腹の虫が大きく鳴った。
誰かが吹き出す。
ざか
配給官の誰かが。 レイズの仲間の誰かが。
「うーん、やっぱりだめかな」

「育ち盛りのくせに!」
ライオットも吹き出し、 ロエルも笑いをこらえた。
「分かりました、 今お出ししますよ」
配給官の顔も、ようやく緩む。
ジャスティスもペこりと頭を下げた。
ふくろ
配給官からパンの入った袋を受け取ると、金髪の少年はレイズの元に歩み寄った。
「レイズ、 これ君たちの............」
「くそ......ありがとよ!」
わた
かんせい
乱暴に袋をふんだくると、デフに渡す。 ようやくの朝食に、少年たちの歓声が上がっ た。
「やっと喰える~ちょオ腹ペコぉ」
「って言うか、ジャスティスありがとな」
だま
ほほえ
ジャスティスは、黙って微笑んでいる。
しょくりようこ
パンを頬張り、一同は食糧庫から退出した。
「俺たち、ちょオがんばってるのにな」
「って言うか、もうやる気無くしそう」
思わず、デフたちの口から愚痴が漏れる。
レイズも悔しそうにパンを囓った。
かじ
だがライオットは、うなだれる少年たちを見つめるだけだ。
　　　厳しい事を言っても、レイズたちの怒りは痛いほど分かっている。
(言って、どうにかなるもんじゃないわね)
ため息を吐いて、頭髪を掻いた。
だが突然、一同の頭上で......
つえ
「ジャスティス、 杖が......!」
ライオットが真っ先に叫んだ。
せいせんじょう まがまが
聖戦杖が禍々しい赤光を放ち始めている。
警報が鳴ったのは、ほぼ同時であった。
きんきゆうせんとう
『緊急戦闘警報! 緊急戦闘警報!」
じゃしん
『第六食糧庫に邪神出現!』
『第六食糧庫に邪神出現!』
ひなん
『全動燃区画に緊急避難指示、 発令!』
『動燃区の市民は直ちに避難・・・・・・』
するど
全員の視線が鋭く動いた。
「ロエル、第六食糧庫って......」
「この先です、 第八十六区画!」
走り出し、 ロエルがみなを先導する。
こくもつ
びちく
「あそこは穀物倉庫です! 備蓄した小麦がやられたら......!」

「分かったわ、 ジャスティス!」
おく
しつそう
だが呼ばれた少年は、もうロエルを追い越す勢いだ。 聖戦杖を握り、 聖衣をひるがえす。
「させるもんか!先に行くよ!」
「ちょっとあんた! もおっ!」
遅れて、ライオットもパンをくわえた少年兵たちと駆けだした。
「みんなを見返すいいチャンスよ! 派手にぶちかましてやんな!」
「任せときな、やってやるよ!」
レイズが白い歯を見せる。
しんりやく
疾走は、侵略の只中へ突き進んでいった。

に
じげんわいきょく
せんい
「次元歪曲だ! 邪神が来る!」
まど
逃げ惑う配給官たちが悲鳴を上げた。
てんじょう はもん」
繊維セメント製の天井に波紋が広がる。
ぜつきょう は
波紋は渦を巻き、やがてけたたましい絶叫を吐き出した。
《イカアー イカアー》
《レグ! レグ! イカア!》
こまく みみざわ
鼓膜に耳障りな言語が流れ込む。
おたけ
きょだい
かげ
はいかつしょく つばさ あわ
じゃしん
ゆか
歪んだ時空の門から、雄叫びと共に巨大な影が舞い降りてきた。灰褐色の翼を慌ただしく打ち振り、
長大な尾で穀物庫を押し倒す。
一体ではない。続けて二体現れる。
邪神たちは、二つの首で左右を睨んだ。
するどくちばし
にら
どちらにも長く鋭い嘴が伸びている。嘴には鋸状のが並び、貪欲な食欲を示す唾液が床に垂れ流れた
。
かいちよう
で
おそ
怪鳥めいた邪神たちは、七つ指の生えた腕で配給官たちの頭上へ襲いかかった。
「ひいいいっっ!」
むじひ
無慈悲に、 邪神の足が着地する。
だれ
悲鳴を上げた誰かの、ピンク色の臓物が床一面にぶちまけられていた。
「遅かったかっ............!」

だいろ! くりょうこ
くちびる
第六食糧庫にたどり着くなり、ジャスティスは唇を噛みしめた。
辺りは血と肉片で真っ赤に染まっている。
じゅうまん
にお
遅れて駆けつけたロエルは、充満する血の匂いに吐き気をこらえた。
「ロエル、ここは僕に任せて!」
「そうはいかないわ、私も戦う!」
けん
ジャスティスは、邪神の正面に立ちはだかった。 右手では、ロエルがゾダニウムの剣を
払っている。
「ジャスティス、 気をつけて!」
نــدم
ロエルにうなずき、視線を邪神へ戻す。
その右手が、力強く聖印を結ぶ。
テイク
ラウン
「第一撃・・・・・迂回衝撃弾!」
せいせんじょう
き ほうせき
さくれつ
しょうかん
サウンド
聖戦杖の頂上で、希宝石メタライトが炸裂する。召喚された攻撃用奇跡は、ジャスティスの聖印から
勢い良く送った。
ほとばし
《イカア! イカアー》
《レグ! レグ! イカア!》
いちげき
ちゅうくう
わきばら
らぬ
しゅんかん
じゃしん あわ
先頭の邪神が慌てて、後退する。
だが創世神の一撃は、宙空で四つに分かれ、邪神の脇腹と背中を貫いた。命中の瞬間、食糧庫が傾く
ほどに激震する。
かたむ
げきしん
「きゃああっっ!」
かべ たた
震動に、ロエルは壁に叩きつけられた。
ぼくさい
ほうこう とどろ
ぐち
だが爆砕したはずの邪神は、高らかに咆哮を轟かせた。
傷口から青黒い体液をしたたらせ、邪神は一歩前進する。
《レグ! レグ! イカア!》
イフリート・クラス
「効かない......こいつら邪神伯級かっ!」

あしもと
察した瞬間、大きく飛び退いた。さっきまでの足下に、邪神伯の七つ指が叩きつけられている。続けてもう一度。 邪神の爪は、コンクリートの床を難なく引き裂いていった。
つ
じゃま
「ジャスティス! 下がんな!」
ひだりうで
ライオットが左腕の義手を引き抜く。
途端に同時起動した戦闘機能が、人工網膜に青い表示文字を吐き出した。
〈全人工筋肉、リミッター解除〉
てきだんとう
〈自動擲弾筒、照準固定〉
〈事後の戦闘活動、記録スフィアに登録〉
「邪魔だろう、首三つは!」
ごうおん
剥き出しにした四〇ミリ擲弾筒を、振り向けた。轟音と共に、対邪神用散弾を立て続けに放つ。爆発は、 邪神の突進を一瞬食い止めた。 だが......
とっしん
「下がって! 何かを......!」
察して、ロエルが警告を発した。
のど
にくぶくろ
先頭の邪神伯が、嬉しげに二つの喉を鳴らす。 左右の顎の下に付いた内袋が、ぶうっと嫌らしく膨らみ始めた。
《レグ! レグ! イカア!》
「まずいっ......!」
さくれつ
ライオットが叫んだ瞬間、炸裂した。
そうとう
おうと
とたん
双頭の邪神伯は、口から生白い液体を嘔吐する。勢いよく吐き出されたそれは、ロエルとライオットの足下に、 ジャスティスの背後へ着弾した。
あしもと
はじ
途端に、じゅっと弾ける音。
せんい
あくしゅう
嘔吐物は繊維セメントを溶かし、悪臭と湯気を撒き散らした。 逃げ遅れた配給官たちの背にも、運悪く命中する。
「ぎゃあああああっっ!」
逃げ遅れた者の骨肉が瞬時に蒸発する。
空を掻きむしり、数人が絶命した。
「こいつ......!」
ジャスティスは、第二撃の構えに入った。
そこへ酸性の嘔吐物が飛んでくる。
後続の二体が好き勝手に吐きまくった。
後退し、態勢を整える。 そしてまた一撃。
クルセイダー
よゆう
聖戦官に、念を集中する余裕はなかった。

「俺が引きつけるッ!」
そげきじゅう
しょん
突然、レイズがそう叫んだ。
狙撃銃の準備を終えた少年は、立射の姿勢で遊底を引く。左右に仲間たちを従え、レイズは照準器に
意識を集中した。
スコープ
ひとく
「俺様が相手だよ、人喰いガラスっ!」
ごうほう
初弾が、 号砲と共に撃ち放たれた。
じゃしん
かんつう
レイズの正確な一撃は、見事に邪神の眼球を貫通する。 続けてもう一発。
次弾は、みかけた袋を破砕した。
のどぶくろ はさい
《レグ! レグ! イカア!》
《レグ! レグ! イカア!》
もだ
先頭の邪神は、ゾダニウム製の弾丸に悶えのたうった。だがかまわず、デフやジャムも銃撃を開始す
る。
またた
だがその傷は、瞬く間に癒え始めた。
《イカア! イカア!》
《レグ! レグ! イカア!》
いらだ
・フリー
め
苛立った声で、 邪神伯が喚く。
さけ
その声に、レイズも悔しげに叫んだ。
「しつこいぜ、ったく......!」
とつじょ
と、背後から、突如野太い声が響き渡った。
「ロエル! バウザー第一大隊、 来たぜ!」
たばこ
は
くわえた煙草を吐き捨て、そう叫ぶ。
ゆず
「いったん下がりな! 見せ場を譲れ!」
よう
しょくりょうこ
りようかた
傭兵バウザーは、長大な対戦車ライフルを腰に据え、食糧庫に飛び込んだ。両肩に給弾ベルトをかけ
、軽々と邪神に向かう。
「仕方ねえ、給料分は働いてやるよ!」
ばくれつおん とどろ
立て続けに爆裂音が轟いた。
むか
砲声めいた撃発と共に、ゾダニウム徹甲弾が邪神の群れを迎え撃つ。邪神にめり込んだ
弾丸は、その体内で爆砕した。

《イカア! イカア!》
わめ
からやつきょう
き声にも構わず、連射を続ける。 熱く焼けた空薬莢が、床にばらまかれていった。
えんぐん
「バウザーさん!」
ジャスティスは、援軍に声を送る。
そのバウザーの背後から、次々と義勇兵たちがなだれ込んできた。
「ラング、ヘプナー、 左へ回れ!」
こうとうしき
バウザーはヘッドホンから伸びる口頭式マイクに指示を下した。
「ハンスは右手でレイズたちと合流しろ! クルーガーは新入りを抑えてな!」
義勇兵たちが左右に散る。
そして最後に現れた一隊は、 昨日配属されたばかりの子供と老人たちであった。
「ひいいいっっ!」

じゃしん
たけ
どせい
雅神を目前にして、早くも悲鳴が上がる。だがバウザーは、振り返って怒声を放つ。
じゅう
となり やつ
「新入りは全員、銃を床に置け! 隣の奴と手をつなぐんだ! 今は戦わんでいい!」
ほうか
散開した義勇兵たちは、 十字砲火で邪神を迎え撃った。 怒号と銃声が耳を塞ぐ。
はんげき

猛り狂った巨体も反撃に出た。 七つ指を振り回し、 義勇兵の肉体を裂き散らす。
銃撃には酸性の嘔吐物で対抗した。
おうとぶつ たいこう
ふる
新兵たちは、がたがたと震えだす。 銃を手にしていたら乱射していただろう。
しゅんかん
だがその瞬間・・・・
ディストーション
かんりょう
「威力増幅準備完了! 第二撃!」
きわ
ジャスティスの思念がついに極まった。
少年の聖印が、三体の邪神に向けられる。
パイロマニア
「神聖炎熱堕撃!」
アタック・サウンド
ちえん
デイストー
せいせんじょう
攻撃用奇跡は、十分に発動を遅延されている。その分、威力増幅輪がかけられ、聖戦は莫大な聖光を解き放った。
ばくだい
《イカア! イカアー》
《レグ! レグ! イカア!》
のが
しょくりょう ニ
かべ げきとつ
せま
逃れんとする邪神は、食糧庫の壁に激突した。 巨体にはあまりに狭すぎる戦場。
その三体を古代神聖文字の羅列が猛速で包囲した。 ジャスティスは、 聖印で十字を切った。
られつ もうそく
はら
「焼き払え!」
じゅうおう てんかい
文字列は縦横に展開した。
上下左右から、炎撃が邪神たちを焼き尽くす。創世神の炎に炙られ、邪神の肉体はぐずぐずと溶け始めた。
「す、すげえ....」
少年兵たちは、炎撃の熱さに後ずさる。
サウンド
いりよく ぼうぜん
ロエルも、奇跡の威力に呆然とした。
「あれが...... ジャスティスの力・・・・・・」
どせい
が、そこでまた怒声が飛んだ。
「気をつけろ! まだ生きてるぞ!」
バウザーが銃口を持ち上げる。
じゃしん
サウンド
すでに二体の邪神は、完全に溶け落ちていた。しかし最後の一体は、奇跡の文字列につかみかかると、果敢な咆哮を轟かせた。

かかん ほうこう とどろ
ほうじん
効力の消えかかった包囲陣を引きちぎり、半ば溶けた巨体で前進する。
「しまった......!」
じゅうげき えんご
後退するジャスティスを、バウザーの銃撃が援護する。
「もう一発くらわせろ、ジャスティス!」
傭兵は、惜しむことなく銃弾を叩きこんだ。
やつ
「そうすりゃ奴は片づくぜ!さっさとやっちまえ!」
クルセイダー
レイズもロエルも、聖戦官に期待の視線を振り向けた。ジャスティスも、すでに聖印を結んでいる。
聖戦杖に聖光も灯された。
せいせんじょう
ラスト・サイク
「最終撃......!」
「ジャスティス、 任せて!」
きょうかん
そこで、ライオットの叫喚が飛んだ。
せんがいき
とつしん
ゆか
戦鎧鬼はジャスティスを押し退け、一直線に邪神に突進した。 床を蹴り、宙へ跳ぶ。
ほそく へんこう
〈目標捕捉、変更指示があるまで固定〉
〈放出魔導線量計測中〉
もうまく せんとう
たいけん
もうそく
慌ただしく、網膜に戦闘表示が流れる。
背から引き抜いたゾダニウムの大剣を、左右から猛速で振り下ろす。
《イカアー イカアー》
《レグ! レグ! イカア!》
二つの首がライオットを威嚇した。
くちばし
おうとぶつ
は
大きく開いた嘴が、嘔吐物を吐こうとする。
おそ
つらぬ
そうとう
だんざん
だが遅い。両刀は、 邪神の首を二つとも貫いた。 そのまま双頭の首を断斬する。
「ライオット!」
あんど
さけ
やいば
くちびる
ジャスティスは、安堵の叫びを上げた。
きょたい
てんとう

邪神の首が床に落ち、巨体が転倒する。
あがく身体は湯気を立てて溶けていった。
遅れて、ライオットも地に戻る。
ﻟـﺪي
せんがいき
刃から体液を振り払い、戦鎧鬼はふうーっと大きく息を吐いた。
「ざっとこんなもんよ」
すご
「やったあ! 凄いよ、ライオット!」
ジャスティスは嬉しそうに相棒に飛びついた。ライオットも少年を抱きとめる。
(...............危なかった・・・・・・)
せんがい
かんいつぽつ
ジャスティスを抱きしめ、戦鎧鬼は安堵する。間一髪、間に合った。
じゅうこう
レイズが銃口をゆっくりと下ろす。
さや
ロエルも、切っ先を静かに鞘に戻した。
たばこ
バウザーも銃口を下げると、新しい煙草に火をつけた。
「やれやれ............もう少し俺にも見せ場を残してほしいぜ。 二人だけで片づけやがった」
唇をねじって笑い、背後を見る。
じゃしん
「いいか、今のが邪神との戦いだ。 とんでもねえ敵だが・ ・勝ち目はある。
　　力を合わせればな。それを忘れるなよ」
新兵たちは、まだ手をつなぎ続けていた。
きょう ふ サウンド
いりょく
邪神への恐怖と奇跡の威力に声も出ない。
しえん
まあいいか、とバウザーは紫煙を吐いた。
[............]
さんたん
ロエルは、惨憺たる戦場に唇を噛みしめる。
こくもつそう とうかい
幾つもの穀物倉が倒壊し、床に小麦がぶちまけられていた。
　　邪神の体液に染まったそれは、青黒く変色している。
にくかい
「ロエル......」
ざせいしや しかばね さんらん
そしてあちこちに、肉塊と化した犠牲者の屍が散乱していた。足の踏み場もない。
歩み寄ったジャスティスも、気が付いた。
だが銃士は頭を振り、絶望を追い払った。
「今は負傷者の収容が先決です。 みんな手伝ってあげて......」
いちべつ
言って、邪神の死骸を一瞥する。
ハザード
「これをどけるのも一苦労ね。 魔導汚染も心配だから、穀物倉を別に移します」
「第三燃料庫なら空きがあります。 タンクは自走式ですから、移送に問題ありません」
歩み寄った配給官が進言する。
かみ

うなずいて、ロエルは髪を撫でつけた。
「そうね……レイズ! 穀物倉を移送するわ。 配給部を手伝ってあげて」
あれ
「人使いが荒エな。まあいいけどよ」
レイズは自分の分隊を呼び寄せた。そして、ふとジャスティスに視線を向ける。
「お前……やっぱすげえな……」
サウンド
「えっ、奇跡のこと?」
せいせんじょう にぎ
ほほえ
ジャスティスは、聖戦杖を握って微笑んだ。
「これは創世神様の力さ、僕の力じゃないよ」
「バカっ、知ってて言ってんだよ・・・・・・」
そげきへい
じゃしん
「レイズだって. . . . . . 本当に義勇軍一の狙撃兵だね。 邪神の目玉を撃ち抜くなんて. . . . . . 」
「へへッ、まあな!」
レイズは、得意げに胸を反らせた。
やつ
「射撃で俺にかなう奴はいねエよ。どんな的でも射抜いてみせるぜ」
「ホント、兄貴はやっぱちょオ凄腕!」
かみわざ
「って言うか、神業って奴?」
あんど
少年兵たちも安堵の声を上げる。
みわた
すごうで
だがバウザーは辺りを見渡し、苦い顔で舌打ちした。
しょくりょう
「にしても、派手にやられたぜ。 まず丸一日分の食糧が消えたな。 これで一日パン半分だ」
めいわく
しかばね
さも迷惑そうに邪神の屍を蹴り飛ばす。
イフリート・クラス
おそ
アーレス・クラス
「それに邪神伯級とは恐れいったぜ。 今までは、まず邪神騎級止まりだったからな」
もく
ジャスティスは、黙して目を伏せた。
「僕、ここ以外で戦えば良かったですね」
ふと、反省するようにつぶやく。
「貴重な小麦を巻き添えにしちゃって……僕、 明日から断食します」
ほほえ
ロエルは少年に微笑みかけた。
せま
「ジャスティスがいなかったら、とても勝てなかったわ。
それにこの狭い食糧庫から邪神をどこかに誘導するなんて無理よ」
うどう
ライオットがその先を引き継いだ。
すなお
「あんたはうまくやったわ。一人で邪神をやっつけたじゃない。今は素直に喜びなさい よ」

せんがいき
かた
だれ
戦鎧鬼は、少年の肩に手をおいた。だが誰より安心しているのは、ライオットであっ た。
おそ
(あと少し遅かったら……)
サウンド
(ジャスティスは最後の奇跡を使ってた)
それがどんな事態を引き起こすか。
考えるだけで胃が痛んだ。
さと
誰にも悟られぬよう、安堵の息を吐く。
「それに、一方的に俺たちが不利になった訳でもねえだろ」
じゃしん
バウザーも、 邪神の遺骸を見て言った。
「敵の戦力にも限りがあるなら、 邪神伯三体を失ったのは痛手のはずだぜ、そうだろ?」
「だといいんですが……」
かね
おのおの
せつな
だがジャスティスが微笑んだ刹那・・・
〈痛手だと……?)
われ鐘めいた呻きが食糧庫にこだました。
〈片腹痛いことを申すな……〉
たいけん
ライオットは、大剣を両手に構えた。
せいせんじょう にぎ
ジャスティスが聖戦杖を握りしめる。
じゅうこう
そげきじゅう
ロエルは剣を抜き、バウザーは銃口を持ち上げた。 レイズも狙撃銃を肩から下ろす。
めぐ
五人は合図もなく背中を合わせ、周囲に視線を張り巡らせた。 その周囲でも、
義勇兵たちが各々の武器を硬く握っていた。
かた
「なんだ、まだ敵がいるのか!」
どの
「ロエル殿! バウザー殿!」
きょうこう
とたん
恐慌が広がった途端・・・・・・
とつぷう
ふぶき
ともな
突風が吹き荒れた。 湧き起こった寒風が、 吹雪を伴って五人を包囲する。
アースト・レイヴ
<第一撃……〉
「上だ! みんな散って!」
トラップド・アンダー・アイス
〈氷魔拘束包囲!〉
ごうおん

魔導が轟音を上げて落下した。
身を裂くような、酷寒の竜巻が頭上から押し寄せる。 骨を凍らす寒気が、全身を買いた。
「うわっ........!」
「あ、兄貴いっ!」
かべ
竜巻にあおられ、少年兵たちは壁まで吹き飛ばされる。 レイズだけが、必死にその場に
踏みとどまった。
「ちくしょう、みんなっ......!」
「くうっ......!」
くちびる
ゆか
ロエルの赤い唇からも、くぐもった悲鳴が漏れる。 銃士は剣を落とし、床に倒れかけた。
ちょうしょう
その身をジャスティスが抱きとめる。
からだ
「ゆ、床はだめだ! 身体が張り付く!」
とうけつ
クルセイダー
すでに凍結したのを察し、聖戦官はロエルを必死に支えた。
ぎょうし
パウザーも、銃身に霜が付くのを凝視した。
「この竜巻・・・・・・やけに重いぜ......」
〈無知は困るな、ただの竜巻ではない......〉
嘲笑と共に、さらに白い竜巻が現出した。
ちょうだい
〈私が邪神侯ンガイ・ヴェール様から頂戴した魔導だ・・・・・・〉
新たな竜巻は、すぐにかき消えた。
そう
こくはく
しかしその後には、長身痩軀の青年が現れている。 酷薄な嘲笑をちらつかせて。
「やっぱり黒幕がいたのね......」
ブエル・クラス
ライオットは、果敢に剣を握り続けた。
「邪神侯級の手先なら、 少しは名も知られてるでしょう......」
〈ボグダノフ······〉
青年は、短く名乗った。
ほうむ
〈ヴォルガではギーエフと言う名の街を葬った。 聞いたことがあるなら幸いだな〉
のど
レイズの喉が知らずに引きつった。
青白い顔であった。
そうはく
もんよう
めいめつ
その蒼白な額の中央に、ねじくれた紋様が赤く明滅している。
やしゅうもん
「邪宗紋......!」
きょうふ しょうそう
ふじょう
けつめいしや
「血盟者か......!」

みじん
はくはつ
かた
一同の顔に恐怖と焦燥が浮上する。
生気など微塵も感じられない。若いはずだが、長い白髪は肩まで垂れている。
つま先まで隠れた白い長外套に身を包み、 残忍な視線をちらつかせた。
ロングコート
ざんにん
にえ
〈我が主は、さらなる生け贄をお望みだ。この街にも消えてもらう。 悪く思うな〉

「野郎、俺が相手だッ!」
じまん そげきじゅう
レイズは、自慢の狙撃銃を振り上げた。
しきんきょ
霜が付いた照準器では、正確な狙撃は無理だ。だが至近距離である。
撃てば当たる、とばかりに引き金に指をかけたその時・・・・・・
さと

ぞう
〈自信家だな、小僧・・・・・・〉
うぬぼ
〈だが自信と自惚れは違う······〉
声が耳元に吹き込まれた。
いつの間にか姿が消えている。
悟ると同時にレイズは振り返った。
ボグダノフの顔は、少年の目前にあった。
えんじん
ジャスティスたちが組んだ円陣の中央に、血盟者は空間転移していたのだ。
(あああああああッッ......!)
悲鳴が声にならない。
ふる
狙撃銃ががたがたと震えている。
1230
ボグダノフはその銃身を握りしめ、一息に握り潰した。
〈その違い、分かったようだな......?〉
こた
だが何も応えられない。
ただ、歯の根ががちがちと鳴るだけだ。
「レイズ、 どくんだ!」
かか
ロエルを抱えたまま、 ジャスティスが聖印を結ぼうとする。
たいけ
はら
だがそれより速く、 ライオットが背から大剣を抜き払った。
「気にくわないんだよ、 色白男っ!」
およ
せんがいき
たた
である。
ロングコート
刀身に寒気が及ぶ前に、戦鎧鬼は一刀を叩きこんだ。鼻と鼻がぶつかり合うほどの至近だが血盟者は
、頭上へ垂直に跳躍する。
けつめいしや
ちようやく
長外套をひるがえすと、舞うような優雅さで床に着地した。
なるほど新参者は楽しませてくれる・・・・・・〉
いくさ
〈だいぶこの戦にも飽きてきたのでな······〉
「ふざけるな! 撃ていっ!」
とたん じゅうげき
途端に銃撃が始まった。
たま
ほう
ロングコート
激高した第一大隊の兵が、
血盟者めがけ十字砲火を浴びせかける。だがその長外套に命中した弾にも、
ボグダノフは笑みを崩さない。
セカンド・レイツ
〈第二撃......〉

コールド・アズ・アイス
〈極圧結凍撃!〉
りょううで
はしょう
つらぬ
両腕を振り上げ、破笑する。
らら
しつそう
血盟者の周囲から、無数の氷柱が投射された。
宙を疾走するそれは、次々兵士たちの肉体体を貫いた。
「逃げろ! ゼッター! パウルス!」
「ぎえええええっっっっ!」
バウザーの悲鳴は届かない。
むじひ
ばくはつ
兵士たちに突き刺さった氷柱は、無慈悲に体内で爆発した。
腕がちぎれ、頭蓋が吹き飛ぶ。
せんけつ
辺りに鮮血が撒かれ、血肉が飛び散った。
ほうぜん ぎやくさつ
(なんて奴だ・
レイズは、呆然と虐殺を見守った。
(あれが血盟者......)
からだ
ふと、自分の身体を見下ろす。
レイズの野戦服は、真っ赤に染まっていた。
だれ
飛び散った誰かの返り血。
飛び散った誰かの耳臓物........
そして飛び散った誰かの眼球が、床からレイズを見上げていた。
おぶつ のどもと
汚物が喉元までこみ上げた。
きょうふ
あざわら
ざせいしや
その恐怖を高らかに嘲笑い、 ボグダノフは犠牲者たちを蹴り飛ばした。
お
〈邪神伯三体倒したぐらいで、痛手だと!〉
ぐみん
〈身の程を知れ! 愚民どもが!〉
おくぼ きし
バウザーの奥歯が軋み、血管が浮き上がる。
「野郎......ぶち殺してやる!」
ようへい
とうけつ
だが傭兵の指も、びくとも動かない。 対戦車ライフルの引き金が凍結しているのだ。
「ライオット!」
うで
とうしょう おか
にぶ

ジャスティスは、ロエルを支えるしかできない。 その腕が、脚が、急速に凍傷に侵され
ていった。血流が鈍り始めている。
ごく
くる
せんがいき もうまく
そして極低温は、ライオットの機能をも狂わせ始めていた。
戦鎧鬼の網膜には、無数のエラーメッセージが表示されている。
せんとう
ようせい
しゅどうりよくろ
〈全戦闘照準率、四〇パーセント低下〉
〈主動力炉、再起動を要請します〉
微動だにしないライオットに、血盟者は哄笑を響かせた。
びどう
けつめいしや こうしょう
ひび
せんがいき
〈さしもの戦鎧鬼もお手上げのようだな〉
〈ならば仕上げに入ろう......〉
ゆかい
〈これで義勇軍の首魁一同全て・・・・・・〉
言いかけて、振り向いた。
ちょうやく
だしぬけに、上空へ跳躍する。
もと
いちじん とつぷう しらは
だがボグダノフに追いすがるように、一陣の突風が白刃をふるって飛び込んできた。
「ハヤティ!」
ねら
「いえええええいいっっ......!」
現れた軍師は、腰のカタナを抜き払っている。下段から跳ね上げるように、血盟者の胸元を狙った。
かいひ
だがボグダノフの動きも速い。
うで いつせん。
せま
回避した直後に、ぶんと黒い腕を一閃 ハヤテの頭蓋を叩き割ろうと迫った。
こしゃく
〈小癪なっ......!〉
ばせい
むか
かんだか げきとつおん
血盟者の罵声を、カタナが真っ向から迎え撃つ。甲高い激突音と火花を散らし、ハヤテはボグダノフ
の一撃を大きくはね除けた。
いちげき
の
〈名を聞こうか、 サムライ......〉
くちびる
着地して、 ボグダノフは唇を舐めた。
〈カタナの遣い手と看た……かなりのな......〉
「ヤマトの国の住人、 ハヤテ・・・・・・」
ハヤテは、地に降りて整息する。

「最初で最後の名乗りだ......!」
烈しい気が、ハヤテの全身から噴き出した。
フラッシュ・オブ・ザ・
「神雷閃光剣撃!」
さや
しつそう
ハヤテの剣が、鞘から疾走した。
やいば
ノイズ たつまき
ふぶき
ふんしゅつ
振るわれた刃は、魔導の竜巻を断ち割り、吹雪を焼き払った。
噴出した閃光の熱波は宙を走り、一気にボグダノフへ突進した。
〈おのれいっ!〉
けつめいしゃ
すそ
のが
血盟者は、裾をひるがえして逃れんとする。だがハヤテの剣から飛び出した一撃は、ボグダノフの身体を斜めに斬り払った。長外套が裂け、真っ赤な鮮血が噴き上がる。
〈ああああっっ!〉
いか
ボグダノフは、怒りと悲鳴を同時に発した。
血盟者の身体が大きくかしぐ。
〈ぎ、貴様あっっ......!〉
「逃しはせんっ!」
ハヤテも一気に間合いを詰め、再び刃を振り上げる。だが・・・・・
「............がっ......!」
ひざ
軍師は口元を押さえ、膝をついた。
押さえた指の間から鮮血がしたたる。
そのままハヤテは力無く、床に倒れ込んだ。
「ハヤテさん!」 「ハヤテ!」
さけ
ジャスティスとバウザーが同時に叫ぶ。
とっしん
だがただ一人、ライオットだけが突進した。
効力を失った魔導を突き抜け、 疾走する。
かんげき
きょり
てきだんとう
ボグダノフの間隙を見逃さず、一気に距離を詰める。
義手部分を引き抜くや、四〇ミリ自動擲弾筒を速射した。
わかしらが
「くたばるんだよ! 若白髪!」
ばせい
たた
血盟者めがけ、罵声と共に叩き込む。
ばくはつ
だがライオットの照準機能は、かなり低下していた。 擲弾はボグダノフの周囲で爆発し、火花を散らす。 自分の血にまみれた血盟者は、怒り狂ってライオットを迎え撃った。
〈調子に乗るな! 機械人間があっ!〉

むか
ふところ
とたん
てのひら
ライオットの懐に飛び込み、擲弾筒を握りしめる。途端に、掌から冷気が噴き出した。戦鎧鬼の義手
が、瞬く間に凍結していった。
せんがいき
また
とうけつ
やろう
はな
「野郎っ! 離すんだよっ!」
さけ
ひだりうで みじん にぎ つぶ
あわ
だが叫ぶ目の前で、左腕は微塵に握り潰された。 ライオットは、慌てて後退する。
「やりやがったな..................!」
せりふ
〈それはこちらの台詞だ・・・・・・〉
〈よくもこの身に傷を付けたな......〉
にくにく
はぎし
ボグダノフは、血に染まった両手を見下ろし、憎々しげに歯軋りした。
ロングコート おく
のど
裂けた長外套の奥に、異様な物が見え隠れする。 ライオットは喉を引きつらせて、血盟
者を指さした。
あた
きょう ふ
「待て! ボグダノフ!」
せんがいき
はめつ
からだ
「その身体は・・・・・あんた、まさか......」
〈まだ勝ったと思うな......〉
戦鎧鬼を無視して、 ボグダノフは言った。
〈貴様らにはさらなる飢餓を与えよう...............〉
〈そして不信と混乱、 背信もな......〉
じっくり恐怖を知った最後に...〉
〈破滅の味を知るがいい......〉
ジャスティスは、怒りに駆け出そうとした。
しかし血盟者の姿は、唐突な吹雪の中にかき消えてしまった。
そして朦朧とするロエルが、少年に力無くしがみついてくる。
とうとう
もうろう
「ジャスティス······寒い......」
つらら
少女の身体は、氷柱のようだった。
「ロエル、 しっかりするんだ!」
せいせんじょう
聖戦杖を捨て、ロエルを両手で抱きしめる。

少年兵たちも急いで駆け寄った。
「毛布だ、これをかけろよ!」
こお
「ちょオ冷てえ! 凍ったみてえだ!」
だいじょうぶ
「兄貴、大丈夫かよ!」
「ああ、すまねえ......」
駆け寄る仲間に、それだけ言う。
ひざ
すでにレイズはがくりと膝を付いていた。
立っていられる気力など、 どこにもない。
(俺......俺......)
(俺......今、本当に......)
もう一度、自分の野戦服を見下ろした。
だれ
飛び散った誰かの肉片が目に突き刺さる。
どもと
いれん
今一度、喉元が痙攣した。
おぶつ
ほとばし
こらえていた汚物が一気に迸る。
おうと
レイズは、かまわずに嘔吐した。
「兄貴、しっかり! 兄貴!」
たお
からだ
そしてバウザーも、倒れたハヤテの身体を抱きかかえていた。
「ハヤテ、お前、無茶しやがって!」
えんりよ
むならと
口元を押さえた軍師の指の間からは、どす黒い血が遠慮なくあふれていた。 胸元に垂れ、両足まで朱に染める。
ひじ
「............し損じた......」
悔しげに漏らし、苦痛を噛んだ。
ひだりうで
ライオットは、自分の左腕を見下ろした。
くだ
肘から先は、粉々に砕けている。剥き出しにされた腕の内部から、ばちばちと火花が飛び散っていた。
「次は必ず勝つ...............」
せんがいき
けんそう
にぎ
戦鎧鬼は、残った右手を握り独白した。
「次は必ず......命を取る......」
喧噪の中、はっきりと自分に言い聞かせた。

【第三章 ワイマール/背信】

機械油の匂いが鼻についた。
じゅうしん かべ
そん
真新しい銃身を壁に向け、狙点を定める。
もうまく てんとう
ライオットは、網膜の点灯表示を待った。
にんしきかんりょう
〈新規兵器システムの認識完了〉
〈自動照準機能と接続〉
だつちやく
〈義手脱着との同時起動を確認〉
かくにん
「よーし、いくわよっ!」
くちびる な
合図を受け取り、唇を舐める。
ひじ
ほう もうれつ
同時に、ライオットの肘から延びた小型のガトリング砲が猛烈な銃火を噴き上げた。
じゃしん
じゅうげき
訓練場の壁には、ランダムに邪神の映像が乱舞する。
銃撃は、その標的映像をことごとく撃ち抜いていった。
『標的撃破率九六八パーセント」
『平均標的撃破速度〇二四』
トリプルエー
「あなたの射撃ランクは総合度AAAです』
かいせき
解析アナウンスが場内に流れる。
こた
録音された無機質な女声に、 ライオットはにこやかに応えた。
「そいつはどうも......」
「具合はいいようですな?」
せんがいき
のぞ
老いた技術者たちが、戦鎧鬼を覗き込む。
しょうえん
ライオットは、硝煙を一息で吹き消した。
「さっきより軽いわ。 これでいい」
ライオットは、黒い銃身を撫でさする。
てきだんとう
いりよく おと
せんとう
「四〇ミリ擲弾筒より威力は劣るけど・・・・・・室内戦闘ならこっちの方がいいかもね」
ひだりうで
戦鎧鬼の左腕には、五五六ミリ自動小銃の銃身が三本束ねられている。 新しい腕だ。
そうてん
「擲弾筒の生産ラインがないんですよ......しかしゾダニウム弾が装填できます。 擲弾より
邪神には効果的ですぞ」
言った老人は、大きな弾倉を差し出した。
「二百発入ります。 フルオート射撃なら、十秒ほどで撃ち尽くすでしょうから.........」
「分かってるって。セミオートで使うわ」

立ち上がったライオットは、重いはずの弾倉を軽々と受け取ってみせた。
そして背後を振り返る。
はらぼ
と、後方では百人ほどの新兵が、なぜか床に腹這っていた。
「なーにしてるのよ、あんたたち?」
おどろ
「い、いえ、今の銃声に驚きまして......」
「冗談でしょう! ふざけないでよ!」
だが、第一大隊に配属された新兵たちの顔は一様に引きつっている。
　　ライオットは苦い顔で、新しい銃身を振り回した。
こわ
「いい、戦場に銃声はつきものよ! こんなもんでビビって、戦えると思ってんの!」
「慣れます! 慣れてみせます!」
一人の若い新兵が、 直立して敬礼した。
やさ
その強ばった顔に、戦鎧鬼は優しく微笑む。
「あらそお、あんた物わかりがいいわねえ...じゃあ慣れてみなっ!」
けんじゅう
言うなり、右手で拳銃を抜く。
てつこうだん
あしもと
たた
とたん
ライオットは、ウラン徹甲弾を新兵の足下めがけて叩きこんだ。途端に飛び上がって立 ちすくむ。
「ひいいいいっっ!」
「慣れるんでしょ! 今の言葉は嘘なの!」
「嘘じゃありませんが... 実弾は.........!」
「実弾に慣れるのよ! 実弾に!」
せんがいき
マン
銃を収め、戦鎧鬼は外套をひるがえした。
「あと一時間で慣れんのよ、後でもう一回同じテストをするわ!」
「そ、そんなっ! バウザー大隊長殿っ!」
ようへい
絶望する合唱が、傭兵を呼ぶ。
ゆか
どの
ね
だが彼らのボスは、いつも通り床に寝そべっていた。昨日の戦いぶりが嘘のようだ。
「朝から騒ぐなよ、俺は疲れてんだ」
「しかしライオットさんが......!」
「訓練は任せてある。 俺は口は出さないし、金も出さない主義だ」
もう一口呑んで、にやついた。
せんとう
「だいたい、昨日の戦闘で体力使いすぎたぜ。 今日は有給休暇にしてくれ。 ライオット、
　　定例会議もよろしく頼むぜ」
あき
ライオットは、もう呆れるのにも疲れた。
怪訝な目つきで、バウザーを見下ろす。
「また酒ばっかり......じゃ、後は頼むわ。 なまけてる奴がいないか、ちゃん見ててよ!」
「任せろ、俺はなまけ者には厳しい」

さかずき かか
うなずいて、杯を掲げた。
むちう
「俺よりなまけてる奴がいたら、鞭打ち百回にしとくさ」
「そんな奴いたらお目にかかりたいわよ」
吐き捨てるようにつぶやくと、ライオットはさっさと訓練場を後にした。
むか
ワイマールで迎える三度目の朝である。
すれ違う者からも自然に声がかけられ、 義勇兵たちは畏敬の念で敬礼を示す。
(それも昨日の戦いのおかげか......)
けつめいしやげきたい
えんたく
またた
しょくりょう
血盟者撃退の知らせは、瞬く間に市民の間に広がった。無論、食糧が消失した悲報も入ってはいたが
、朗報がより強く影響している。
えいきょう
こた
無数の敬礼に応えつつ、ライオットは行政区までの通路を足早に進んだ。
統合作戦本部には、すでに定例会議のメンバーが参集し始めている。だが顔ぶれを見渡
し、ライオットは呆れた声を響かせた。
「ちょっと、病人が何してんのよ!」
ひび
けいたい
円卓の向こう側で、 ハヤテが携帯通話器に次々と指示を飛ばしている。
血の気の失せた顔色のままで。
じゅうぶん
「一晩休めば充分だ。仕事も増えている」
みわた
「だからって...」
ライオットは、テーブルに寄り添った。
「昨日、あんなに血を吐いたのに・・・・・・」
「初めてではない、心配するな」
軍師は無表情のまま、言ってのける。
あき
ライオットも呆れるほどの戦意だった。
「因果なサムライね、あんたも」
ほんごし
「敵もいよいよ本腰を入れたと看た。 決戦を待ってもくれんだろう」
と、今度は......
「も、もういいわよ、 ジャスティス!」
「なに言ってんだ、まだだめだよ!」

せんとう
ほそうで
袖をまくったロエルが、真っ赤な顔で走り込んでくる。赤く腫れあがった細腕は、昨日の戦闘で負った凍傷だ。
とうしょう
なんこう せいせんじよう
そのロエルに、軟膏と聖戦杖を握りしめたジャスティスが追いすがってくる。
心配そうな顔で、逃げるロエルを引き留めた。
「まだ薬は塗り終わってないよ! ほら、腕を出して!」
「み、みんな見てるから恥ずかしいわよ!」
「何でさ? 薬を塗ってるだけじゃないか」
「とにかく恥ずかしいの!」
しっしよう
ライオットは、腕を組んで失笑した。
ずいぶんのんき
しんこん
「なによ、随分呑気ねえ? 新婚ごっこ?」

ばくしょう
あわ
ライオットの失笑が、周囲の爆笑を引き起こした。慌ててロエルも腕を引っ込める。
よ じょう
「あ、ライオットさん・・・・・・えと・・・・・・今朝の定例会議は、余剰燃料の再配分について.
　　　.....」
「んなこた、後でもいいのよ。それより具合はどうなの?」
かた
ひじ
笑いながら、ライオットは相棒の小さな肩を肘でつついた。
「ま、あんたが看病したんだから、治りも早いでしょうねえ?」
いっしょうけんめい
「うん。僕、一生懸命、看病したよ」
ジャスティスは、元気に答える。
だがロエルの顔は真っ赤になっていた。
「ご、誤解しないでください、 ライオットさん。私たち、昨日は同じ病室に居ましたけ
　　　ど、決して変なことには......」
「ああら、変なことってどんなこと?」
ライオットは、流し目でロエルを責めた。
「お姉さん、そういうことにすっごく興味あるわあ・・・・・・ 詳しく説明してくれる?」
「もおっ、ライオットさん!」
もう一度、笑いの輪が生まれた。
こんわく
ロエルは顔を赤らめ、困惑している。 初めて見せる表情であった。 こうして笑えば・・・・
さい
(ただの十三歳よね......)
ふびん
ロエルが少し、不憫に思えた。
「と、とにかく定例会議を始めないと! 各部署からの今朝の報告書、ください!」
逃げるように連絡士官たちに突進する。
えんたく
じょじょ
まだ笑いのおさまらぬ円卓に、徐々に会議のメンバーが着席した。
　　　何人かは入室すると、ジャスティスに握手を求めてきた。
あくしゅ
かつやく
「昨日はご活躍だったそうですな......」
「いえ、そんな・・・・・・」
「期待してますよ、これからも」
しょうさん
みな、口々に賞賛を述べていく。
うで
だがライオットは、相棒の腕を引くとやけに声量を落とした。
「ねえ、ジャスティス・・・・・・」
「えっ、なに?」
めいきそう
「瞑祈想・ ・終わってるわよね?」
ひそ
声を潜め、深刻に問いかけた。
ジャスティスも改めて、小さくうなずく。
だいじょうぶ

サウンド
しょうかん
「大丈夫だよ、昨日もちゃんと寝たさ。いつでも奇跡は三回召喚できるよ」
「三回じゃないわ、二回よ」
ライオットは、力強く言い聞かせる。
「昨日も......三回使おうとしたでしょ? でも絶対にしないで。あんたのためなのよ」
「うん、使わないよ......」
ジャスティスは、小さな声で答えた。
いつもそう答える。そしていつも、答え通りにはならなかった。
ライオットは、見透かしてため息を吐く。
「あのさ、あんたねえ......」
「あっ、レイズ......!」
ひろう
会話を打ち切り、ジャスティスは狙撃兵の少年に駆け寄った。
あわ
入室したレイズは、慌てて顔を上げる。
「お、おう、お前か......」
こ
疲労の残った顔でそう応えた。
のぞ
ジャスティスは、心配そうにレイズの顔を覗き込んだ。
「もう平気?大丈夫?」
「......うるせエな、おせっかい......」
すべ
ぶあいそう
レイズはジャスティスを押し退け、所定の席に滑り込む。いつも通り、無愛想な挨拶
だった。だが・・・・・
だれ
「本当に大丈夫なのかなあ、 レイズ・・・・・・」
「なんとかなるでしょ。 ほら、始まるわよ」
せんとう きょうこう
誰でも、戦闘で恐慌をきたす事はある。
ましてレイズは、 元々兵士ではない。
ろうじょうせん
けつめいしや
この一か月の籠城戦で場数こそ踏んでいるだろうが、目の前で血盟者と戦ったのは初めてだ。ショックを受けても仕方ない。
(ま、誰でも一度はそうなるわ......)
ころ
ライオットは、幼い頃を思い起こした。
きょうふ
いま
初めての戦場・・・・・・あの恐怖は未だに忘れられない。だがバウザーやハヤテのような歴戦の男とて、その恐怖を克服してきたのだ。
こくふく
(なんとかなるわよね......)
もど
手元の報告書に視線を戻し、信じることにした。 そう、この時までは······
しょくりょう
「どうなってんだ! 食糧をよこせ!」
動燃区の通路で、人々が激高する。

こぶし
拳を振り上げる群衆は、 義勇兵の列に前進を食い止められていた。
まちが
「いいから下がって! 何かの間違いだ!」
「わしらを飢え死にさせる気か!」
「お願いだ、パン半分でいいんだから......」
りつすい
食糧庫へ続く通路は、立錐の余地もない。
せま
籠城者同士が、狭い通路で押し合っている。
その押し合いに、背後からロエルが駆けつけて来た。
「どういう事です、これは!」
「第四十三区画の住人たちです!」
あせ
義勇兵に混じり、配給官が声を涸らした。
「今朝の朝食が届いてないと言うんです! 給食部の車両はとっくに出ているのに......」
汗を拭って、今一度向き直る。
「今朝の分なら送ったはずです! 受け取り責任者は誰ですか!」
「嘘をつけ! 無いものは無いんだ!」
かく
「誰かが隠したんだ! 間違いねぇ!」
「そんなはずありません! 嘘じゃない!」
ぼうぜん
遅れて駆け寄り、ライオットは呆然とした。
飢えた人々は、老人ばかりだ。
からだ
あの痩せた身体のどこに······)
いか
わざ
これほど怒れる力が残っているのか。飢餓感がなせる業に、恐怖さえ感じた。
「みんな......どうして......」
とうちゃく
ようやく、ジャスティスも到着した。
せいせんじょう にぎ
聖戦杖を握った少年は、言葉を詰まらせる。
地獄を目の当たりにした顔つきだった。
「みんな、落ち着くのよ!」
かかん
けんそう
ロエルは果敢に、喧噪に割って入った。
しょくりょう
もど
「食糧なら今すぐ出すわ!だから落ち着いて区画に戻って!」
「信じられねえな、ロエルさん!」
こぶし
一人の老人が拳を振り上げた。
「あんた、わしら年寄りを飢えさせて、食糧を浮かそうとしてんじゃないのかい!」
「そんな馬鹿な!」
さけ
真っ先に叫ぶと、ジャスティスが群衆に立ちはだかった。
「ロエルはそんな人じゃありません! それはみなさんが良く知っているはずです!」

「ロエルを信用しなくてどうするのよ」
ライオットも冷静な声で言い放った。
「とにかく......通路は冷えるわ。 今は落ち着いて、 区画に戻ることね」
せいじゃく
冷たい静寂が通路に満ちた。
みぞ
不信感と飢餓感。 深い溝を埋められぬまま、老人たちは後じさる。 そして......
「お前さんはいいわな。 たいして喰わんでもええ・・・・・・なにしろ機械人間だ・・・・・・」
「生身の人間の気持ちは分かるめえ・・・・・・」
卑屈な声が、ライオットに向けられた。
ロエルが顔を引きつらせる。
「なにを......」
せんが
言いかけた手を、ライオットが制止する。 見つめ合い、戦鎧鬼は首を横に振った。
うそ
「その通りよ、嘘じゃないわ。だからあんたも気にしないで」
「ライオットさん........」
戦鎧鬼は笑ってみせた。
「あたしたちは、消えた食糧を探すわ」
きじょう
え
ライオットは、気丈に笑みを振りまいた。
「ロエルは、食糧を準備した方がいいわよ。 本当に......殺気立ってるから」
「ええ・・・・・・でも......」
「話は後よ。今は行動が先」
すばや
戦鎧鬼は、素早くきびすを返した。
ばくはつ
「でないとまた爆発するわ、いいわね?」
「僕らのことは心配しないで、ロエル」
ジャスティスも横からうなずいた。
れんらく
「何かあったら連絡するよ、いいね?」
「分かりました、お気をつけて」
「いくわよ、 ジャスティス!」
すばや
ライオットは素早く一同に背を向けた。
にぎ
いつしゅん
その彼女の手を、すっとジャスティスが握りしめた。何も言わず、ほんの一瞬強く握りしめる。
てのひら
ぬく
少年の掌は、やけに温かった。 その温もりに、ライオットは礼を言いたかった。

しんちょう たんさく
ジャスティスとライオットは、慎重に探索を開始した。
がいえん
第四十三区画は、商業区の外縁にある。
動燃区の給食部からは、二階層も上層に位置していた。
んぱんろ
とは言え、運搬路は限られている。

ずい
ライオットはすでに、頭蓋の航法装置に地下通路の全データを登録してある。 二人は迷いもせず、運搬路をたどって行った。
「第四十三区画への搬入路はこっちだよ」
せいせんじょう
さんきろ おく
ぶんき
ジャスティスは聖戦杖で、三叉路の奥を指し示した。だが分岐した道も一方にある。
もど
地図を見れば、動燃区を経由して地上へ戻る経路である。
「あたしは先に第四十三区画に向かうわ。あんたはこっちを探して」
こうとうしき
言って、ライオットは喉頭式マイクの付いたヘッドホンを投げてよこした。
「何かあったら、これで連絡するのよ。 使い方、分かるわよね?」
「うん、 それじゃあ......!」
地図を握り、ジャスティスは駆けだした。
しゃ
そうおん
左右に目を配り、通路を曲がり、傾斜を下る。行政区を過ぎ、 動燃区の騒音が近づく。
ころ
さらに下層まで降りた頃....
「あれは......!」
とつき
咄嗟に急停止した。
そうしゃじょう
突き当たったのは、地下の操車場だ。
やみ
だっしゅつよう
闇の中には何台もの六輪トラックが並んでいた。 いざという時の脱出用車両である。
ばちが
しょくりょううんぱんしゃ たたず
むざん
たた
その中に場違いな、銀色の食糧運搬車が佇んでいる。 フロントガラスは、無惨に叩き割られていた。
き ほうせき
落ち着いて、聖戦杖を見上げる。
だが希宝石メタライトは沈黙したままだ。
んもく
じゃしん しゅうげき
邪神の襲撃ではないと確信し、ジャスティスは運搬車に近づいた。 そして......
さけ
はへん
「ど、どうしたんですか!」
運転席に向かって叫んだ。
中にはガラスの破片が飛び散っている。
二人の給食部員は後ろ手に縛られ、必死にもがいていた。口も布きれで覆われている。
おお
きょうかん
急いで布を剥がすと、若い男は叫喚した。
だれ

おそ
「す、すみません、襲われたんです!」
「誰に!」
とつぜん
「分かりません、突然だったので・・・・・・」
もう一人も息をついて、 しゃべり出す。
さんきろ
「三叉路で、運転席にこいつを投げ込まれました。後のことは全く......」
そつこうせい
だん
捕縛を脱した給食部員は、転がる金属缶を拾い上げた。即効性の催眠ガス弾である。
のぞ
いつさい
すさ
「こちらジャスティスです、 こちら・・・・・・」
運転席から駆け下り、ジャスティスは荷台を覗き込んだ。一切が無くなっている。
もど
さが
ヘッドホンを着け、マイクに呼びかける。
だが凄まじい雑音が耳を塞いだ。
「戻って、この事を報告してください。 僕は食糧を探します」
言いながら、 ジャスティスは地図を広げた。
「ここから出るには、市外へ通じる地下通路しかありませんね・・・・・・探しに行きます!」
「そんな! お一人で!」
おうえん
「あの通路には邪神も出ました! 万一のために、応援を呼んだ方が......!」
しかしジャスティスはかぶりを振った。
「あなたがたが襲われてから....もう二時間以上経っているでしょう。
奪った者に市外に出られたら....・・大事な食糧を取り返せません。 僕だけで先行します!」
おく
有無を言わせず、少年はさらに奥へと駆けだしていった。

銀色のタンクが幾つも並んでいた。
しせつ
じょうすい
動燃区の外れにあるその施設は、地下水を汲み上げ、濾過し、浄水に変える機能を有し
ている。無論、ワイマール全体のだ。
きょてん
給水プラントと呼ばれる区画は、飲料水を確保する重要な拠点であった。
せま
じゅんかい
警戒に当たる義勇兵も昼夜を分かたず、狭く暗い施設の間を巡回していた。 その一人が......
「なんだ......?」
どうしようじゅう かた
まゆね
自動小銃を肩にかけたまま、眉根を寄せる。
ひとかげ
浄水タンクの列を、小さな人影が横切った。
こうたい
交替時間にはまだ早い。
のぞ

兵士は、何気なくタンクの影を覗き込んだ。
だれ
「誰だよ、 誰か点検がっっ!」
しょうげき
後頭部に衝撃が走った。
からだ
みぞおち
こぶし
たた
身体がぐらりと揺れると、すかさず鳩尾にも拳が叩きこまれる。
そのまま意識を失い、兵士は床に崩れ落ちた。
「デフ! この間抜け! 見つかっただろ!」
ののし
声を低めて、レイズは罵った。
「もたもたしてるからだ! このノロマ!」
「ノロマって言うなよ、ちょオ気分悪いぜ」
ひそ
辺りをうかがい、デフは声を潜めた。
「けどさあ、本当にいいのかよ、兄貴?」
いまさら
「なんだよ、今更ビビってんのか?」
「だってさあ、これじゃ俺たち......」
口ごもるデフを、レイズは軽くこづいた。
どろぼう
しょくりょう
だつそうへい
「ああ、そうだよ、泥棒だ。食糧と水をいただいて......その上脱走兵になろうってんだ。
やつ
けど、悪いのは街の奴らだぜ」
レイズは壁を蹴って、舌打ちした。
みと
「俺たちの事、認めもしねエでこき使いやがってよ。食糧はくれねエし・・・・・・だから逃げるンだろ? それとも戻るのかよ?」
もど
「で、できるワケないだろ、 そんな......」
「だったら行くぜ、 ついて来な」
「ちょっ、待ってくれよォ、兄貴~」
りょううで
やみ
レイズは両腕にポリタンクを下げると、闇の中へと駆けだしていった。泣きそうな声で、デフがその後を追いかける。
二人は給水プラントの点検口を抜けると、地下トンネルへと駆け戻った。そこには一台の六輪トラックが停車している。
「兄貴、遅いよ、何やってんだよ」
「うるせエ、デフのせいだ。このバカ・・・・・・」
「バカって言うなよォ。俺だって太ってるなりに、ちゃんと走って来たんだぜ」
こんぼう みかいふう
トラックの荷台には、少年兵たちが待っていた。さらに食糧の梱包が未開封のまま、積み上げられている。
わき
レイズはその脇に、飲料水の入ったポリタンクをしまいこんだ。

「これで脱出の準備はバッチリだ。後は市外まで一気に行こうぜ」
だいじょうぶ
「けど、大丈夫かなあ、兄貴~」
デフは、心配そうに周囲の闇を見渡す。
みわた
「そろそろ給食部の奴らも気が付くぜ。追いかけて来られたら、どうすんだよ~」
「って言うか、そっちの心配かよ?」
ずれたサングラスを直して、 ジャムが言う。
じょうだん
どろ
じゃしん
「ヤバイのは邪神だぜ? 早く逃げねえと、俺たち奴らの昼飯だよ。 そうだろ、兄貴?」
「あ、ああ......そうだな...............」
そ
平静を装って、レイズは荷台から降りる。
だがジャムの言葉で、全身に寒気が走った。
(冗談じゃねエ・・・・・・)
やつ
(もうあんな奴らのために戦えるかよ......)
(あんな思いまでしてよ......)
昨日からずっと消えないのだ。
けつめいしゃ こうしょう
間近で見た血盟者の哄笑が・・・・・・
ぞうもつ
にお
そして目の前で殺された者の血の色も、むせかえるような臓物の臭いも......
からだ
(俺の身体に取り憑いてやがる......)
泥を蹴って、運転席に乗り込んだ。
「レイズ兄ちゃん、元気ないね?」
助手席には、リムロが座っていた。
だ
いつものように子犬の人形を抱きしめ、何も知らずに笑っている。
「...............何でもねエよ、ベルト締めな」
「うん......リムロ、早くお外に出たいよ」
いつしゅん。
小さな手でシートベルトを巻き付けた。
「もうリムロ、飽きちゃったもん。みんなもお外に行けばいいのにねえ」
「ああ、そうだな........」
いつしょ
「ロエルお姉ちゃんは行かないの? リムロ、一緒に行きたいよお」
「ああ、来ねエよ・・・・・・俺たちだけだ......」
「そんなのつまんないよ。ジャスティス様も来ないのお?」
一瞬、キーをひねる手が揺れた。
それでもエンジンをかける。
レイズはヘッドライトを点け、トンネルの先をじっと見据えた。
だま
「......来ねエよ、 少し黙ッときな」
「じゃあさあ、じゃあさあ、せんがいきのお姉ちゃんはさあ・・・・・・」
「黙っとけって言っただろ!」
吼えて、アクセルをふかした。

のが
何かから逃れるように、レイズはトラックを走らせた......はずだった。
「な、なんだ......!」
がくん、とトラックが大きく揺れる。
かんだか
同時に、タイヤが甲高い音を立てて軋んだ。
きし
だつりん
荷台の中で、少年兵たちも騒ぎ出す。
「ちょっと兄貴! 何やってんの?」
「全然動いてないよ、この車」
「脱輪してンだよ、俺が見てくる」
言って、一人の少年が荷台から降りた。
レイズもドアウインドウから顔を出す。
とたん
そして車体を見下ろした途端・・・・・・
もど
「シュルツ、戻れッッ!」
とうとう さけ
後部に向かって、唐突に叫ぶ。
「車体の下に.........!」
「ぎいいいいっっ!」
ぜつきょう こうさ
警告と絶叫が交叉した。
ぼうぜん
仲間たちは呆然と、少年・・・シュルツを見つめていた。
くもん
シュルツは、立ったまま苦悶している。
しょくしゅ から
ねんえき
せんたん
その両足には、青緑の太い触手が絡みついていた。粘液に濡れたそれは、先端に丸い口を持っている
。並んだ鋭い牙は、すでにシュルツの両足に喰らいついていた。
するど きば
「あ......兄貴......助けて......」
シュルツが力無く、手を差し伸べる。
じゃしん
だが六輪トラックの下から伸びる触手は数を増し、次々シュルツに巻き付いていった。
のどもと むさぼ
腕に絡み、喉元を貪り始める。
およ
巻き付いたそれを外そうにも及ばない。
じょじょ
少年の顔は、徐々に黒く変色していった。
「あ......兄貴ぃ.........」
せんけ
どっと口から鮮血が撒かれた。
ぽきぽきと骨格を折られながら、少年は触手の渦に沈んでいった。
(............ああっ......)
悲鳴が声にならない。
とつき

それでも咄嗟に、レイズはリムロを抱えると運転席から脱出した。
いつせい
仲間たちも一斉に荷台から飛び降りる。
「邪神だっ、早く......!」
「武器、持ってけ!」
トラックが横転したのは、ほぼ同時だった。
たた
下から突き上げられ、通路に叩きつけられるや、
二度三度バウンドする。伝わる衝撃に、少年たちも床に這いつくばった。
しょうげき
「レイズ兄ちゃん!」
「なんでここに邪神がっ!」
レイズは、リムロを抱えたまま振り返った。
てつくず
もはや六輪トラックは鉄屑である。
がれき
その瓦礫を押し退けて......
《・・・・・・ゼア・ハ・・・・・・》
《・・・・・・ ハゼス ・・・・・・ ゼア・ハ・・・・...!》
「逃げろっ......!」
しょくしゅ
ほ ぼく
少年兵たちは、散り散りに走る。だが逃げ遅れた二人がまず、触手に捕縛された。 「ロス!
ガース!」
どな
怒鳴るレイズは、ロエルを抱えたままだ。
そげきじゅう
にぎ
手には狙撃銃も握っている。
だが現れた邪神の姿に、レイズは引き金に指をかける事もできなかった。
《・・・・・・ ハゼス ・・・・・・ ゼア・ハ・・・・・・!
》
よど
かえる
うで
どろりと淀んだ目。 蛙に似た邪神は、四つの腕を振り上げていた。
全身は、毒々しい青と黒の迷彩色。背中からはのたうつ触手が無数に伸び、
ふるふると不安定に震えている。
めいさいしょく
ふる
「助けてくれ、兄貴っっ!」
ひび
悲鳴が地下トンネルに響き渡る。
わた
イフリート
ゆうぜん
つぶ
すばや
だが邪神伯ハゼスは、悠然と触手を引き寄せ、押し潰した二人の少年兵を素早く巻き取っていた。そのまま持ち上げ、だらしなく開いた口へ運び入れる。
血塗れの骸をうまそうに、邪神伯は嚥下していった。

まみ
むくろ
イフリート えんか
「あ、あいつ、ロスを喰いやがった!」
くちびる
デフがどこかで悲鳴を上げている。仲間は頭から呑まれ、唇に脚が吸い込まれる。
レイズは、思わず悲鳴を漏らした。
「ああああっつ......!」
「レイズ兄ちゃん! 兄ちゃん!」
しがみつくリムロに何もしてやれない。
じゃしん
ぶんぴつせん
だが邪神は、さらに背中の分泌腺から一気に酸性の体液を発散した。液はシャワーの如く、周囲に撒き散らされる。
ま
「ぎゃああああっっ!」
体液を浴びた少年兵が絶叫を上げ、身悶えた。皮膚が溶け、赤い肉が剥き出しになる。
(俺も死ぬ......)
俺も死ぬんだ・・・・・・)
かい せんりょう
血肉の赤が視界を占領した。
ごと
とたん
は
途端に吐き気がこみ上げる。
だが吐くほど食べてはいない。
くもん
胃が痙攣する痛みに、レイズは苦悶した。
うす
「兄貴! 逃げろ、兄貴! 兄貴!」
さけ
じゅう
ジャムが叫びながら、銃を撃ちまくる。
こた
だが応えられない。のたうつように身悶えし、レイズは歯を食いしばった。
《・・・・・・ゼア・ハ・・・・・・》
《・・・・・・ ハゼス ・・・・・・ ゼア・ハ・・・・・・!》
こわ
「兄ちゃん、怖いよ! レイズ兄ちゃん!」
せま
薄れていく視界に、邪神が迫っていた。
しょくしゅ
揺れ動く無数の触手が、 左右から伸びる。
うで
あやま
レイズは、腕の中のリムロに謝った。
(ごめん............... 守ってやれなくて......)
(俺... 本当はこんな奴だ・・・・・・)
(本当は俺......)
《・・・・・・ ハゼス ・・・・・・ ゼア・ハ······!》
じゃしん ほうこう

頭上で、邪神が咆哮した。
いと
その声に挑むかのように......
「逃げるんだ! レイズ!」
せいれん こわね
テイク・ワン
「第一撃
はんきょう
清廉な声音が地下トンネルに反響した。
ねむ
邪神が眠そうな眼を振り向ける。
その正面に立ち、ジャスティスは聖印を結んでいた。
せいせんじょう
聖戦杖をふるい、力強く叫ぶ。
ラウンダバウ
「迂回衝撃弾っ!」
さくれつ
しゅんびん
ばくこう またた
結んだ指先から爆光が瞬いた。
炸裂した創世神の力は、空中に飛び、四つに分裂する。
ジャスティスが放った電光は、俊敏に蛇行し、邪神の口の中へ突入した。
だこう
とつにゅう
らいだん
同時に四つの雷弾が起爆した。
《ゼア・ハー ゼア・ハー》
のど
いつせい
邪神の喉が、腹が、一斉に吹き飛んだ。
「ジャスティス!」
デフとジャムが合唱する。
よみがえ
その声で、レイズの意識も蘇った。
(ジャスティス ......まさか......)
苦痛をこらえ、上体を起こす。
だいじょうぶ
だがレイズの前では、半ば崩れかけた邪神が必死にもがき苦しんでいた。
《ゼア・ハー ゼア・ハー》
《ゼア・ハー ゼア・ハー》
きょうほん
しょくしゅ らんぶ
眼球をだらりと垂らした邪神は、泡を吹いて狂奔した。触手を乱舞させながら、焼けた
だれるように蒸発していく。
後には、黒い染みが残されただけであった。
「わあっ、ジャスティス様だあっ!」
らだ
レイズの腕から飛び出し、リムロが駆け寄った。その小さな身体を抱きとめ、ジャスティスはほっと
安堵の息を吐いた。
あんど
「大丈夫だね、リムロ? 怪我はない?」

「うん、レイズ兄ちゃんが守ってくれたの」
犬の人形を抱きしめ、リムロは言う。
ジャスティスは、一同を見渡した。
みわた
「みんなも怪我はないね？ 大丈夫?」
「ちょオ助かったよ、 すまねぇ!」
クルセイダー
「って言うか、さすが聖戦官だな」
少年兵たちも安堵の声を上げる。
そしてふと......レイズを振り返った。
もく
レイズ一人が黙したままだ。
目を伏せたまま、ゆっくり立ち上がる。
きんぱつ
にら
レイズは金髪の少年を睨み付けた。
「なに、心配してンだよ・・・・・・」
「え、レイズ・・・・・・」
「お前、なんで心配なんかするんだよ！ 俺がなんでここにいるか、分かってんだろ!」
ジャスティスを見下ろし、一気に吼えた。
しょくりょう ぬす
「俺たちは食糧を盗んだンだぜ！ 水を盗んだのも俺たちだ！ 怒ればいいだろ!
けどみんな.........みんな街の奴らのせいだからな!」
やつ
「レイズ......」
「あ、兄貴......」
こうちよく
デフとジャムが近づこうとして硬直する。
こぶし
かた
にぎ
レイズは両の拳を、堅く握っていた。
るいてき
その拳に、涙滴がこぼれ落ちる。
だがかまわず、レイズは一気に吼えたてた。
じゃしん
「せっかく義勇軍でがんばっても・・・・・・ みんな俺たちを見下してやがる!
どうせ俺なンか、邪神と戦った末にくたばりゃいいと思ってンのさ!そりゃそうだよな、昔はかっぱ らいばっかやってたんだからよ!」
[............]
ちょう
レイズは自嘲を浮かべ、拳を握った。
やくびょうがみ
「だから街の疫病神は、消えてくれりゃいいと思ってンだ!
義勇軍に入れば、街の奴らも俺たちのこと、少しは見直すと思ったけど・・・・・・無駄なンだよ、全部！ あんな奴らのために、戦って死ぬのももう御免なンだよ!」
むだ
ごめん
クルセイダー
小さな聖戦官はうつむいたままだ。
ふる

握った両手が震えている。
それを見たデフが、勇気を奮って前に出た。
「でもやっぱちょオまずいよ、兄貴......やっぱり街に戻ろうぜ......」
「って言うか、まだ間に合うし......」
ジャムも小さな声でそう告げる。
だがレイズは自嘲を止めなかった。
「お前ら、ちっとは考えな。街の奴らが俺たち、許すワケねえだろ」
ただ
吐き捨てるように声を叩きつける。
うら
「人の恨みは根深いもンだぜ·····一度失った信用なんて......取り戻せるワケねえさ!
だめに決まってる! ジャスティスみたいなお坊ちゃんには分からねエだろうがよォ!」
ほっ
さけ
うつむくジャスティスに叫び続ける。
えら
「結局、俺は義勇兵なんて偉そうな人間じゃねエのさ! ただの・・・・・・ただのガキなんだ!
お前みたいな聖戦官とは違う! 邪神なんかと戦えやしねエんだよ!」
クルセイダー
ちが
一気に吼えて・・・視線を動かした。

かたわ
じゃしん　こんせき
傍らにはまだ、邪神の痕跡が残っている。
だれ
うで　あし
そしてその周囲には、仲間だったモノが四散していた。誰かの腕、脚・・・・・・ねじれて見分けのつかない遺体の群れ・・・・・・
忘れていた吐き気がこみ上げた。
のどもと
喉元に達した胃液をかまわず吐き散らす。
まさら　きょうふ
ひざまず
今更、恐怖が肉体を震わせていた。
がちがちと鳴る歯を噛みしめ、レイズはその場に跪いた。
こわ
「......俺、怖かったンだ...............」

ゆか
冷たい床に向かってつぶやく。
けつめいしや
「あの血盟者を初めて見た時・・・俺、
怖くなったんだ・・・・・・嫌になったンだ戦うの‥‥‥殺されるのが怖くなったンだよ!」
おのれ からだ
あえ
震える己の身体を抱き、レイズは喘ぐように身を折った。
「俺は......もうだめなんだよ! ここで邪神に殺されるのが怖いんだよ! お前みたいに戦えねェ!
だから逃げる! 悪いかよ! 逃げるのが悪いかよ、ジャスティス!」
叫んで、顔を上げた。 そこに・・・・・・
「あ.........」
ジャスティスの視線があった。
ひとみ
やさ
水色の瞳は、優しい光を投げかけている。
とたん
目が合った途端、レイズの全身から震えが消えていた。 痛みが去り、怒りが霧散する。
不思議なほどに、心が安らいでいった。
だが本当に不思議だったのは・・・
「ジャスティス、お前......」
どこか悲しい笑顔でもあった。
瞳の水色が、氷河のように思える。
おく いつしゅん
かこく
笑顔の奥に一瞬、吹きすさぶ氷雪が見えた気がした。 その過酷さが、レイズの言葉を失わせたのだ。
「......もう......だめなのかな...?」
静かに、ジャスティスは言葉を発した。
顔を上げ、今一度繰り返す。
「..............もう、だめなのかな、 レイズ いろんなこと......もう無理なのかな......?」
たく
ジャスティスは、いつもの笑顔のままだった。希望に満ちた、屈託のない笑顔。
その純真な微笑みをたたえたまま......
大きな瞳から、涙を流していた。
じゅうけつ
水色のはずの瞳が、真っ赤に充血していく。
涙でぐちゃぐちゃの笑顔だった。
あやま
おか
「・・・・・みんな、 そんなに悪い人じゃないよ...
・一度ぐらい過ちを犯したって忘れてくれるさ・・・・・・信頼は必ず取り戻せる......だから戻ろ ・僕と戻ろう...君の街へ......」
こんら
もど
ぼく
あぜん
泣き腫らした瞳で笑いかけた。
唖然として、 レイズは立ち尽くすだけだ。
(なんでだ......)
(なんでそんなに・・・・・・優レンだ・・・・・・)
(なんでそんなに‥‥‥ 俺たちを......)

クルセイダー
ただの聖戦官のはずだった。
ただの少年のはずだった。
だが目の前のジャスティスに、かける言葉が出てこない。
(なんでだ・・・・・・なんでだ・・・・・・なんでだ・・・・・・)
息を呑み、混乱した頭を振って.....
ようやく、レイズは問いかけた。
「お前、いったい・・・・・・」
やっと言葉になった瞬間...
「ジャスティス様あ!」
とつぜん
突然、リムロが叫んだ。
クルセイダー
だが聖戦官も、 すでに異変に気づいていた。
「メタライトが......!」
にぎ
せいせんじょう
めいめつ
握る聖戦 杖が、再び赤光を明滅し始めた。
じゅうせい
ひび
直後に、給水プラントの中から無数の銃声がこだまする。続けて、警報機が鳴り響いた。
いつの間にか、無線通信が回復している。
なみだ ねぐ
『...... ジャスティス! 聞こえないの、ジャスティス!』
ヘッドホンから聞こえるライオットの声に、ジャスティスは涙を拭った。
「き、聞こえるよ、ライオット!」
『良かった! あんた今どこ? すぐに給水プラントに来て!』
はいご
きたい
おたけ
矢継ぎ早に言う背後からは、銃声と奇態な雄叫びが聞こえていた。
じゃしん
しんにゅう
『給水プラント内に邪神一体侵入したわ! 手が足りないの、急いで来て!』
「分かった...... レイズっ!」
そ
ジャスティスは、白い聖衣の袖でさっとリムロを送り出した。
「......リムロを頼むよ」
言うと、振り返りもせず走り出した。
その背にリムロが声を飛ばす。
「ジャスティス様あっ!」
ちゆうちょ
走り去るジャスティスに、少年兵たちは一瞬、躊躇する。だが・・・・・・
「兄貴、俺たち、行くよ......」
いつしょ
だま
くちびる
「一緒に行こうぜ・・・・・・」
だが、レイズは黙って唇を引き結ぶ。
「けどよ、俺............」

かわ
そげきじゅう
傍らには狙撃銃が転がっている。
だがそれに手が出せない。
こわ
銃を握るのが、怖くてたまらなかった。
しかし......
とうとつ
かか
「私、行くもん!」
唐突にリムロが狙撃銃を拾い上げた。
「ジャスティス様と一緒に行くもん!」
まなざ
せんげん
真剣な眼差しで、みなに宣言する。
とつぜん
抱えるように持ち上げ、突然走り出した。
「バカっ、リムロ、どこ行くんだ!」
あわ
もど
慌ててレイズは少女の後を追った。
続いてデフたちも通路へ駆けだしていく。
「戻れよ、リムロ! 待たねぇかっ!」
ぜつきょう ただなか
足音はもつれながら、銃声と絶叫の只中へ突き進んでいった。

《ゾ・グ・オグ!》
《ゼ・グラ! ゾグ・オグー》
じゃしん
しつよう
きようかん
給水プラントに現れた邪神は、執拗に叫び続けている。
施設を揺るがすその叫喚に、義勇兵たちの声もうわずっていた。
おうえん
こんがん
「至急、応援をよこしてください!」
都市内通話器に、何度も懇願する。
かくへき
「邪神は二重隔壁を突破しました! これ以上は......!」
『今、ロエルとバウザーが向かっている!』
通話器の向こうからハヤテも叫び返した。
『ジャスティスも先発しているはずだ! それまで持ちこたえろ!』
だが、兵士はその声を聞くことはなかった。
せま
いつの間にか、邪神は彼の背後に迫っていた。悲鳴を上げる間もなく、押し潰される。
つぶ
ゆか
通話器を握った腕がちぎれ、床に転がった。
そうてん
「好き放題しやがって!」
ライオットは、左腕の義手を振り向けた。

だんそう
じゅうげき
銃撃を続ける三本の銃身は、もうすでに熱く焼けている。 それでも新たに、重厚な弾倉を装填した。
ついび へんこう
「みんな早く逃げんのよ!」
せま
ごうおん
〈フルオート射撃を継続〉
〈目標自動追尾。 変更指定があるまで固定〉
迎撃する兵士たちを後ろへ追いやり、邪神の目前に迫る。
轟音と共に五五六ミリ三連銃が火を噴いた。ゾダニウム徹甲弾が、斜めに邪神の巨体を撃ち抜いていく。
てつこうだん
なな
《ゾ・グ・オグ!》
やしん
《ゼ・グラ! ゾグ・オグー》
邪神がくぐもった呻きを発する。
とっしん
だが突進は止まらない。
すべ
床の血に滑りながら前進する邪神を、ライオットはきっと見上げてみた。
「しぶといわね、あんた......」
直径五メートルはあろうか。
邪神の肉体は、青黒い球形をしていた。
表面には無数の血管が浮き上がり、数百の眼球がまぶたを開いている。さらにその間隙からは、皺だらけの人間の手が何十本も飛び出し蠢いていた。
しわ
うごめ
な
たお
その巨体は、すでに四十名以上の兵を薙ぎ倒している。辺りには裂断された四肢がばらまかれていた。
さんげき
ひび
わた
その惨劇に、悔しげな悲鳴が響き渡った。
「なんてことを!」
駆けつけたジャスティスが声を上げる。
せいせんじょう にぎ
にら
イフリート
聖戦杖を握った少年も、邪神の巨体を睨むように見上げた。
「邪神伯グ・オグか!」
「ジャスティス、来たのね!」
ライオットは相棒と視線を合わせた。
もうまく
せんとう
あわ
その網膜には、邪神の戦闘データが慌ただしく表示されている。
邪神が放出する魔導線量は四百を越えていた。

でごわ
「気をつけて! こいつは手強いわよ!」
言われる前に、ジャスティスは飛び退いた。
イフリート
くだ
邪神伯グ・オグが、球形の体を前転させつつ突進し始めたのだ。 柱が砕け、 机が散る。
ゆか
「まったく次から次へと......!」
《ゾグ・オグ!〉
《ゼ・グラー ゾグ・オグー》
さんれんじゅうしん
ライオットは、三連銃身をフル回転させた。
からやつきょう
床にどっと空薬莢があふれ落ちる。
てっこうだん
つぶ
ゾダニウム徹甲弾は、邪神の眼球を潰し、腕を吹き飛ばした。 だが突進は止まらない。
たた
逆に、無数の指先が邪悪な力を集積し、一気にライオットに叩きつけた。
「つああっっ!」
ひょうげき ちゃくだん
ライオットの周囲に、無数の氷撃が着弾する。 ばずんっ、ばずんっと床が吹き飛び、が弾ける。
　　　炸裂した鋭い氷の破片は、ライオットの皮膚を容赦なく斬り裂いた。
はじ
さくれつ
するど
はへん
ひふ
ようしゃ
お
はだ
「乙女の玉の肌をっ......!」
どせい
かん ちょうやく
怒声を浴びせ、ライオットは突進に立ち向かった。 果敢に跳躍し、邪神を飛び越える。
邪神は標的を失い、急停止した。
その背後で義手を元に戻す。
もど
たいけん
ライオットは、背中の大剣を引き抜いた。
かくご
「斬り刻んでやる、覚悟しなっ!」
あらし
再び嵐のように、氷弾が辺りに降り注ぐ。
ばくえん
ごうう
と
せんがいき おそ
爆煙は視界を奪い、破片は豪雨の如く、戦鎧鬼に襲いかかった。
まめてつほう
「そんな豆鉄砲でくたばるかよ!」

剣匠ザウエルの双子剣を左右にかざし、ライオットは邪神を袈裟懸けに斬り払った。
いや
飛ばされた腕が、壁にぶつかり嫌な音を立てる。 それでも弾雨は止まらなかった。
「ライオット! ここじゃまずいよ!」
破片を避けながら、ジャスティスが叫ぶ。
しせつ ひがい
さけ
「施設に被害が出たら、どうしようもない! 地下トンネルまでおびき出すんだ!」
「分かったわ!」
怒鳴って、再び邪神の前へ飛び出す。
ほそく
せんがいき
グ・オグは、無数の眼球でライオットの動きを捕捉した。
ぐらりと揺れるや、戦鎧鬼の後ろに迫ろうとする。
せま
きゅうはく
「そうそう! おとなしくついて来りゃあいいのよ、でくのぼう!」
急迫する邪神に斬りつけ、前進を押しとどめる。さらに少し後退し、また斬りつける。
こうみょう
ぼうぎょ
ライオットは、巧妙な機動防御を行った。
ジャスティスも別方向ながら、施設の出口へと急ぐ。 その目の前に······
「ジャスティス様あ!」
「リムロ、 来ちゃだめだ!」
とつぜん
そげきじゅう かか
あわ
突然、狙撃銃を抱えた少女が駆け寄ってくる。ジャスティスは慌てて、リムロを押しとどめようとした。
しかし背後から・・・・・・
かく
「お前は隠れてな、リムロ!」
「レイズ!」
すばや
だ
追いついたレイズが、リムロを抱き上げた。
素早く狙撃銃を取り上げると、少女を背中に追いやった。
じゃま
「リムロも戦うよお、邪魔しないでえ!」
「ムチャ言うな! ジャスティスの邪魔だ!」
きんぱつ
そう言って、金髪の少年に向き直る。
サウンド
「お前は奇跡を準備しろ! 時間は、俺たちが稼いでやる!」
「レイズ......!」
《ゾ・グ・オグ!》
《ゼグラ! ゾグ・オグー》
きょたい
前進したグ・オグの巨体が姿を見せる。
同時に、少年兵たちが現場に追いついた。
「なんだよ、あれ! ちょオ気持ち悪ぃ!」

すばや
駆けつけた仲間たちに、レイズは素早く視線を送る。
はん
「ジャムたちはロケットの用意だ! デフの班は前列は出ろ! 準備ができるまで撃ちまくれ! いいな!」
「分かった、兄貴!」
あぶ
「レイズ兄ちゃん、危ないよ!」
かく
「リムロ! お前は向こうに隠れてろ!」
がれき かげ
じゅうげき
少年兵たちは瓦礫の陰で隊形を組み、銃撃を開始する。
ジャスティスは聖印を結び、 思念を集中した。 レイズたちを信頼し、無防備なままで。
レイズも、狙撃銃に弾丸を装填する。
しかし............
ふる
(ちくしょう、震えてやがる......)
ぜつきよう
りょううで かた
邪神の絶叫に、両腕が肩から揺れている。
指の間からゾダニウム弾がこぼれ落ちた。
拾い上げた後、また取り落とす。
からだ
情けないほどに、身体が言う事をきかない。
(ふざけんな‥‥‥ふざけンな......!)
おのれののし
心中で己を罵る間に、仲間たちは二重の戦列を形成していた。
「兄貴! 準備いいぜ!」
はんよう
ほう
ジャムが肩撃ち式の汎用ロケット砲を担ぎ上げた。仲間が砲弾を装填する。その動きに、レイズは震えをこらえて叫喚した。
きょうかん
「かまわねエ! ぶっとばせ!」
ごうおん しょうげき
発射の轟音と衝撃。
じゃしん
きょたい
とつにゅう
おふか
ばくさい
ダニウム製の弾頭は、邪神の巨体に突入し、体内の奥深くで爆砕する。
同時に、多量の体液が周囲に飛び散った。
《ゾ・グ・オグ!》
《ゼ・グラ! ゾグ・オグー》
「いいぞ、やった!」
かたむ
とど
大きく傾いたゾ・オグの姿に、ライオットは止めの一撃を身構える。
せんこう
しかしそれより早く、ジャスティスが聖印から一気に閃光を解き放った。

「神聖炎熱堕撃!」
あしもと
しょうかん
かがや
てん
ジャスティスは邪神の足下に、 古代神聖文字列を三角形に召喚した。
　　文字列の輝きは天井へ伸び、神々しい三角柱を形成する。
じょう
かれつ
こうごう
その柱に閉じこめられた邪神めがけ、苛烈な業火が襲いかかった。鳴き喚きながら、
だっしゅつ
ごうか
おそ
わめ
ゾ・オグは必死に脱出を試みた。
《ゾ・グ・オグ!》
《ゼ・グラー ゾ・グ・オグー》
「す...............凄ェ......」
ほうぜん
少年兵たちは、焼き尽くされる邪神を呆然と見つめていた。
とつき
だが目を見開いたジャスティスは、咄嗟に邪神の変調に気づいていた。
「だめだ、逃げて!」
振り返って、レイズに叫ぶ。
「あの邪神は.........!」
「ジャスティス、伏せろ!」
「レイズ兄ちゃん!」
さと
さけ
無数の悲鳴が入り乱れる。
ほうちょう
眼前で邪神は、一気に肉体を膨張させた。
これつ
球体の表面に、無数の亀裂が走る。
ばくだい ほのお うず サウンド
と悟った直後、邪神伯グ・オグは巨大な火球となって自爆した。
　　莫大な炎の渦が奇跡を打ち破り、一気に少年たちを呑まんとした。
「ジャスティス! レイズ!」
接近していたライオットも思わずひるむ。
はれつ
せん
壁が崩れ、配水管が破裂した。
なだれ
ほうらく
繊維セメントが雪崩を打って崩落する。
爆発は暗い地下トンネルを揺るがすほど、深く共鳴した。
「今のは......!」
駆けるロエルがまず気づいた。
続けて、バウザーも前方を指さす。
「あれだ、見てみろ!」

給水プラントの入り口のはずだった。
そうこう
ごうおん
はじ
だがその分厚い装甲シャッターが、内側から轟音と共に弾け跳ぶ。
地下トンネルに一気に、火炎の奔流があふれ出した。
かえん ほんりゅう
「伏せろ、ロエル!」
「きゃあああああっっ!」
炎熱と衝撃を避け、義勇兵たちは床に湿った。その頭上を熱波が一瞬、行き過ぎる。
一撃が去ると、ロエルは果敢に顔を上げた。
「な、何なのっ!」
ひとかげ
見上げた視線の先に、人影がちらついた。
こくえん
よご
デフが、ジャムが‥‥‥一様にふらつきながら、黒煙の中から少年兵たちが現れる。
たお
煤に汚れ、トンネルの床に倒れていった。
「あなたたち、いったい何が!」
だ
駆け出して、ロエルはデフを抱き留める。 だが少年は、黒い顔で咳き込むばかりだ。
「な、中に......レイズの兄貴が・・・・・・」
「何ですって!」
あね
「ジャスティスと・・・・・・姐さんも......」
ようやく絞った声に、ロエルは血の気を失った。駆け寄ったバウザーも、慌てて給水プラントへ視線を向ける。
「ジャスティス! ライオット!」
ほのお
だがプラント内は、もはや炎に包まれていた。湧き出る黒煙も果てしない。 作動したスプリンクラーの水音が、呼びかけを妨げる。
さまた
それでもロエルは立ち上がり、炎に向かって声を涸らした。
「ジャスティス! レイズ! 返事して!」
ようやく、二人の少年が現れた。
かた
レイズがジャスティスに肩を貸し、引きずるように支えている。
ロエルの顔を認めると、二人は安堵の声を合唱した。
うで
あんど
「ロエル、来てくれたんだね・・・・・・」
「みんな、無事みてエだな......」
かくにん
仲間を確認し、レイズは微笑む。 そして、どうと床に倒れ込んだ。
ほほえ
「レイズ、 しっかり! ジャスティス!」
ロエルは、二人の少年を揺すぶった。
力尽きた二人を、 義勇兵たちも取り囲む。
ただ一人、バウザーだけが、未だ炎に向かい合っていた。
「ライオット! いないのか、ライオット!」

「ライオット......さん......」
ロエルも視線を上げる。
せんがいき
そこにゆらりと、戦鎧鬼の影が現れた。
ひふ
外套が燃え、皮膚が焼けている。
だが構わない。ライオットは小さな身体を抱きながら、灼熱の中から脱出してきた。
「..............ごめん、みんな......」
腕の中の少女を見下ろして、 ライオットはつぶやいた。
「............間に合わなかったわ......」
「リムロっ!」
ロエルが口元を両手で覆った。
その名に、レイズも身を起こす。
うそ
ふる
「嘘だろ、リムロ......リムロっ!」
駆け寄るレイズの前に、ライオットは小さな女の子を横たえた。
左手には、犬の人形の燃えかすが握られている。リムロの全身は、酷い火傷で覆われていた。
ひど やけど
「お兄......ちゃん...... レイズ......兄ちゃん」
震えながら右手を伸ばす。
その手をひったくるように握り、レイズは喚くように呼びかけた。
「俺はここだ! 死ぬなよ、リムロ! 目を開けろ! 死んじゃだめだ! リムロ!」
「そうだ! 死ぬなよ、リムロ!」
「目を開けろよ、 リムロ!」
少年兵たちもすがりつく。
ひざ
ロエルも膝を付き、必死に呼びかけた。
「しっかりして、リムロー 今すぐ手当してあげるから! だから死んじゃだめ!
絶対死んじゃだめよ!」
きんぱつ
だがバウザーは、沈痛な顔で首を横に振った。集まった兵士たちも絶望の声を上げる。
「......お姉ちゃん・・・・・・」
リムロが笑ったように思えた。
ロエルは、激しい嗚咽を必死に呑んだ。
あきら
だがレイズは諦めてはいなかった。
「ジャスティス!」
どな
振り返って、怒鳴りつける。
クルセイダー
サウンド
「お前、聖戦官だろ! 奇跡を起こせ! こいつを助けてくれよ! できるだろ! お 前、
それくらいできるだろ!」
ラスト・サイク
さけ
一気に叫び、 そして気が付いた。
ジャスティスはすでに聖印を結んでいる。
金髪の少年はリムロに近づき、小さな手を優しく握りしめた。 そしていつもの笑顔で。
「最終撃......」
はっと、ライオットが身を固くする。

「ジャスティス、止めて......!」
ユア・ライフ
「生命譲渡治癒・・・・・・」
えいしょう
静かな詠唱がトンネルにこだました。
からだ
やけど
ぜいじゃく
ジャスティスの手から発した聖なる光が、 リムロの身体を包み込む。
火傷は消え、脆弱だった呼吸も次第に回復していった。
しだい
「ジャスティス様......」
見開いた目で確かめ、笑いかける。
うれ
ジャスティスも嬉しそうにうなずいた。
「良かった...心配したんだよ......」
お
言い終えると、がくりと倒れた。
「ジャスティス!」
驚いて、ロエルが少年を抱き留める。
とつぜん
その顔が突然、赤い光に照らされた。
がくせん
そして......全員が愕然とした。
「.........ジャス... ティス......」
クルセイダー
ふる
せんり
気を失った聖戦官に、ロエルは声を震わせた。 レイズは戦慄し、背を震わせる。
けつめいしや あかし
こう
まがまが
じゃしゅ もん
ジャスティスの手の甲に、禍々しい邪宗紋が浮かんでいたのだ。 邪神への忠誠の誓い。
かがや
血盟者の証・・・・・それが赤く輝いている。
ちか
「ジャスティス、 あなた、 どうして......」
くちびる
むろん
ロエルは唇をわななかせて問うた。
無論、答えは無い。 代わりに・・・・・・
「ライオットさんっ!」
ロエルが悲鳴を上げた。
だれ
戦鎧鬼の腕が伸び、
ロエルの腕からジャスティスをもぎ取った。
にぎ
「ライオットさん・・・・・・」
むな
ロエルは、空しくなった手を握る。

その目の前で、ライオットは相棒を抱きしめていた。
ひとみ
かたくなな瞳で・・・・・・唇を噛みしめて......
その瞳をロエルは真っ直ぐに見据える。
だま
ぎょうし
誰もが押し黙り、二人を凝視した。
しゅんかん
それは気が遠くなるほど、長い瞬間であった。

【第四章 ワイマール/投獄】

〈そんなはずは・・・・・・〉
〈そんなはずはない......!〉
ボグダノフは、闇黒を爪で掻きむしった。
クルセイダー
なぜ聖戦官があの印を持つ......!〉
しこう
〈なぜ...... 至高の力を示す......〉
ルシフエル
〈邪神帝様の邪宗紋を......!〉
くる
血盟者は、嫉妬に猛り狂った。
とうごく
あかし まちが
印はまさしく、邪悪な至高神から絶対的な力を授けられた証に間違いない。
かく
うなばら こかつ
星座を四散させ、太陽を覆い隠し、大陸を動かし、海原を枯渇させたと言うその力・・・・あらゆる血盟者が欲してやまず、未だ誰も手にしたことのない究極の烙印。
いま だれ
きゅうきょく らくいん
〈あれは何かの間違いか......〉
〈お答えあれ······お答えあれ、我が主よ......〉
闇黒が、わななくように呼吸を吐く。
おそ
ふる
ボグダノフの盟主は、何かを恐れるように、その思念を細やかに震わせ始めた。
《エグ......ンガイ・ヴェール・・・・・・》
《エグレグ・・・・・・ンガイ・ヴェール......》
ぼか
〈そんな馬鹿な!〉
あら
思念を解し、ボグダノフは声を荒げた。
では奴がそうだと言われるのか!〉
〈ジャスティスこそ、例の······!〉
げきしん
呼ぼうとした時... 闇黒が激震した。
うな
唸りを上げて、異空間が裂け始める。
えんりよ

裂け目から強大な何かが、遠慮なく踏み込んできた。同時にボグダノフの思念が締め付けられ、全身を凄まじい激痛が疾走する。
すき
しつそう
とつぜん
〈おああああっっ!〉
〈そこから先は口に出すな、ボグダノフ〉
ルシフエル
ちんにゆう
突然、新たな思念が闇黒に闖入した。
はさ
《邪神帝様の為す事に疑念を挟むでない〉
ごと
じやすい
〈貴様如きが邪推しても何も分からぬ......〉
ゆが
ひとかげ
思念は、歪んだ人影となって現れた。
あっぱく
こわね
こんろう
圧迫するような声音で、 思念はボクダノフを翻弄する。
まね
〈出過ぎた真似はご不興を買うことになる〉
おのれ
〈貴様は己の戦いに勝てばそれでいいのだ〉
せんりつ
ボグダノフは戦慄した。
とてつもない力が、目の前に現出していた。
そしてその力の持ち主こそ・・・・・・
〈あなたはご存じなのか!〉
〈ジャスティスが何奴か......〉
〈あなたはご存じなのか!〉
とたん
からだ
みもだ
叫んだ途端、再び激痛が身体を打つ。
身悶えるボグダノフに、新たな思念は静かに言い放った。
〈知らぬ方が良いこともある・・・・・・〉
〈知ったとて、どうにもできぬこともな......〉
こうしょう ひび
新たな思念は、哄笑を響かせた。
ぜつきょう
ボグダノフは、絶叫を繰り返す。
邪神侯ンガイ・ヴェールも、今はただ沈黙を続けるだけであった。
「どうして信じてくれないのよ!」
どな
もう何度も怒鳴り続け、ライオットの喉は薄れきっていた。それでも今一度、統合作戦本部のテーブルを叩き、絶叫する。
たた
けつめいしゃ

げきた
「あの子は血盟者なんかじゃない!何度も邪神を撃退したじゃない!
あれが全部、芝居だって言うの!」
「そう思われても仕方ねえだろ」
あし
めんどう
地図が散乱したテーブルに脚を乗せ、バウザーは面倒そうに口を開いた。
じゃしゅうもん
あかし
「ジャスティスの手に浮かんだのは、邪宗紋・・ ・血盟者の証だ。
邪神と契約を結んだ証拠じゃねエか。 誰だって疑うぜ」
たばこ
言って、煙草をふかした。
みわた
ライオットは、周囲を見渡した。
だま
ざわく
ハヤテは座したまま、黙りこくっている。 義勇兵たちは一様に、疑惑の視線をライオッ
トに向けていた。
「そうだ......我々は本当はあんたの事も疑っている。 邪神の手先だと......」
一人の士官が正直に告白した。
ほういもう とつば
あや
「疑えばキリがない・・・・・・包囲網を突破した話は最初から怪しかった給水プラントが襲
われたのも.....あんたたちの手引きだと言う者もいるんだ・・・・・・」
しょう
「スパイだと思ってる訳ね」
「思う方が......当然だろう........」
めいもく
瞑目したまま、 ハヤテがつぶやく。
せんがいき
だま
戦鎧鬼はしばし黙り、大きく息を吐いた。
クルセイダー
サウンド
「あの子はれっきとした聖戦官よ・ ・奇跡を使えるの何度も見たでしょう?」
「ならなんで邪宗紋が......」
「あたしが訊きたいわよ、それは!」
なぐ
テーブルを殴り、バウザーの声を制す。
ライオットは、やるせない気持ちで声を震わせた。
サウンド
「あの子にだって分からないの... 奇跡を三度使って
しょうかんりょく
召喚力を失うとあれが出るの
よ。でもそれはあの子のせいじゃない! ジャスティスは無実よ!」
言って、戦鎧鬼はロエルを見た。
くじゅう
司令官たる少女も、じっとライオットを見つめている。 苦渋を表現し、ロエルは席か
らおもむろに立ち上がった。
ちかろう

「とにかく......しばらくジャスティスには地下牢に居てもらいます...
義勇軍だけでなく、市民全体に動揺が広がっていますから」
どうよう
人づてに話が広まるのは早いものだ。
しゃしゅう
ジャスティスの手に邪宗紋が浮かんだ事実は、数時間のうちに一万二千人に広まった。
さつとう
そくじ しょけい
統合作戦本部には、ジャスティスとライオットの即時処刑を求める市民が殺到した。
『裏切り者を殺せ」
かたき
『家族の仇を討たせてくれ』
さけ
いつさい むだ
無実を叫んでも、一切が無駄であった。
「ならあたしも牢にぶちこんでよ・・・・・・」
いまどお
ライオットは、ロエルに言い放った。
いっしょ
「疑ってるなら、あたしも一緒にぶちこんでよ! どうしてジャスティスだけなの!」
「ライオットさん!」
げきとつ
二人の視線が激突する。
こんわく
眼光と困惑する瞳。
ひとみ
だがすぐに、ロエルが耐えきれず視線を外す。 代わって、バウザーが声を上げた。
「バカ言うなよ。お前ほどの戦力を牢で遊ばせておける余裕なんざ、どこにもねえんだ。お前さんも
みんなが怪しんでるが……ぶちこむのは戦いの後でいい。そういう判断さ」
あや
「あんた本当に疑ってるの、バウザー?」
ようへい
ライオットは、傭兵に視線を突き刺した。
けつめいしゃ
「あんた本当にジャスティスが、 血盟者だと思ってるの?
あんたもジャスティスを・・・・・・処刑すればいいと思ってるの?」
「当然だろ」
たた
とつき
素っ気なく、バウザーは言い放った。
あかし
しょうこ
「邪宗紋は血盟者の証だ。敵だっていう証拠じゃねえか。 処刑以外どうしろって言うんだよ?」
咄嗟に、ライオットは飛びかかった。
バウザーの胸ぐらをつかみ、椅子から引きずり落とす。
握りしめた拳を、傭兵の顔面に叩きこもうとする。
「やめるのよ、二人とも!」
ぜつきょう
いちげき
ロエルの絶叫が、寸前で一撃を食い止めた。

せんが
だがバウザーは、馬乗りになった戦鎧鬼ににやついた笑みをちらつかせた。
ほんしょう
「俺を殺すのか、 ライオット? それが本性って事かよ?」
だま
はな
きょたい
黙って、バウザーから離れる。 ライオットは傭兵に手を貸し、巨体を引き起こした。
じん ち
「ジャスティスはみんなを助けたわ。 みんなの目の前で・・・・・リムロも............」
「スパイは芝居がうまいもんさ」
起きあがって、バウザーは言った。
「そうでないなら、あのボグダノフとか言う血盟者を殺すんだな。取り逃がしたのも芝居だ......そう言う奴もいるんだぜ」
やつ
「とにかく、 みな持ち場につけ......」
疲弊した声で、 ハヤテが場を制した。

せい
たよ
じょうきょう
「バウザーも配置に付くんだ。
ジャスティスがいない今、戦力は頼りない状況だ。第一大隊の陣地強化を急げ......」
「へいへい......」
たばこ
椅子から立ち、傭兵は煙草をもみ消した。
「まあ、悪く思うな。お前が戦って勝てばいいって事だ。それができたらの話だけどな」
「バウザー!」
あざわら
しつせき
ライオットを嘲笑った傭兵に、ロエルが叱責を飛ばす。
義勇兵たちは、疑念を胸に統合作戦本部を出ていった。
残された三人はゆっくりと目を合わせた。
じゅうし
「仕方ないことです、 ライオットさん............」
くちびる
言ってロエルは、唇を噛んだ。
か
くのう
銃士の少女も、彼女なりに苦悩して出した決断なのだ。
一万二千人の殺気をかき消す説得など、今はできはしなかった。
「とにかく、現状では最善の策だ」
ハヤテは、無感情に言葉を発した。
しょけい
リンチ
から
「ジャスティスの処刑はまだ先だ。市民の私刑に遭うこともない。身柄は安全だ」
たんそく
やけに短い嘆息を吐く。 告げた軍師を、ライオットは正面から見つめ直した。
「ハヤテ、あんたも......」
もど
こうげき
「もういいだろう... 第一大隊に戻ってくれ。 敵の攻撃が終わった訳ではないからな」
せんきょう ず
そうはく
きびすを返し、散乱した戦況図の海に舞い戻っていった。心なしか、横顔の蒼白さが増している。
ちゆうちょ
その躊躇のない背中に、ロエルがわずかにうつむいた。
寒気とは異なる冷たい空気が、辺りに漂っていく。
ただよ
(やるしかない......)
はら
ひび
険悪な空気を振り払うように、ライオットも指の関節を鳴り響かせた。
(あのボグダノフに......)
(あたしが勝てばいいだけだ・・・・・・)
死を賭して、相棒の疑念を晴らしてみせる。
ちか

ライオットは、そう心中で誓っていた。

「あ......」
とびら
しようとつ
指揮所の扉を開け、ライオットは急に歩みを止めた。 ロエルが、 その背に衝突する。
「すみません、 ライオットさ・・・・・あっ.........」
「お、おう......」
みよう
指揮所の出口では、レイズが壁に背を預けていた。 一人きりで、妙に神妙な顔つきで。
だれ
「何してるの、レイズ? 誰かに用?」
「よ、用っていうかよォ............」
「あたし、部隊に戻るわね」
かた
ライオットは、さりげなく過ぎ去ろうとする。その動きに、レイズが身を硬くした。
「ジャスティス・・・・・・どうなるンだ?」
ライオットは立ち止まり、振り返る。
一瞬、レイズと視線を合わせた。
だが少年は、たまらず目を伏せてしまう。
「どうなるって・・・・・・まだ何も決めて・・・・・・」
「処刑するのかよ?」
真っ直ぐな問いに、ロエルは無理に笑ってみせた。
「個人的な意見で言えば・・・・・・したくないわ...私は彼のこと、信じてるから......」
「そうか......」
いらだ
「ジャスティスのこと、気になる......?」
「べ、別に......!」
苛立ったように、レイズは否定した。
「た、ただよ......あいつ、リムロを助けてくれたし......だから.........」
「そうよね......」
びしょう
ロエルは、金髪を掻き上げて微笑した。
「自分の秘密がばれてもかまわない、 それでもリムロを助けたいって、
　　ジャスティスは思ったはずなの。そんな人が血盟者だなんて、あたし信じられないし......」
けつめいしや
言って、ライオットに視線を移す。
せんがいき きんちょう
ぎょうし
戦鎧鬼は緊張を解かぬまま、レイズを凝視していた。
「ところで、リムロの様子はどうなの?」
「ああ、もう心配ねエ・・・・・・そこらでみんなと遊んでるよ・・・・・・」
「もう勝手に六輪トラックなんかで遊ばないでよ、今度やったら軍法会議だからね」
言ったロエルに、レイズは一瞬身を固くした。 ライオットにも怖々と一瞥を与える。
　　そして意を決したように......
「あ、あのさ・・・・・・」
「会ってきなさいよ、レイズ」
不意に、ライオットが言を遮った。
「あ、姐さん.....」
きんぎ

「ジャスティスに会ってきなさいよ。あいつの事、気になるんでしょ?
ちょっとぐらい面会させてもらえるわよ、ねえ?」
「え、ええ...... レイズなら...」
何も気づかず、 ロエルが申し出た。
「御礼、言いたいんでしょ
それぐらいいいわよ、看守には私から言っておくから」
くちびる か
ちゅうちょ
レイズは唇を噛み、何かに躊躇していた。
そしてライオットを果敢に見上げる。
「あんたは会わねエのか......?」
「あたしは行かないわ。行けないのよ」
こた
ライオットは、自然に応える。
ろう
あや
「あたしはジャスティスと、グルだと思われてんのよ。牢に行ったら、もっと怪しまれる
に決まってるじゃない」
「そ、そうだよな......」
こぶし にぎ
「ごめんなさい、ライオットさん・・・・・・」
「いいのよ、ロエルのせいじゃない。 それにあたしにはやる事もあるし........」
こし
けんじゅう
たた
言って、腰の大型拳銃をぽんと叩いた。
こんじょう
「新入りどもが待ってるわ。 決戦も間近だし、気合いと根性入れてやらないと」
だま
拳を握り、 レイズは押し黙った。
痛々しいような横顔でうつむいている。
やさ
ほほえ
だがロエルは、優しく少年に微笑みかけた。
「会ってくればいいわ、レイズ」
「すまねエ......」
短く言って、背を向けた。
とうとつ
そして唐突に通路を走り出す。
かか
ロエルは書類を抱えて、ため息を吐いた。
だま
じふぶき
「変ねえ、いつものレイズじゃないみたい」
黙って、ライオットも背を向けた。
(手助けはしないわよ......)
(一人で立ち向かうしかないの......)
(ジャスティスがくれた優しさに............)
(ジャスティスがくれた...... 試練に......)
外套をなびかせ、 ライオットも戦場へ歩みだしていった。

ちかろ
ふる
地吹雪は、地下牢まで震わせていた。
が
すみ
骨を刺す寒気が、煉瓦壁から染みだしている。 牢の隅には、氷柱すら出来始めていた。
「寒いなあ、もお......」
ジャスティスは、両手に息を吐きかける。
ぬく
ほんの少し、温もりが両手に広がった。
その手には、もう何も残ってはいない。
自分自身の手のはずだった。
自分を翻弄する手を撫でた少年は、近づく足音にふと顔を上げた。
「食事だ、ジャスティス......」
てつごうし
鉄格子の向こうから、看守が呼びかける。
はだ
だが食事の皿を持っていたのは、浅黒い肌の少年兵であった。
「レイズ......!」
「十五分だけだぞ、測っているからな」
「ああ、分かってる......」
くぎ
ひざまず
釘を刺す看守にうなずき、レイズはその場にいた。小窓から代用パンと具のないスープを差し入れる
。
すす
うれ
だがジャスティスは食事には目もくれず、鉄格子に這い寄った。
「レイズ、来てくれたんだ!」
くさ
「まず食えよ、臭いメシでも一応メシだ」
とつぜん
そう勧め、レイズは突然せせら笑った。
ぬす
「安心しな、こいつは盗んだもんじゃねェ」
じちょう
つい、自嘲の言葉が口から出た。
だがジャスティスの視線は真っ直ぐだった。澄んだ水色の瞳で、正面からレイズを見つめている。
「僕、嬉しいよ。 ありがとう、レイズ・・・・・・」
「助けてもらった礼もあるしな。 仲間やリムロの事も......」
そう言って、皿を指さす。
わた
さんぱつ
うなずいて、 ジャスティスもスープを一口すすった。 胃に染み渡る熱さに、 金髪の少年
は顔をほころばせた。
「おいしいよ、 レイズ......」
のんき
おおさわ
しょう
「ろ」
「ふっ、呑気な顔しやがって。外じゃみんなお前の事疑って、大騒ぎだぜ」

えがお
おび
かく
その言葉でジャスティスの笑顔が、ほんの少しだけ翳った。脅えを隠す、痛ましい微。
「仕方ねエさ、みんな不安なンだ」
レイズはぶっきらぼうに言い放った。
「みんなお前の事、知りたがってるぜ。 どうしてなのか......ってな。 俺だって......
知りてエよ......」
「レイズ・・・・・・」
ジャスティスは、スプーンを皿に置く。
少年兵は、思い切って言葉を続けた。
じゅしゅうもん
「お前......何があった? なんで邪宗紋が出る? それぐらい聞かせてくれてもいいだ」
ジャスティスは、翳りを振り払おうとした。
きじょう
لـذي
気丈に笑顔を取り戻し、 つぶやくように話し始める。
「僕にも......なぜかは分からないんだ・・・・・・」
「........」
クルセイダー
「聖戦官だった父さんが、ある日...部下を引き連れて南極に向かったんだ。
目的は言わなかったけどね。僕は邪神退治に行ったと信じてる」
じゃしん
おやじ
「その親父は...」
「うん、二年経った今も...帰って来ない」
自分のつま先を見つめながら、言った。
クルセイダー
「邪神退治に行って死んでしまったなら......それは仕方ないことだよ。 聖戦官だもの」
「そうじゃなかったのかよ?」
うなずいて、金髪の少年は息を吐いた。
とつぜん れんらく
とだ
「父さんがいなくなってすぐ南極近くの十二の都市から突然連絡が途絶えたんだ。
フロンティア・クルセイ シーズ
新大陸十字軍が急行すると、百二十万の市民がいなくなってた。 消えてたんだよ」
だがレイズは唾を呑み、考えを巡らせた。
めぐ
「その話なら聞いた事あるけど・・・・・・それがお前の親父とどういう関係が......」
「住民はいなかったけど十二の都市の城門にはいずれも······
聖騎士や聖戦官の切断された首が晒されてたんだ・・・・・・」
さら
びしょう
ジャスティスは、また微笑する。
「みんな......父さんの部下だったんだ」
「..............!」
絶句するレイズの前に、 ジャスティスは両手を差し出した。
こう
「聖教会は事実を隠してるけどね。 それ以来、僕の手の甲にも・・・・・・
邪宗紋が出るようになったんだ。召喚限度の三回、奇跡を呼ぶと····
昨日みたいなことになるんだ」

しだい
レイズは言葉を失った。
話が大きすぎ、唖然とするだけだ。
かわ
しょうかん
サウンド
あぜん
クルセイダー
けつめいしゃ
今一度、傍らのジャスティスを見つめる。
そらおそ
何か空恐ろしい存在に思えてきた。
「お前. . . . . . いったい何者なんだよ. . . . . . 」
「僕にも分からないよ。 でも僕は・・ ・聖戦官さ。 絶対に血盟者じゃない」
次第に力を込めて、ジャスティスは言った。
きょうこういいんかい
「十二教皇委員会の何人かは、父さんが血盟者に墜ちたと思ってる。 僕はその. . . 生け贄
だと言う人もいた。けど、僕はそんなの信じてないんだ」
「. . . . . 」
サウンド
「僕は奇跡を召喚できる。 創世神様は僕をまだ ・認めてくれてるんだ。
だから. . . . . 僕は聖戦官なんだよ」
クルセイダー
えがお もど
こぶし
にぎ
今度はいつもの笑顔に戻り、 ジャスティスは小さな拳を握りしめた。
うたが
「僕は. . . . . . この二年間ずっと疑われてきた。もう慣れてるよ。
けど、いつかその疑いを晴らしたい. . . . . . 僕と父さんの疑いをね. . . . . . 」
「晴らせると
思ってるのか?」
くったく
「うん、もちろん」
ジャスティスは、屈託無く言ってのけた。
「僕、父さんを信じてるから」
おやじ
「いい親父だったのかよ?」
「そうだね. . . . . . 僕は尊敬してたよ」
こし
しる
笑って、腰からすり切れた手帳を取り出した。 表には〈アイゼンの書〉と記されてい る。
てわた
じゃしん
ほうだい
「父さんは旅立つ前、これを僕に手渡したんだ・・・それまでに戦った邪神や血盟者の膨大
な記録だよ」
[. . . . .]
ご

「きっと父さんは死を覚悟してたから......これを僕に託したんだと思う。でもたとえ死んでいたとしても・・・・・・疑いだけは僕が晴らさなくちゃね。
まあちょっと今はザクセンに戻って来ちゃったんだけど」
じちょう
ほほえ
自嘲を込めて微笑んだ。
だがレイズには笑えなかった。
ジャスティスの気持ちを。
ジャスティスの行動を
「なんで戻って来たんだよ、 ザクセンに?」
憤った声で、レイズは問うた。
「お前にとって......親父を捜す大事な旅じゃねェか? 自分の疑いを晴らすンだろ? それをなんで‥‥‥ わざわざ戻ってきたンだよ?」
真っ直ぐにジャスティスを見つめた。
「お前、遠回りしてるじゃねエか?」
「うん、ライオットにも言われたよ」
クルセイダー ほか
ほうぜん
だれ
「聖戦官は他にもいる。誰かに任せればいいだろうが?」
「うん、それも言われた。 けどね・・・・・・」
聖戦官の少年も頭を掻き、照れ笑いを浮かべてみせた。
「・・・・・・見捨ててはおけなかったンだよ」
呆然とする答えだった。
ひど
とうとつ
それだけの理由で大事な旅を・・・・・・
やつ
「・・・・・・バカな奴だよ、お前は」
呆れた声で、言い切った。
「お前、本当に‥‥‥バカだよ。本当に本当のバカだ・・・・・・ 果てしないくらいの大バカだ」
「酷いなあ、それ・・・・・・」
少しむくれたジャスティスに、 少年兵は思い切って口を開きかけた。
おれ
「......けど......俺さ・・・・・・」
「レイズ、時間だぞ!」
しゃくしじょうぎ
唐突に、杓子定規な看守の声が響く。
「面会はそこまでだ、持ち場に戻りな!」
二人の少年は視線を合わせた。
先にレイズが、力強くうなずく。
「また来る......」
「レイズっ......!」
「俺・・・・・・信じてるからなッ!」
ジャスティスに短く叫び、 レイズは通路へ駆けだした。
まったん
よみがえ
四肢の末端まで、気力が蘇っていた。
まちが
初めて感じる、思いであった。

「間違いないの?」
駆け込んできたロエルは口早に問うた。
せま
ヘッドホンを外した通信士官も、力強くうなずいてみせる。
びじゃく
かんかく
「間違いありません! 電波は微弱ですが、 一定間隔で同じ通信を繰り返してます!」
ぜいじゃく
かたむ
いつせい
ロエルもヘッドホンを耳に当て、脆弱な通信に耳を傾ける。 通信士官たちも一斉に彼女の表情に注目した。
「ロエル、本当に...............!」
おく
狭い通信室には、遅れてライオットとハヤテも飛び込んできた。
はじ
とたん
その二人にうなずき、ロエルはスピーカーのスイッチを指で弾いた。途端に、外部からの通信が室内に流れ出す。
『ワイマール、 応答せよ・・・・・・』
.....
『ワイマール、 応答せよ......』
きょうこうれんたい
『こちらは第三教皇連隊......』
「繰り返す、こちらは第三教皇連隊・・・・・・』
きょうこく
じゃしんぐん たい
『現在フルダ峡谷にて邪神群と対峙・・・・・・』
ちゅう
えんぐん
いまさら
『ワイマール解囲作戦を継続中・・・・・・』
『繰り返す、 解囲作戦を......』
しゃだん
雑音が音声を遮断する。
てのひら こぶし
ロエルは自分の掌に拳をぶつけた。
フロンティア・クルセイダーズ
「援軍が来たわ! 新大陸十字軍よ!」
かんせい
通信士官たちが歓声を上げる。
むなもと
だが共に喜ぶ前に、ロエルは胸元から急いで地図を取り出した。
りんせつ
「フルダ峡谷は、隣接する衛星都レマーゼンへ続く道です。東へおよそ......十六キロ」
「正確な発信点は特定できたのか?」
「いいえ、 まだです」
ハヤテの問いに、通信士官が答えた。
ほうじゅ
おそ
「通信管制を解けば可能ですが・・・・・・その場合、傍受される恐れもありますので」

「今更、傍受が何よ?」
たく
鼻で笑って、ライオットは通信卓に手を伸ばした。
パネルの一部を開け、引きずり出したコードを自分のうなじに差し込む。
汎用接続プラグである。
はんよう
「発信源は、三分で特定できるわ。 その間に...・・・」
じょうきょう
「分かりました、バウザーたち大隊長を集めます。 状況を知らせないと」
おおわ
もど
ロエルがうなずくと、通信士官たちが大慌てで自分の卓に駆け戻る。その活気づいた動きに、ハヤテも青ざめた顔を微笑ませた。
ほほえ
れんらく
「交信が可能なら... ロエル、教皇連隊への連絡をお願いする。
ワイマールの代表者はあなただからな」
かくにん
せんがいき
せいしゅく
「ええ......もう、いいんですね?」
確認するように、ハヤテを見た。
まん
「もうこれ以上・・・・・・みんなに我慢を強いなくてもいいんですね? もうすぐ・・・・この籠城も終わるんですね?」
ほうちょうせき)
「それを話し合うんでしょ!」
にぎ
こぶし
戦鎧鬼は、握った拳から親指を突き出した。
いそが
「ワイマール解囲作戦が始まるわよ。忙しくなる......ってみんなに伝えて」
よみがえ
ライオットの声にも少しだけ、覇気が蘇りつつあった。

「静粛に!」
だんじょう さけ
ロエルは、地下評議場の壇上で叫んだ。
傍聴席には義勇軍の主立った士官が並び、ざわめき続けている。
じんち
彼ら士官の周囲には、陣地勤務を解かれ、休息するはずの兵士たちまで集まっていた。
ろうじょう
いつかつ
おさ
そしてそれ以上に大勢の市民が、通路や壁際にあふれている。高まった期待を抑えるのは難しく、ざわめきは一向に消えようとはしなかった。
きゆうえん ぶたい
きょうこく
「現在、救援部隊はフルダ峡谷に達しています。 その数、およそ二万七千!」
ロエルの声に、ざわめきがどよめきに変わった。だが構わずに続ける。
だいきんきょうこうれんたい

ブエル
「第三教皇連隊三千を基幹とし、
我がレーベンブルグの二個機動師団が支援に当たっています。いずれも我が国の中央都レーベンブルグから進撃、明日にもワイマールへ達する見 込みです!」
しんげき
かか
背後に掲げられた地図を指し示す。
ぜつきょう
同時に市民たちが歓喜の絶叫を上げた。
「来るんだ! 援軍が来るんだ!」
「明日で籠城も終わるぞ!」
あんど
無数の喜びがあちこちで交わされ、安堵の息が評議場に広がった。
たた
だがロエルは振り返り、歓声に厳しい声を叩きつけた。
ていこう そうぐう
「しかし救援部隊は、強力な抵抗に遭遇して進撃を停止しています!」
こぶし
今度は地図を拳で叩く。
一喝は、一同を静粛に変えた。
けつめいしゃ
あやつ
じゃしん
「邪神侯ンガイ・ヴェール
・血盟者ボグダノフを操る、この戦いの最高位の邪神です。何十体もの邪神伯、
邪神騎を産み出し、防衛戦を張っているそうです。
精鋭の教皇連隊が相手でも、苦戦は致し方ありません」
イフリート
いえい
じゅうし
えんだん
しかし、と銃士の少女は演壇を叩いた。
ほういもう
「座して助けを待つ訳にもいきません。 第三教皇連隊も、
ワイマール義勇軍が包囲網の中から反撃することを要請しています!」
ようせい
声を漏らし、苦渋を噛んだ。
せんばー
もつ
とつばこう
おそ
「明朝、選抜部隊を以て突破口を開き、フルダ峡谷の邪神群を背後から襲います!
生きて帰ることはまず不可能でしょう。従って強制はしません! 志願者のみ、申し出てください!」
「自分が行きます!」
「俺も行かせてくれ!」
無数の拳が、力強く天に掲げられる。
またた
議場は、瞬く間に挙手で埋め尽くされた。
「みなの気持ちはありがたい。だが全員行かせることはできん。 ワイマールに残ってもらう者にも任務はある」

つえ
ハヤテがカタナを杖に演壇に昇った。
興奮が続く議場を鎮めるように言う。
のほ
おそ
えんぐん とうちゃく
「恐らく血盟者も、援軍が到着する前に最後の攻撃に出るだろう。その攻撃を確実に待ち伏せ、粉砕せねばならぬ。 よって............」
ふんさい
軍師は、地下層の地図を指し示した。
「守備隊には、鉱山一点の防衛に当たってもらう。余所を守る余裕はない・
・明朝、全市民も鉱山に移ってもらうぞ」
[............]
ロエルは、心配そうにハヤテを見つめた。
こうどう かか
せつ
確かに、無数の坑道を抱える鉱山施設なら、 一万二千の市民を収容できるだろう。
ひび
だがハヤテは静かに、声音を響かせた。
77
だがワイマールの最深部ゆえに、逃げ場が無い。危険な策であった。
むか
「敵も必死のはずだ......」
かんせい いまし
歓声を戒めるように声を絞る。
しょ
「明日は必ず鉱山に攻めて来る我々は義勇軍の総力を以て迎え撃つしかない...............その時こそ勝利の時だ!」
えんだん
ロエルも力強く、演壇を叩く。
たた
「あと一日で全てが決します! 準備にかかってください、以上!」
とき
おお、と議場が鬨の声でわなないた。
とつかんてき
突貫的に防衛工事が進められた。
およ
かか
れんらくろ
十二層に及ぶワイマールの地下層は、その最深部に鉱山を抱えている。 鉱山への連絡路は無数に存在したが、ハヤテはそのことごとくを封鎖し、ゲートを三か所に絞った。
ふうき
せんとう
ふじん
がれき
そのゲートを見晴らす場所に、義勇軍全軍、四個戦闘大隊が布陣している。
瓦礫を利用した陣地も構築された。
ジャスティスが描いた聖防陣を床や壁ごと切り取り、鉱山の周囲 にも配置している。
サンクチュアリ
ゆか かべ
しんにゅうけい

全て、侵入経路を限定するためだ。
じゃしん
きしゅう
どこから来るか分からぬ邪神に、今度も奇襲をされてはたまらない。 おびき寄せ、待ち
伏せする準備が着々と進められた。
「理由を聞かせてください」
振り向きざまにロエルは問うた。
「どうして行ってはいけないんですか?」
「分かっていると思うのだが......」
かんとく
工事を監督した後、冷たい通路に歩み出し、 ハヤテはため息混じりにつぶやいた。
しきかん
とつば
「あなたは義勇軍の総指揮官だ。 突破部隊に入れる訳にはいかん」
「どうしてですか?」
おもむ
並進するロエルは、白い息を吐いて問うた。
「守備隊に残ろうが、突破部隊に参加しようが死ぬ時は死ぬはずです。 だったら私は、よ
り危険な方を志願します......!」
どの
「ロエル殿・・・・・・」
見つめ合い、決断をゆっくり声に変えた。
「今まで私は指揮官として......多くの人を死地に追いやりました。最後は私自身が、
死地に赴くべきです」
「あなたは、ずっと死地にいたのだ。
それはみなも分かっているだろう......それに今後の事もある。勝利の暁には、あなたは復興
にも携わるべきだ」
あかつき
たすき
てつとびら
ハヤテはゆっくり、重い鉄扉を押し開けた。
動燃区の中央部にたどりつく。
「みなもそれは分かっていると思うがな」
せんぱつ
だんやくこ
それは第一弾薬庫の扉であった。
コンテナの列の前では、すでに突破部隊に選抜された兵が群れ集っている。
各自が武器の点検、弾薬の受け渡しに余念がない。
だんやく
わた
みと
だが二人の姿を認めると......
「ロエルさん! ハヤテ様!」
びしょう
数十人の義勇兵たちが集まってきた。みな一様に微笑を浮かべ、二人に敬礼する。
「みんな......」
きゅうえん ぶたい
あくしゅ
「明日の決戦、任せといてください!」
まだ子供のような兵士が元気に言う。
ほう いもう

「たとえ最後の一兵になろうと、包囲網は突破してみせますよ」
「救援部隊は必ず連れてきます!」
たの
「これでお別れになるでしょうが、後の事を... ワイマールを頼みますよ」
こんわく
握手を交わし、ロエルは困惑した。
「その事だけど......私、 明日は......」
「残ってくれるんだろうねぇ」
初老の義勇兵が、声をかけた。
だれ
「わしらは勝つつもりさ。けど......もし負けたら、誰かが戦争を続けなきゃならん」
「それができるのはロエルさんだけだよ」
わか
ひどく若い兵士も顔をほころばせる。
「戦って死ぬのは簡単だけどさ。 生きて街を再建する方が苦労も多い......」
「それをあんたにやってもらいたいんだ」
また別の兵士も声を上げた。
だれ
「ムシの良い話だけどね・・・・・・」
ロエルは声を詰まらせた。
ひそうかん
誰の目にも悲壮感は無い。
みな、勝利と再生を信じきっている。
そしてふと視線を向けると......
そこにライオットが立っていた。
たい
だんそう
くびかぎ
てりゅう
背中に二本の大剣を背負い、腰にはずらりと弾倉をぶら下げている。首飾りの如く手弾の列を下げ、
傍らには大型対戦車ロケット砲まで並べていた。
だん
かわ
ほう
「ライオットさん・・・・・・」
言って、 ロエルは歩み寄ろうとした。
びしょう
だがライオットもみな同様に微笑する。
あきら
「そういう事よ、諦めな」
おだ
ハヤテも穏やかな目でロエルを見つめた。
「本当······みんな、ずるいわ......」
からだ
ロエルの身体から、力みが消えていた。
そして新たな試練の重みを噛みしめる。 受け入れるしかない、試練であった。
「分かりました、お願いします..............」
くちびる
ロエルは、唇を引き結んで決断した。
せんぱつ
ほういもう

きょうこく
「ライオットさんには、選抜部隊の指揮をお願いします。
無事に包囲網を突破したら、フルダ峡谷へ急行してください。そして救援部隊をここに連れてきてください......」
きゅうえんぶたい
「分かったわ、 それで......」
「えっ!」
だれ
「いや、早合点してもらっては困る」
まゆね
急に二人を制し、ハヤテは眉根を寄せた。
「ライオットは突破部隊参加でかまわんが・・・・・・指揮は別の者に執らせるつもりだ」
いまさら
「ちょっとハヤテ、何を今更............」
せんとう
「まあ、聞け。戦闘に強い者と戦闘がうまい者は違う。ライオットの戦闘能力に疑問は無いが、部隊指揮となると別だ。もっと場数を踏んだ経験者がいいだろう」
くも
軍師の言に、ライオットは表情を曇らせた。
「誰の指揮下に入るのよ。 まさかあんたが直接指揮執るんじゃないでしょうね?」
そうぼう
「私は突破部隊と守備隊、双方に指示を送らねばならない。悪いがワイマールに残る」
「とすると......」
めぐ
ロエルが思いを巡らせた途端・・
とたん
てつとびら
入り口の鉄扉が再び開いた。
かつ
きょたい
さけくさ
えん
対戦車ライフルを担いだ巨体は、酒臭い息と紫煙を撒いて、 一同の元へ歩み寄った。
「バウザー、 あんた......!」
「俺じゃご不満かよ、ライオット?」
おもしろ
ようへい
さも面白そうに、傭兵は笑いたてた。
「突破部隊は俺とお前で十分だろう。戦争が商売なのも俺たちだけだ。 最後に俺たちが戦わなくてどうすんだよ?」
けむり
暗がりに煙の輪を吐き飛ばす。
つか
だがライオットは、疲れた息を吐いた。
「ジャスティスとあたしのこと、信じてないんでしょ。良く言うわね・ ・あんたとは組めないわ。さっさと帰んな」
にら
言い放って、バウザーを睨んだ。
そうぼう
みよう
やさ

かがや
たたず
だが傭兵の双眸は、妙に優しげな輝きに満ちている。 佇む巨人に、ハヤテも小さくうなずいた。
「ライオット、バウザーはな・・・・・・みなの不満を引き受けてくれたのだ」
「みんなの不満......?」
どの
「そうだ。 市民の中には、ジャスティスを疑う者も多かった。だがロエル殿や私が、
ジャスティスをかばえばどうなる? その者たちの疑念はどうなる?」
いまごろ
「あ............」
今頃、思い当たった。
えがお
バウザーは、不敵な笑顔のままだ。
代わって、 ハヤテが言葉を続ける。
りよ
だれ
「みな、ジャスティスには感謝していた。 しかし疑う気持ちも芽生えた。
それを我々に遠慮して押し隠せば・・・・・・いつか爆発する。 不満分子としてな......」
ぼくはつ
「じゃあバウザー、あえて......」
おどろ
ロエルも驚き、傭兵を見上げる。
めいもく
ハヤテは瞑目して、声を低めた。
「誰かが、みなの前で言わなければならなかったのだ。ジャスティスは危険だとな......そのおかげ
でジャスティスを信じぬ者も分かった。不満のガス抜きもできたしな・・・・・・」
ふーっと傭兵にため息を吐く。
「・・・・・・バウザーには、損な役回りをさせてしまったな......」
ライオットは、バウザーを見上げた。
おだ
今度は少し、視線を穏やかに変えて。
「貸しができたわね......」
えん
めんどう
いや
かた
「今頃気づいたか、俺の優しさに」
「バカ礼ぐらい言わせてよ!」
「それより、指揮官は俺でいいんだろうな?」
面倒そうに首筋を掻き、鼻を鳴らした。
「嫌だと言っても、ついていくぜ」
「好きにすれば」
そ
ライオットも嘆息し、手を差し出した。
にぎ
堅く手を握り合う。 それで終わりだった。
ようへい しせん
ハヤテは、二人の傭兵に視線を戻した。
もど
「今夜中に準備を終えてくれ。 装備は必要なだけ、持っていけばいい」
「いらんな。重火器は鉱山を守るために使えばいい。 それに負けたとしても......」

えがみ
ライオットは、平然と前髪を掻き上げる。
「そうね、死ぬだけだから」
「誰でも一度は死ぬんだしな」
しえん
バウザーも紫煙を鼻から噴いた。
意気投合した以上、二人に迷いは無い。
サムライもロエルとうなずき合い、 怜悧な視線を光らせた。
「我々は鉱山にて迎え撃つつけようではないか、全ての決着を...............」
声にも満身の力が込められていた。
深夜を過ぎてなお......
だんやくこ
第一弾薬庫の照明は消えてはいなかった。
節電統制のため、ほの明るく庫内が照らし出されている。
けんしょう
ふたごけん
うずたかく積まれた弾薬箱に背をもたれさせ、ライオットは剣匠ザウエルの双子剣を丁
寧に研ぎ続けていた。
やいば
「しかしあんたも案外粋なのね...」
はな
刃から目を離さずに言葉をかける。
「最後の数時間は自由にしろなんて......」
「悔いを残して死なれたくねえからな」
バウザーは、寝そべったまま酒をすする。
「あいつら義勇兵は、ここまでよく戦ってきたぜ。
親でも恋人でも、好きな奴と一晩過ごすくらい許してやるさ」
こいびと
やみ
だれ
じゅう みが
見れば、周囲の闇にはわずかな兵士がいるだけだ。誰もが眠れず、しきりと銃を磨いたり、賭けカー
ドに興じたりしている。
うかが
バウザーの計らいで、ほとんどの義勇兵は最後の夜を楽しみに出かけていた。
ごらく
と言っても、娯楽がある訳ではない。
みな、誰かの元へ帰っていっただけだろう。
「前から訊こうと思ってたけど...」
ふと、ライオットは手を休めた。
ぐうぜん
ようへい
「あんたは元々・・・・・・偶然ワイマールに居合わせただけの傭兵でしょ。 ここまでして戦って
きた理由って何なの?」
「くだらねぇ事、 訊くなよ」
バウザーは、苦い顔で口元を歪めた。
ゆが
「ここは戦場だぜ。気が向いたから、首を突っ込んだだけだ。それだけだよ」
「ま、確かに首突っ込みたくなる戦争よね」
ライオットは、義勇兵たちに目を向けた。 若い顔もあれば、老いた顔もある。
「一人でも多く生きて帰したいわ......」

おもしろ
「まあな......けど、おかげでいろいろ面白い目に遭ったぜ」
せんがいき
パウザーは、戦鎧鬼を指さして言った。
「だいたい、こんな所でお前みたいな有名人に会えるとは思わなかったぜ。ご高名はかねがね伺ってたからな」
「どうせろくでもないご高名でしょ?」
じゃしん
おそ
「そうでもないぜ。 二年前、
アレトン市が邪神に襲われて壊滅寸前になったろう。俺もあそこで一緒に戦ってたんだぜ」
いつしょ
いだてん
「じゃあ、エイブラムズの傭兵部隊に居たってわけ? あの韋駄天エイブラムズの?」
しの
往事を偲び、ライオットは感心する。
たよ
「あの戦いで生き残ったんなら、頼りにするわよ。 真っ先に斬り込んでもらうわ」
じょうだん
ちが
きよじやく
「おいおい、冗談言うなよ。俺はお前と違って、虚弱体質なんだぜ」
「大酒呑みで虚弱体質なんて聞いた事無いわよ!」
せんじん
「いやいや、お前と違って邪神と戦ったらイチコロだよ。先陣はお前に譲る」
「あんたねえ... 明日は本気出してよ? 死ぬ気で戦うのよ、いいわね!」
「そう言って、俺が本当に死んだら泣くんだろう? よくあるパターンだ。
死ぬ間際に気づく愛って奴だな」
やつ
まざわ
バウザーはカップを掲げ、一気に飲み干した。ライオットは呆れて、ため息を吐く。
はいご
その二人の背後に・・・・
「な、何よ、あんたたち......」
ふしん
ライオットは、不審な目で一同を見た。
とつば
ではら
いつの間にか、突破部隊の兵士たちが集まっている。出払ったはずの者まで、数十人が二人を取り巻いていた。
ねむ
「明日は早いわよ、少しでも眠っときな」
「さすがに眠れませんよ」
若い兵士がライオットに言う。
「みんなそうです。 帰る家族ももういない者ばかりだし......」
いつしょ
「今夜は、隊長たちと一緒に居たいんです」
そろ
しょくりょう
そう口を揃えると勝手に座を組み、めいめい残り少ない食糧を辺りに並べた。
「バウザー隊長、配給部に残ってた最後の一本です。 みんなでやりましょう」

ぴん
差し出されたのは、名高いローマナコニャックの黒い瓶である。
それを受け取ると、バウザーは一同に呆れ返った。
こいびと
「やだねえ、もてない奴らは帰る恋人もいねえのかよ。しかも俺とライオットのロマンチックな最後の夜を邪魔しやがって。だから、もてねえのさ」
じゃま
笑いが湧き起こった。
だんやくこ
酒も兵たちのカップに注がれていく。
微笑んで、ライオットも決戦前夜を楽しむ事に決めた。

第一弾薬庫の中から、談笑する声が伝わってくる。
それを何か羨ましく思い......
レイズは背を向けて行政区へ歩き出した。
(俺だって行きたい······けど·····..)
つまらなそうに床を蹴る。
レイズの分隊は、本部中隊所属であった。場数は踏んでいるが、みな年が若すぎる。
他の隊に組み込んで、指揮官にするにも不都合なためであった。
ゆえに明日は、守備隊を命ぜられた。
(ロエルたちとお留守番かよ......)
それが不満なのではない。
ただ、レイズも死地を望んでいた。
かこく
じごく
より過酷で、より地獄に近い死地を。
(それが俺にできる......)
のほ
から
せん
思いを絡ませ、視線を上げた。
長い昇りスロープの先には、もう行政区が見えている。
その通路も、今は照明が半ば点灯されていた。
決戦を前に、各部署も準備に駆け回っているのだ。
ぶしょ
か
こうどう
「そうよ、通信機材も坑道に運んで!」
ひび
ロエルの声が通路に響いていた。
ひそう
「予備に切り替えたから、電源落としてもいいわ。
向こうで通信部が待ってるから......そう、F6坑道に重傷者を移送、よろしく!」
けいたい
周囲に指示を下し、携帯通話器に命を送る。 この一か月、ずっと見慣れた光景だった。
だが今夜はロエルの顔つきも違う。
とうし
悲壮さはなく、闘志が剥き出されていた。
ふんいき
近づきがたい雰囲気すらある。
「そうだ、 それで三個大隊編制とする」

せんとう
一方からは冷静な声が聞こえてきた。
とつば
「第四戦闘大隊を解隊し、他の大隊に組み入れる。
各大隊は突破部隊に人員を割かれたし、いずれも消耗が激しい。減編すれば定数に近くなるはずだ」
しょうもう
歩きながら士官に説明するハヤテも、いつもより歩速が速い。
杖代わりのカタナを、忙しく働かせている。 それだけ、気力が張っている証であった。
みなぎ
あかし
からだ
(俺は少しでも身体を休めるか......)
眠れないだろうが、 レイズはそう決めた。
(明日が俺の出番だからな......)
今夜、ロエルたちと語り合うのも、なぜかためらわれる。
いそが
それは全てが終わってからでいい。
けんそう
思って、喧噪に背を向けた時であった。
「お、おい...... レイズっ!」
「ああ......?」
振り向けば、そこに見知った顔があった。
数日前につかみ合った、あの配給官である。
かた
なぜか息を切らし、肩を上下させていた。
「な、なんだよ、こんなとこで・・・・・・」
「良かった・・・・・これ、明日の朝飯だ」
こんぼう
言うと、小さな梱包を差し出した。
意外に重いそれに、レイズは首をかしげた。
「配給なら、もうもらってるぜ。 計算違いだ」
「いや、お前は... 一食足りてないんだ。 この前の分がな......」
口ごもって、頭を下げる。
「すまん、あれはやっぱりこっちの間違いだった。悪かった!」
「なんだよ、じゃあこれ...............」
さが
「ああ、渡そうと思って探してたんだ。
お前の仲間には、さっき渡したんだが・・・・・お前はいなかったんでな......」
おおあせ
よく見れば、額に大汗をかいている。
こんせき
しょくりょう
にぎ
必死に走り回った痕跡に、レイズは思わず食糧の包みを握りしめた。
「すまねエ.....俺もこの前、やり過ぎた......」
あんど
「いや、こっちが悪いんだから......」
ほか
「けど、今夜は他にやる事もあるだろうに」
「渡さないと気が済まないんでな・・・・・」

ほえ
安堵して、配給官はレイズに微笑んだ。
「明日もがんばってくれ、期待してるよ」
「ああ、悪いな・・・・・・」
駆け去る配給官にそれだけ言う。
レイズは、今一度梱包の重みを確かめた。
（俺、明日......明日は......）
決意を胸に、包みをかき抱く。
朝食はまだ、温かいままであった。

【第五章 ワイマール/決戦】

長く伸びたハンドルを握りしめる。
ほうこう
ひび
ごうおん
スロットルを入れるとマフラーが咆哮し、地響きのような轟音が倉庫にこだました。
「さあて行こうか、ライオット」
バウザーは顔にゴーグルをはめると、 ヤニだらけの黄色い歯を見せつけた。
たま
とつば
のぼ
きょうこく
「フルダ峡谷までのおデートだ。弾がなくなるまで、やりまくろうぜ」
「あんたの言い方は下品なのよ!」
こうとうしき
臨時の相棒を無視して、 ライオットは喉頭式マイクに怒鳴った。
そうこう
「ハヤテ、装甲シャッターを開けて! ゲートを出るわ! 後のことはよろしく!」
『分かった、任せておけ......』
ヘッドホンに常と変わらぬ声が響いた。
ごかり
『・・・・・・創世神の御加護を!』
「突破部隊、出るわよっ!」
とたん
ようへい
かたまり
しゃろ
言った途端、二人の傭兵を乗せた鋼鉄の塊は、格納庫を飛び出した。
長い斜路を真っ直ぐ昇り、開いたゲートから猛速度で疾走する。
がくん、と着地しバウンドする。
もうそくど
しつそう
左右に積雪を蹴散らし、サイドカー付きの黒い雪上バイクは、 ワイマールの中央通りに
勇姿を現していた。
そうじゅう
バイクと言っても前輪はスキー、後輪は左右にキャタピラが並んだ三輪式である。 操縦る。
あしもと
ほう
するバウザーの足下からは、二〇ミリ自動砲の砲身が二門、前方に突き出していた。
じゅうきかんじゅう

一方、ライオットが座るサイドカー部分にも、十二七ミリ重機関銃が据えられてい車体はもちろん、
操縦席まで重装甲で覆った武装雪上バイクであった。
おお
続いて、三十台ほどの装甲兵員輸送車が追随する。 全天候型のキャタピラ車は速度こそ
遅いが、雪上バイクの後に続いた。
ほうとう
まんさい
上面砲塔の三〇ミリ自動砲を側方に向け、 義勇兵を満載した輸送車群も雪を蹴散らし、
突破を開始する。
がれき ふうさ
「その先、右に折れて! 正面は瓦礫で封鎖されてるわ!」
エンジンの轟音に負けぬよう、ライオットはマイクに怒鳴りつけた。
「モルトケ橋を渡ったら、一気に外縁まで抜けるわよ! いいわね!」
『ワイマール・アルファ、了解!」
りょうかい
『ワイマール・ブラボー、ついて行きます」
『ワイマール・チャーリー、任せとけ!』
だんがん
各中隊から力強い応答が耳に入る。
煙を容赦なく上げ、燃え尽きた市内を横断していく。突風に逆らって進むその姿は、黒い弾丸にも見
えていた。

ばか
〈血迷ったか、馬鹿どもめが‥‥‥〉
あんこく
こうしょう ひび
闇黒からワイマールを見下ろし、ボグダノフは哄笑を響かせた。
〈たったあれだけで我が主ンガイ・ヴェール様の元へ向かうつもりとは・・・・・・〉
しつそう
しせつ
けつめいしや
雪上を疾走する一群を、 血盟者は高らかにせせら笑う。
そして闇黒の中、視線を動かした。
ワイマールの地下層では、慌ただしく人波が流れている。
義勇兵も市民も、みな中枢たる鉱山施設に集まっていった。
「急ぐな! ゆっくりでいい!」
指示するハヤテの姿も目に入る。
こうどう
ゆうどう
軍師は、人々を長い坑道へと誘導していた。
だいじょうぶ
ひなん
「大丈夫だ! みな、安心して避難しろ!」
〈くくくくくっつ......〉
こら
ボグダノフは笑いを堪えきれなかった。
サンクチュアリ
せんがいき
〈聖防陣に囲まれた鉱山に入り、身を守ったつもりか... 浅はかな......〉
〈坑道の中では逃げられまい‥‥‥それゆえ、 今までその策を取らなかったはず......〉
きゅう

〈いよいよ窮したと言うことだな......〉
こぶし にぎ
そして、ぬめついた拳を握りしめた。
てうす
だがこれで鉱山施設も手薄となった・・・・・・〉
クルセイダー
はだか
〈戦鎧鬼も聖戦官もおらぬのでは裸同然よ〉
だが......
癒えた傷口をさすり、勝利を確信する。
きょうこく
〈ボグダノフよ......それはならぬな〉
とつぱ
〈あの突破部隊もくい止めよ フルダ峡谷へ行かせてはならぬ〉
ゆが
ひとかげ
闇黒に歪んだ人影が再来する。
どせい たた
再度現れた思念に、 ボグダノフは怒声を叩きつけた。
ほう
〈なにゆえです! 放っておけばいい!〉
〈奴らごとき、我が主の敵ではない! お分かりのはずだ!〉
だが思念は、大きく否を示した。
〈奴らだけならかまわぬ・・・・・・〉
りつぜん
〈だがンガイ・ヴェールも殊の外・・・・・・ 窮しているようだぞ〉
けつめいしゃ
慄然として、血盟者は視線を新たにした。
あんこく
雪深い峡谷が闇黒に映し出される。
せいき
吹きすさぶ猛吹雪をものともせず、無数の聖騎士たちが整然と進撃を続けていた。
しろがね かつちゆう
しる
その白銀の甲冑には、いずれも黒い十字が記されている。 たなびく戦旗も黒。
ザクセン地方を統轄する黒の教皇、その直轄部隊を表すものであった。
とうかつ
きょうこう
〈第三教皇連隊・・・・・・〉
だげき
〈ザクセン地方最強の機動打撃戦力だ・・・・・・〉
冷静に思念が告げる。
じゃしんぐん
げきとつ
と同時に、聖騎士たちと邪神群が激突した。
対邪神戦専門の騎士団に臆するところはない。ひたすらに剣を振るい、槍を突き、邪神を蹴散らしていった。
けん
はいご
クルセイダー
ふずい

デイフエンス・サウンド じんけい
その背後には、何人もの聖戦官が付随していた。防御用奇跡で陣形を守り、進撃をしている。ひたむきな攻撃であった。
こうげき
《エグ‥‥‥ンガイ・ヴェール・・・・・・》
《エグ・・・・・レグ・・・・・・ンガイ・ヴェール・・・・・・》
うめ
ボグダノフは、主人の呻きを聞いた。
おとろ
その力は衰え、 思念にも覇気がない。
じょうきょう
戦慄して当然の状況であった。
そんざい
しょうめつ
ンガイ・ヴェールが死ねば、血盟者の力も失せる。 存在そのものが消滅するのだ。
〈な、ならば私はどうすれば...〉
とつば
はかい
ルシフエル
ルシフェル
ごと
〈簡単だ。突破部隊を食い止め・・・・・鉱山も破壊せよ......〉
思念は、歯噛みするボグダノフに告げた。
ちょくめい
〈元々、ンガイ・ヴェールに告げられた勅命は、鉱山施設の破壊のはず......〉
やつ
〈たとえ奴が消滅したとしても、貴様が勅命を成し遂げたならば・・・・・・〉
〈邪神帝様も、お許しくだされよう・・・・・・〉
ボグダノフは、絶望しかけた顔を上げた。
えいよ
まれ
邪神帝の勅命を成し遂げる・・・・・・その栄誉を受けた血盟者は希だ。 それだけに・・・・・・野心が野火の如く燃え広がった。
なにとぞ
〈承知しました・・・・・・ですが何卒・・・・・・〉
〈うむ力は貸そう......〉
ノイズ
ひび
思念は悪辣な笑みを響かせ、 ボグダノフを見下ろした。
〈我が魔導を貴様に付帯させよう・・さすれば必ず......あの街は滅するはずだ・・・・・・〉
しゅんかん あんこく ばくこう さくほっ瞬間、闇黒に爆光が炸裂する。
けつめいしや きおく
血盟者の記憶も同時に、光の渦の中に消え失せていった。
わた
ちゅうすう
きょだい えんとうじょう くうどう
鉱山の中枢は、巨大な円筒状の空洞である。
直径およそ百メートル、高さ三百メートルに亘って、厚い岩盤がくり抜かれている。
がんばん
へきめん
こうどう

うが
ひなん
その中央部の壁面から、無数の坑道が穿たれていた。その暗い穴に、避難の列が続いている。見上げ
　　　れば、壮観この上ない絶景だ。
そうかん
だがその鉱山が......
「やはり来たか............!」
察して、ハヤテが歯噛みする。
あえ
こわね
地底から喘ぐような声音が鳴り響く。
巨大な石造門は、左右に開放されたままだ。
いしだたみ
そのゲートの向こうで、石畳の床が白く発光し始める。
　　　床には、円形に古代神聖文字が配列されていた。
　　　邪神と魔導を退ける、ジャスティスの聖防陣であった。
「第二、第三大隊、射撃準備!」
さけ
通話器に叫び、左右に兵を敷き詰める。
じゃしん
サンクチュアリ
しゃげき
そうてん
ロエルも中央の第一大隊に向き直った。
「私が直接指揮を執る! 全隊、応戦準備! 重火器、各個に装填を!」
じゅうこう
かかん
坑道へ逃げ込む市民と入れ違い、義勇兵たちの銃口が果敢に前進する。 老人、子供、
　　　すでに片腕を無くしている者。 疲弊し、消耗しきった最後の義勇兵たちである。
かたうで
しょうもう
その第一大隊の先頭で・・・・・・
「リムロ、もう行け!」
レイズは小さな頭を撫でてやった。
めいわく
「みんなに迷惑かけんなよ。 おとなしくな」
「リムロ、分かってるもん」
ぷうっとふくれ、少女はレイズを見上げた。
「レイズ兄ちゃんもがんばってね」
「ああ、分かってる。 早く行きな!」
リムロは他の子供たちに混じり、坑道の奥へと避難していった。
そしてレイズは、仲間たちを振り返る。
ようしゃ
「みんな、容赦するなよ......」
周囲には、本部中隊の兵も集まっている。
じまん そげきじゅうじゅうだん
ひび
自慢の狙撃銃に銃弾を装填し、レイズは力強い声を響かせた。
「生き残るなんて考えるな。 邪神を殺すことだけ考えろ、そうすれば俺たちが勝っ!
「それ、ちょオ大変だぜ、 兄貴」
「って言うか、文句は言うな」

おのおの
いつせい
各々が一斉に銃口を並べた。
サンクチュアリ　かがや
その眼前で、さらに聖防陣が輝きを増す。
ぜつきょう
続けて、けたたましい絶叫が湧き起こる。
《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》
ゆが
あんこく
しょくしゅ
むち
空間が奇怪に歪み、
闇黒から無数の触手が這いずり出た。数百もの生白い肉の鞭が、物を求めて蠢き回る。
うごめ
やがてずるりと、本体も実体化した。
きょだい のうず
濡れてピンク色に光る巨大な脳髄。
ねんえき
ゆか
あし
لــد ر ا
触手は、その脳髄から伸び、しきりと粘液を床にしたたらせた。脳髄の底には無数の繊毛が脚の如くざわめいている。 全長十メートルを超える巨体であった。
「なんなの、あれ......」
もよお
ぼうぜん
戦い慣れたロエルでさえ、その異様さに吐き気を催した。 義勇兵は呆然としている。
《デア・ブルグトムー》
《アデ! アデ!ブル・ザグトム!》
じゃしん
サンクチュアリ
かべ
おうだ
邪神は、無数の触手を振り上げた。 聖防陣が展開する不可視の壁を、力任せに殴打する。
獲元
「くううっっ!」
ダニウム鉱山が震えた。
ばくだい
さくれつ
あわ
莫大な聖光が炸裂し、ロエルは悲鳴を上げた。 ハヤテも兵たちも目を覆う。
サンクチュアリ
「慌てるな! 聖防陣の力だ!」
ハヤテは、視線を上げてみた。
不可視の壁の向こうでは、何十本もの触手が黒く焼け焦げ、床に転がっている。聖防陣は未だ、ばちばちとプラズマを放っていた。
サンクチュアリ　いま
《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》

おたけ
たび せんこう またた
不平そうな雄叫びを上げ、 再度触手で連打する。 その度に閃光が瞬き、鉱山の揺れも大
きくなっていった。
だがハヤテは、毅然と姿勢を正した。
「ここから後ろに土地は無い! ワイマール義勇軍、勝つぞ!」
いつせい とき
おお、と一斉に鬨が上がる。
レイズも息を呑んで、その瞬間を待った。
こうとうしき
閃光に照らされたロエルは力強く剣を抜き、喉頭式マイクに手をかけた。

「ライオットさん、来ました!』
『邪神です、 一体!』
しつそう
せんがいき
ようへ
かつち
サンクチュアリ
じんじょう
おおつぶ
疾走する雪上バイクの上で、戦鎧鬼と傭兵は視線を合致させた。
ゆる
だがバウザーは、疾走を緩めようともしない。 かまわず市外めざして、速度を上げた。
「聖防陣はどうだ?」
『まだ効果ありです! いつまでもつか分かりませんけど!』
「ボグダノフはっ......?」
「いえ、邪神のみです! そちらも......!』
ヘッドホンから、邪神の雄叫びが飛び込んできた。 通信は、雑音にかき消される。
くも
舌打ちして、ライオットは顔を曇らせた。
イフリート・クラス
「一体か・・・・・・まさかまた邪神伯級......」
「だとしても俺たちは何もできないぜ!」
どな
バウザーがやけくそ気味に怒鳴った。 「戦力を割るのは承知の策だからな!」
とつぷう
アクセルを噴かした時、突風が吹いた。
ろぼう
はいしゃ
とつげき
なな
尋常な風力ではない。
路傍の廃車が持ち上がり、瓦礫の山に突撃する。斜めに傾いた建物が、音を立てて崩れ落ちた
。
大粒の雪が真横から吹きなぐる。
同時に雪上バイクが突然、急停止した。
そうこうしゃぐん
続けて装甲車群も、次々に減速していく。
『アルファ・トゥ、機関部凍結!」
とうけつ

『ブラボー・エイト、停止します!』
各車から悲鳴に近い報告が突き刺さる。
かたうで
「くそったれ!働きが足りねえぞ!」
ののし
がくせん
だが罵ったバウザーは、愕然とした。
わずかな間に、エンジンの周囲にはみっしり霜が張り付いている。
〈放出魔導腺量五二〇......〉
じくうわいきょくかくにん
二時の方向に時空歪曲確認・・・・・・〉
もうまく
ライオットの網膜にも表示が流れる。
サイドカーから飛び降り、 ライオットは義手の安全装置を解除した。
「出てきな! ボグダノフ!」
吹雪に負けじと叫ぶ。
さけ
「片腕の仕返しに来たわ! 姿を見せな!」
ヘル・フリーゼズ・オーバー
《寒獄凍結烈波......》
声と共に、さらに吹雪が強まった。
そしてバウザーは、声を無くした。
にぎ
はな
握っていたハンドルが、手の中でぐしゃりと潰れる。
慌ててバイクから離れると、その黒い車体も次第にひび割れていった。
しだい
ノイズ
「なんて魔導を使いやがる......!」
いらついた手で、荷台の対戦車ライフルに手を伸ばす。だがその銃身も微塵に砕けた。
さと
やつ
「たぶん、奴にとって最高位の魔導・・・・・・」
はが
悟って、ライオットも歯噛みした。
きしゅう
「最初の奇襲もこの手だったんだわ.........」
〈いかにも......〉
かなた
吹雪の彼方から、 思念が拡散した。
きょうこく
〈フルダ峡谷に行かせはせん......〉
もら
〈貴様らの命はここで貰い受ける・・・・・・〉
〈そしてこの街の命数もな......〉
せんとう
ほうざ
「全隊下車戦闘に移れ! 各砲座準備!」
そうこうしゃぐん
ほういもう

バウザーが怒鳴ると、装甲車群が包囲網を造る。
ばらばらと下車した義勇兵たちは、銃を手に遮蔽物へと駆けだした。
しゃへいぶつ
か
ライオットは、背から大剣を一本抜き払った。鍵く輝くゾダニウムの刃だけは、凍結をまぬがれている。
しゅんかん
「上等じゃない! 受けて立つわ!」
ようへい ほう
言って、残った一本を傭兵に放る。
受け取ったバウザーも、すぐに刃を払った。
はくへいせん
「仕方ねぇ! 白兵戦かよ!」
かんしょく
両手に握り、重い感触を確かめた。
「まあいい! 両手両足切り刻んでやる!」
できるものならな......〉
ひび
引きつった笑いを響かせ、 実体化した。
瞬間、ライオットは我が目を疑った。
「あ、あんたやっぱり......!」
バウザーも、ごくりと唾を呑む。
義勇兵たちは、その姿に顔を引きつらせる。
りようかた
ボグダノフのシルエットは大きく歪み、もはや人間の形を成してはいない。両肩は服を突き破り、大きく盛り上がっている。 しかもひび割れた青黒い身体だ。
つめ
からだ
とげとげ
うで
しょくしゅ
刺々しい腕には、四つの大きな爪がぶら下がっている。 腹からは何本もの触手が垂れ、ふらふらと宙をさまよっている。両足など、触手が絡まっただけのものだ。全身、ぬめついた粘液で覆われている。
ねんえき
にくかい
ぜいじゃく
けつめい だいしょう
「あんた血盟の代償に、自分の身体を......」
〈血盟とはそういうものだ······〉
肉塊に埋もれた顔で、 ボグダノフは言った。
きょうじん じゃしん
〈脆弱な人間の肉体を捨て、強靭な邪神へと転生する...それこそ我が望み・・・・・・〉
しかしンガイ・ヴェール様を討たれては、 我が転生の望みも潰える......〉
〈それだけは・・・・・させぬぞ......!〉
「危ねえっ!」
バウザーが横に跳んだ。
たつまき ふんしゅつ
血盟者の口から、冷気の竜巻が噴出する。
がれき たた
積雪を吹き飛ばし、義勇兵たちが瓦礫に叩きつけられる。

「があっ!」「ひいいっ!」
だがライオットは、剣を大きく振り扱う。
やいば
おそ
ゾダニウムの刃は、襲いかかる白い魔導を真っ二つに斬り裂いてみせた。
「こっちも一万二千の命がかかってんのよ」
にぎ
ライオットは、大剣を握り直した。
「あんたはここで斬る、鉱山には行かせないよっ...　・」
せんがいき
ほうこう
戦鎧鬼の咆哮が、 白銀を揺すぶった。
かれつ
吹雪はさらに、苛烈さを増していった。

《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ!ブルザグトム!》
きょだい のうずい
きょうかん
しせつ
触手を振り回す巨大な脳髄は、叫喚を繰り返していた。 鉱山施設を守る不可視の壁」
だい
次第にたわみ、 プラズマも弱まっていく。
とつば
かくご
「もうすぐ突破されるわ! 覚悟して!」
ロエルは、周囲に警告した。
彼女のヘッドホンには、さっきから中央管制室の悲鳴が続いている。
「外気温、急速に低下しています!』
かくにん
『相当量の魔導腺を確認・・・・・・』
『第一地下層の気温、氷点下六十度!』
『同じく第一地下層、暖気システム停止!」
「ハヤテ様!」
ぜんめつ
「このままでは都市機能が全滅です! ここに送られる暖気も......!」
ひどう
くちびる
だがハヤテは、信念を微動だにしない。 カタナに手をかけたまま、唇を噛みしめた。
「今守るべきは鉱山と市民のみ･･･街なら後で再建できる・・・・・・今はこの二つ、守ることに死力を尽くすべきだ・・・・・・」
「分かりました......!」
決心して、 ロエルも剣を両手に据え直した。
『送水管、第二地下層で供給停止!』
『非常用発電装置へ移行』
しょう
『魔導の影響、第四地下層まで波及!』
(ジャスティス・・・・・・)
ごつかん
はきゅう
顔を刺す極寒の冷気に、ロエルは心配をつのらせた。

ちかろう
恐らく、地下牢への暖気も止まっている。
じょうきょう
その状況でどれだけ持つか。厳しい冬を知るロエルは、絶望を必死に振り払った。
《デア・ブルグトム!》
はら
さけ
どな
叫びに呼応して、ハヤテが怒鳴った。
サンクチュアリ
じゃしん
「来るぞ! 聖防陣が破れる!」
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》
こんしん
いちげき
たた
邪神が、渾身の一撃を入り口に叩き込んだ。
しょくしゅ
無数の触手が焼け落ち、四散する。
ぼくさい
同時に不可視の壁が爆砕した。
のうずい
石をものともせず、鉱山施設へ突入した。
ほうらく
きよ
青白いプラズマを放電させながら、石造り門が左右から崩落する。邪神は、落下する巨軍師は、義勇軍を一喝した。
しせつ とつにゆう
いつかつ
すき
じゅうせい
だんう
いつせいしやげき
じん ち
「一斉射撃開始!」
凄まじい銃声が、四方から邪神に浴びせられた。ゾダニウムの弾雨が、ぬめつく巨大な脳髄をぶち抜き、触手を吹き飛ばした。
きょうふ
義勇兵たちにも、もはや恐怖はない。
よゆう
わ
陣地での待ち伏せは、精神的余裕も生みだしている。整然と射撃を繰り返し、慌てる兵は一人もいなかった。
またた
ゆか
おそ
だが邪神の再生能力は、損害を軽く上回っている。 瞬く間に床を滑り、邪神は最前の義勇兵たちへ襲いかかった。
《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》
「ぎえええええっっ!」

りょううで
はじ
触手に弾かれた兵が、 両腕をもがれたまま床に転がる。
斬り飛ばされた首は、壁にぶち当たった。辺りが一転、血の海に転じていく。
「ふざけやがって!」
レイズは、ゾダニウム弾速射した。
にくかい
ぬめつく肉塊に、次々銃撃を叩きこむ。
とっしん
ふんさい
だが突進は止まらず、 陣地は次々粉砕されていった。
「第三大隊、後方陣地へ下がれっ!」
きょうこう
怒鳴って、 ハヤテは突進した。
「隊形を整えろ! いったん下がるのだ!」
せま
義勇兵たちは、狭い後退路に飛び込んだ。
こうげき
恐慌もなく、新たな攻撃態勢に移行する。
こいぐら
ハヤテは、後退する彼らの背中を守り、
カタナの鯉口を切った。そして邪神の眼前に滑り込み、神速、「封魔」の刃を抜き払った。
ふうま
やいば
はら
「ハヤテ様!」
さけ
軍師の突進を止めようと、ロエルが叫ぶ。
しょくしゅ
しかしハヤテは封魔を横に薙ぎ、大木ほどもある触手を根本から断ち斬った。ぶ
しゅーっと音を立てて、 青黒い体液が宙に舞う。
《デア・ブルグトム!》
いか くる
[ちゅう
怒り狂った邪神は、ハヤテの頭上へ触手を振り下ろした。だが軍師は、機敏に一撃をかわす。
逆に失中した触手を、一刀両断した。
《アデアア! アデアア!》
ふーっと大きく呼吸する。
なまぐさ
にら
そうぜつ
邪神と正対するハヤテは、全身に生臭い体液を浴びていた。だが大きく肩を動かし、邪神を睨んで、
封魔の切っ先を振り上げた。
「ワイマール義勇軍の力を見せよ! 命惜しむな! 名こそ惜しめ!」
じんち
こた
しゅくぜん じゅうれつ
義勇兵たちは、新たな陣地でその声を聞いた。 応える気力が、粛然と銃列を
どの えんご
「ハヤテ殿を援護せよ! 各個に射撃開始!」
「デフ! ジャム! 撃ちまくれ!」

もうしゃ
レイズは、全隊の先頭で猛射を放った。
せつ ちゅうすうぶ
壮絶な十字射撃が、 邪神の急進を迎撃する。
　　　鉱山施設の中枢部まで、わずかに二十メートル。血戦であった。
・レイヴ

〈第三撃!〉
コールド・アズ・アイス
〈極圧結凍撃!〉
ボグダノフの思念が、 雪原に響いた。
イズ つらら
しつそう
魔導の氷柱が、宙を疾走する。
そうこうし
つらぬ
えんじょう
ほのお
ようしや
装甲車の分厚い前面装甲をも貫き、 一撃で炎上させる。
　　　炎にまかれた乗員も、容赦なく氷柱で刺殺した。
しきつ
「ふざけやがって!」
ほう
ピとう
ごと
だん
たた
はんよう
けつめいしや
無数の三〇ミリ自動砲が、怒濤の如くゾダニウム弾を叩き出す。 火炎放射器が、汎用ロ
　　　ケット弾が、血盟者に群がった。
すべ
かいひ
その全ての射線を空中で回避し、 ボグダノフはさらに痛撃を続けた。
せんがいき
〈戦う勇気があるならな!〉
〈隠れず出てこい、戦鎧鬼っ!〉
ライオットとバウザーは、左右に瓦礫の陰へ飛び込んだ。
がれき
「くそったれ! またか!」
ばくさい
ごうおん
どせい
爆砕する氷柱の轟音にもかまわず、バウザーは怒声を飛ばした。
「これじゃちっとも近づけねえぜ!」
あきら
「だからって諦めちゃだめよ!」
ライオットも飛び散る氷片に目を伏せる。
「勝てるのはあたしたちだけなんだから!」
けんしょう

ふたごけん
二人には、それぞれ剣匠ザウエルの双子剣があるだけだ。
血盟者に一撃を浴びせるなら、接近戦しかない。
むな
つぶ
きより
だがボグダノフの攻撃用魔導は十分に距離を取り、一歩たりとも近づかせぬ勢いであっ た。
〈勝てる‥‥‥か......〉
〈虚しい事を言う......〉
れいてつ ひとみ
冷徹な瞳が、白く発光した。
途端に、腹部から垂れる触手が一気に延伸した。十メートルを超えた肉の鞭は瓦礫を叩き潰し、積雪を二つに断ち割った。
「バウザー隊長っ!」
ぜつきよう
無数の兵が打たれ、絶叫を投げかける。
せんけつ
ようへい はぎし
積雪に散る鮮血に、傭兵は歯軋りした。
「好き勝手しやがって!」
やおら立ち上がり、パウザーは剣を薙いだ。
はら
宙を走る触手を斬り払い、受け流す。
じんじょう
うでまえ
剣の速さも尋常ではない。 ライオットが見ても、かなりの腕前である。
〈少しはやるな、傭兵っ......!〉
こうげき しつよう
ボグタノフの攻撃も執拗だった。
あしもと
頭上から打ち込み、同時に足下を払う。
へいこう
こだ
むなもと
いつせん
せんたん
平衡を失ったバウザーが、あえなく横倒しになった。その胸元を一閃、触手の先端で野戦服を斬り裂いた。
「ぐおおおおっっ!」
「バウザー、避けて!」
雪上に鮮血を撒き、バウザーは横転した。
とっしん
入れ替わるように、ライオットが突進する。
けつめいしや
てりゅうだん とうてき
血盟者の触手を斬り飛ばし、接近するや胸元から手榴弾を投擲する。
わかしらが
「くらいな、若白髪っ!」
ほのお
吹雪を蹴散らすように、ナパーム手榴弾が炎を撒き上げる。飛び退いたボグタノフに、一瞬隙が生まれた。 そこに付け入り、肉迫する。 ライオットが上段から剣を叩きつけた。

にくはく
けん たた
ぶんざい
機械の分際でっ!〉
りょううで こうぎ
きょだい
ボグダノフは両腕を交叉させ、巨大な爪で剣撃を受け止めた。 火花が散る。
やいば
長大な聖鋼の刃を、ライオットはぎりぎりと押し込んでいった。
「機械にだって意地があるんだよ......」
はかな
〈希望は儚い....鉱山とて終わりだ.....〉
せいぜつ
ボグダノフは、凄絶な笑みで応えた。
こた
なにせ向こうにも······〉
しょくしゅ
せんがいき
ライオットが触手をはね除ける。
そうぼう
戦鎧鬼は整息し、双眸を光らせた。
りを捧げ、ライオットは雪原に跳んだ。
きょうかん

「いあああああっっ!」
叫喚と共に、ロエルが跳んだ。
かか
こんしん
じゃしん のうず
大上段に掲げた剣を、渾身の力で振り下ろす。刃は邪神の脳髄を断ち割り、神経の束を 切り裂いた。
《アデアア! アデアア!》
ゆか
たた
逆上したのか、喚く邪神は触手を床に叩きつける。自分の体液と粘液を撒き、巨大な脳髄は無様に悶え苦しんだ。
ま
もだ
「今だ! 後退しろ!」
振り返って、ハヤテが怒鳴った。
こうどう
せいぎょしつ
ふじん
「小隊ごとに坑道の入り口を守れ! 第三大隊は制御室前に布陣!」
おく さっとう
しんがり
市民の悲鳴が、坑道の奥へ殺到していく。 その殿は、義勇兵たちが必死に守っていた。
しつよう しゃげき
ちゅうすう
だが執拗な射撃にも構わず、 邪神は坑道口が集まる鉱山中枢へと前進を続けている。
もはや後退はできなかった。

おそ
ひなん
けいせん
「ロエルさんも逃げろ!」
「ハヤテ様も早く！ もう無理だ!」
「まだ無理じゃないわ!」
いつかつ
叫ぶ市民を、ロエルは一喝した。
襲い来る触手を薙ぎ、決死の形相で叫ぶ。
そうこう
こうせいたいでんぼ
「避難の終わった坑道口から装甲シャッターを閉めて！ 攻性帯電防壁も最大出力!」
後退する義勇兵たちは、耳を疑った。
「それではお二人が......!」
「私はここに残ります！ いいから閉めて!」　「我々にかまうな！ 先に行けっ!」
ロエルとハヤテは声を合わせた。
その二人の姿に・・・・・・
そげきじゅう
レイズは自分の狙撃銃を見下ろした。
だんやく
すでにみなの弾薬も少なくなっている。
やいば
継戦が期待できるのは、ゾダニウムの刃を持ったロエルとハヤテだけなのだ。
（けどこのままじゃ......）
（あの二人だけじゃ......）
とつぜん
へきめん ばくはつ
と突然、鉱山の壁面が爆発した。
せんい
きょだい
繊維セメントの壁が裂け、中から巨大な何かが突き出してくる。
「あ、兄貴いっっ!」
くず
「伏せろ、崩れるッ!」
しゃへいぶつ
少年兵たちも遮蔽物へ駆け、天を見上げた。
あぜん
誰もが、その正体に唖然とする。
「こ、氷......?」
まゆ
もうれつ
眉を寄せたロエルの耳に、ヘッドホンから新たな悲鳴が飛び込んできた。
えいきょう
はきゅう
「魔導の影響、鉱山地区まで波及しました!」
お
『猛烈な冷気が地下水を凍らせています!」
しゅどうりよくろ
ぼうちょう
こつしゅつ
『主動力炉で異常に膨張した氷が突出!』

『第二地下層への送電路、断線しています!』
『電力供給、二〇パーセントまで低下です!」
かたまり
続けて左右から、そして上下から巨大な氷の塊が飛び出してくる。
こうどう てんじょう
らくばん
ぜつきょう
坑道の天井から突出した地下水は、そのまま落盤を引き起こした。
市民たちの絶叫が、坑道全体にこだましていく。
むすめ
「氷をどけてくれ! 娘が下に............!」
「お母さん! お母さん!」
「なんてこった...............!」
ろうじょう いのちづな
豊富な地下水こそ、籠城の命綱であった。
あくらつ きば
む
それが今、市民に悪辣な牙を剥いている。
「レイズ兄ちゃん、怖いよお!」
おく
坑道の奥から、リムロの悲鳴も届いている。
りつぜん
じゃしん にら
だがレイズは慄然として、邪神を睨んだ。
(やるしかねエ・・・・・・)
(俺が...... やるしかねエ......–)
がれき
やおら立ち上がり、瓦礫を飛び越えた。
そして真っ直ぐ、鉱山の出口へ走り出す。
「兄貴! どこ行くんだよ!」
はな
「待て! レイズ! 持ち場を離れるな!」
だれ
仲間たちと誰かの声。
だが聞くつもりはなかった。
(あいつしかいねエ......!)
走りながら、何度も繰り返した。
(あいつしかいねエんだよ、勝てるのは!)
だんがん
しつそう
黒い弾丸めいた疾走を、 ロエルもようやく目にとめた。
「レイズ! どこに行くの! 今は......!」
どの
「下がるんだ、ロエル殿!」
しょくしゅ
目前に触手が振り下ろされた。
警告と共に、ハヤテが割って入る。
きしゅう
はら
とつき
軍師の一刀は、奇襲を受け止め、斬り払う。 態勢を整え、ロエルも並進した。

視線を合わせ、呼吸を同化する。
「いえええええっっっ!」
じゃしん ふところ にくはく
だんざん
左右から剣とカタナを振るい、邪神の懐に肉迫した。しなる触手を断斬する。
《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》
はんげき
うで あし から
反撃の触手が、腕や脚に絡みつく。
咄嗟に振り払い、大きく後退する。
きょり
今一度、距離を取った。
「しぶといっ...............!」
くじゅう
ロエルは、苦渋を声にした。
邪神の再生能力は、見る間に触手を蘇生させている。まるでキリがない。
　　　前進を遮るにも限界があった。
だが息を整えたハヤテは、静かに聞いた。
「以前の邪神どもとは力量が違う.........」
はくじん
態勢を整える邪神に、 軍師は白刃を向けた。
せいさん
するど
凄惨なほどの眼光を、鋭く突き刺す。
「ならばこの一刀で・・・・・・・ 決めてみせる!」
言うなり、ハヤテが一気に跳んだ。
同時にロエルが悲鳴を上げる。
「待ってください、 ハヤテ様!」
ふうま
ばくこう ひらめ
だが「封魔」は、決戦の爆光を閃かせた。
うな
アタック・サウンド
ハヤテの刃は唸りを上げ、攻撃用奇跡は爆光を撒き散らした。
フラッシュ・オブ・ザ・ブレイド
「神雷閃光剣撃!」
こんしん どせい
とっしん
渾身の怒声が、邪神に突進する。
からだ
ただなか
いっしゅん
ハヤテの身体は白光の只中に、一瞬でかき消えていった。

「あ......あれ......」
たお
言って、ジャスティスは崩れ倒れた。
でき
だんぼう
ふる

両手ががくがくと震え、全身が痙攣する。 歯の根など、とっくに合っていなかった。
「暖房止まったのかな......」
せま ちかろう かべ
狭い地下牢の壁に、倒れかかる。
だがその壁にもびっしりと、いつの間にかが張り付いていた。天井から染みだしたが滴が、目の前で
氷柱に変じていく。
「違う........この寒さ・・・・・・異常だ... きっと......あいつの魔導・・・」
防寒服などさして役には立たなかった。
こつかく こお
えりもと
骨格が凍ったかと思うほどに、全身が痛む。自分の吐いた息を、必死に襟元で捕まえる。
温もりはそれだけであった。
ぬく
サウンド
「今......奇跡が・・・ ・使えたら......」
あらが
せいせんじょう
ほっしゅう
ジャスティスは、消えそうな意識に抗うように言葉を続けた。聖戦杖は、没収されてい
る。今はただの少年でしかなかった。
ゆか
「ライオット... 父さん・・・・・・」
床の冷たさが全身をいたぶり、意識すら消えかけていく。
少年は目を閉じて、指先を折り曲げた。
にぎ
聖印を握ったジャスティスは、自分のために初めて・・・・・・祈りを捧げた。
せつな
とその刹那······
「うわあああっっ!」
はじ
天井が弾け飛んだ。
きょだい
かたまり
地下牢の天井を、巨大な氷の塊が突き破ったのだ。続けて、大きな煉瓦石が崩れ落ちる。
れんがいし
からだ
ジャスティスは必死に身体を転がし、瓦礫から逃れようとした。だが石の雨が、全身を容赦なく殴打
する。
のが
ようしゃ
あうだ
とびら
のが
かた
「ぐ......ううっ...............!」
じょう
扉には鍵がかけられている。
すき
逃れる隙はない。
ひふ
肩に、腕に、激痛が走り、皮膚が裂けた。

それでも扉に手を伸ばす。
ふる
開くはずもない扉に・・・・・・震える腕を......
とつぜん
だがその扉が突然
「ジャスティス!」
開くと同時に、小さな影が駆け込んできた。
すばや
ちかろう
ジャスティスの身体を抱きかかえると、素早く地下牢から引きずり出す。
ぼうぜん
ジャスティスは呆然として、 その影を見上げていた。
「レイズ、どうして‥‥‥ どうして、 君・・・・・・」
「来たぜ、ジャスティス......」
「レイズ......」
なみだ
なぜか涙があふれた。
レイズも、力強くうなずいた。
けつめいしゃ
「お前はこれから血盟者と戦うンだ......!」
きせん
毅然として、レイズは宣言した。
だれ
「それがワイマールを救う方法だ! 誰にも文句は言わせねエよ!」
「レイズ......」
ほほえ
ジャスティスは、レイズの腕の中で微笑んだ。 レイズもにやりと笑みを返す。 二人の腕に少しだけ、 親愛の力が込められた。
じゃしん
「レイズ、 邪神は......」
しせつ とつにゅう
「鉱山施設に突入した、どうもヤバイぜ!」
ジャスティスに肩を貸し、 レイズは立ち上がる。 そして立てかけてあった物を素早く引ったくった。
わた
かんしゅ へや
「看守の部屋にあったぜ、使えよ!」
せいせんじょう
渡したのは、聖戦であった。
すばや
و ا ر د
ジャスティスは、がっちりとそれをつかむ。
き ほうせき
すでにその希宝石メタライトは、毒々しい光を放っていた。
「ライオットも地上で戦ってるそうだ。 どうする、どっちから助ける?」
「鉱山にはみんながいる、 まずはそっちだ」
「わかった、案内するゼ」
凍えた鼻の下を、恥ずかしげに指でこする。
クルセイダーどの
「俺の街へようこそ、聖戦官殿」
少年たちは、冷たい通路へと全力で駆けだしていった。

「ハヤテ様!」
せんこう
げきとつ
ロエルは、閃光に悲鳴を発した。
さくれつ
アタック・サウンド
ぼくだい
ちゅうくう たた
軍師のカタナから炸裂した攻撃用奇跡は、莫大な熱波を宙空へ叩き出した。周囲の冷気と激突し、凄まじい蒸気を上げる。
いちげき
その一撃が、真正面から邪神に食らいついたかに見えた。 だが.........
《デア・ブルグトム!》
ほうこう
しょくしゅ
かべ
咆哮を発し、邪神は幾つもの触手を振り上げた。
それを前面に並べ、肉の壁を形成する。そして壁は電光を噴き上げた。
「みんな伏せて!」
さけ
ゆか
反射的に叫び、床に転がる。
その頭上を、奇跡と魔導の激突が駆け抜けた。轟音と衝撃波が、絡み合ったまま鉱山施設を揺さぶった。
「きゃあああああっっ!」
「ああああああっっ!」
ほうちょう
きめん
こうどうない
地下水の異常膨張で、壁面は大きくひび割れていた。衝撃に耐えきれず、坑道内にコンクリート片が落下する。 落盤に連鎖し、市民たちが圧殺された。
らくばん れんさ
「ハヤテ様! ハヤテ様!」
ばくはつおん
耳を塞ぐ爆発音に、何度も叫び続ける。
せいじゃく おとず
やがて・・・・・・静寂が訪れた。
きょだい
みと
起きあがったロエルは、そこに焼け焦げた巨大な脳髄を認めた。
がれき
そして瓦礫の山に目を向ける。
ふう
吐は
い
にぎ
「封魔」を握ったまま、ハヤテは瓦礫に埋もれていた。しかしぴくりとも動かない。
むなもと
た血は、胸元をどす黒く染めていた。
「ハ・・・・・・ ハヤテ様!」

駆け寄ったロエルは、大声で叫んだ。
てのひら
いつせい
その声に義勇兵も市民も一斉に顔を上げる。坑道口から次々に人があふれ出てきた。
どの
「あれはハヤテ殿だ!」
「まさか今の一撃で......!」
じゃしん
焼け焦げた邪神の肉体にも声を失う。
しかしロエルは、 邪神を忘れ去っていた。
「ハヤテ様! ハヤテ様!」
抱き起こし、必死に揺する。
からだ
死人のように冷たい身体は、異様に軽いものだった。 生気などまるで無い。
ころ
それでも呼びかける。 心配した義勇兵たちが駆け寄って来た頃、ようやく......
「............ ロエル...殿か......」
喘ぐように声を絞った。
「お気を確かに! ハヤテ様!」
「邪神は......みなは......」
駆け寄った義勇兵が代わりに答えた。
「ハヤテ殿のおかげで······なんとか守りきれました.·····礼を言います...............」
うめ
そうかと呻いて、ハヤテは咳き込んだ。
掌に血を吐き、 ロエルに向き直る。
りょうかい
「戦いが終わった訳ではない・・・・ ライオットも心配だ······ 行ってやくれ......」
「分かりました・・・・・・でもハヤテ様は......」
「私の事なら気にするな...............」
血だらけの顔で、笑ってみせる。
「負傷者も多いはず......そちらを気にしてやることだ・・・・・・」
「そうします.クルーガー!」
ロエルは、決然と立ち上がった。
おうえん
「生き残った義勇兵をまとめて! ライオットとパウザーの応援に行きます!」
「了解! 負傷者は......」
そう、士官が言いかけた時だった。
《デア・ブルグトム······》
《アデ······アデ・・・・・・ブル・ザグトム······》
思念が、辺りに拡散した。
ロエルは、慄然と背後を振り返る。
じゃしん
そこには邪神の死体があるはずだった。
きょだい のうずい
だが巨大な脳髄は今や中央から割れ、中から肉色の巨人が立ち上がっていたのだ。
《デア・ブルグトム・・・・・・ 》
くさ
《アデ······アデ・・・・・ ブルザグトム······》
「みんな下がって!」
に

一度は安心した市民が、我先に坑道へ逃げ込んでいく。れたハヤテは、義勇兵たちが
抱え、後方へ連れ出した。
にぎ
ロエルは剣を握り、新手に間近で正対した。
腐りきった人間の標本。
そんな物がこの世にあるなら、まさに目の前の邪神のことだ。
たくま
身長五メートルにもなる巨人は、確かに筋骨逞しい人間男性を思わせた。
だが全身、き出しの筋肉組織であり、半ばはピンク色のぶよぶよした腫れ物で覆われていた。
おお
どろりと溶けた眼球でロエルを睨む。
もよお
吐き気を催すほどの顔かたち......
だがそれは確かに......
「まさかこいつ................!」
《デア・ブルグトム・・・・・・》
.
にら
《アデ······アデ・・・・・・ブル・ザグトム······》
がれき
前進し、両腕をロエルたちに伸ばした。
つぶ
きたい
ねんえき
ぶちぶちと腫れ物が潰れ、奇態な粘液が周囲に撒かれる。
強酸性のそれは、床を溶かし、瓦礫を焼いた。
剣
しゃげき
「後退! 各個に射撃開始!」
り
ほうか
むか
瓦礫の山を飛び越え、ロエルは命を下した。 同時に、 十字砲火が邪神を迎え撃つ。
ちゃくだん
みずぶくろ
ばくはつ
だが着弾と同時に、 邪神の腫れ物が水袋のように爆発した。 粘液が周囲に拡散する。
ぜつきよう
からそれを浴びた兵たちは、絶叫を発してのたうち回った。
「ぎゃあああああっっ!」
「いかん......それでは無理だ・・・・」
J
後方で横になったまま、ハヤテが呻く。
義勇兵たちは、その悲鳴に後退した。
どの
「どうすればいいんだ、ロエル殿!」
「どうすればって...............!」
えじき
はくへいせん
接近すれば、粘液の餌食になるのは必然だ。ロエルとて、白兵戦をためらった。
かんげき

じゃしん
もうぜん しつそう
その間隙を見て、邪神は猛然と疾走した。
きょたい
あわ
おく
つぶ
巨体に似合わぬダッシュに、慌てて義勇兵たちが左右に散る。逃げ遅れた兵を踏み潰し、邪神は一台の回転掘削機に取りついた。
くつきくき
「だめよ、あれは......!」
さけ
じゃしん
叫ぶロエルの目前で、 邪神の両腕がコンベアを破砕する。
鋼鉄の支柱も、蒸気を発して溶け落ちていった。
《デア・ブルグトム······》
《アデ······アデ・・・・・ブルザグトム······》
きかい こうげき
その奇怪な攻撃に、 義勇兵たちも動けない。
おさけ
とっしん
だがロエルは雄叫びを上げて突進した。
「ああああっっ!」
すきま
ねら
はら
腫れ物の隙間を狙い、アキレス腱を縦に斬り払う。続けて切っ先も突き入れる。
しかし邪神の注意は、ロエルに転じた。
あし
もうぜん じゅうし
斬られたはずの脚で、猛然と銃士の少女を蹴り飛ばした。
「いやあああああっっ!」
「ロエル殿!」
義勇兵も、そして市民も悲鳴を上げる。
ねんえき
強酸性の粘液が、ロエルの両腕にへばりついた。
野戦服を溶かし、骨まで焼けつく痛みに、ロエルは思わず剣を落とした。
「あっ......ああああっっ!」
ロエルは自分の両腕を見下ろした。
皮がめくれ、肉が剥き出しになっている。 まるで目の前の邪神のように。
しゅんかん
瞬間、意識が遠のいた。
「ロ、ロエル殿っ......!」
テイクワン
ハヤテも、必死に身を起こす。
その目に、やおら白光が飛び込んできた。
「第一撃!」
こうどう しょうかん
はんきょう
坑道に召喚の声が反響した。
コールド・ウインド・トゥ・ヴァルハラ

「冥府神殿極低烈風!」
だれ
きょうがく
その声に、誰もが驚愕した。
しょう
声を放った指先から、淡い聖光の輪が飛翔する。 ロエルは身を起こし、彼の名を呼んだ。
「ジャスティス!」
さんぱつ クルセイダー
金髪の聖戦官が、そこに立っていた。
だが足取りはふらつき、左右をデフとジャムに支えられている。
なぜか顔を腫らし、聖衣も血に染めている。
けんめい サウンド
きぼく
だが彼の指先は、懸命に奇跡を起爆させた。
《デア・ブルグトム······》
じゃしん
おおざよう
邪神が、 大仰な仕草で振り返った。
きんぱつ
きょたい
もうそく
おそ
うずま
その巨体めがけ、猛速の冷気が襲いかかった。白い渦巻きが、淡い人型に転じる。
それは金髪をなびかせた女騎士となり、携えた槍を一閃 邪神に叩きつけた。
きし
たずさ
やり いつせん
たた
《ヴァルキュリアアッッ!》
こうだん
ねんえき
真っ白い光弾が、群れを成して邪神に叩きこまれた。だが着弾は、体液の散射も許さない。
粘液は、空中で氷結した。 濡れ光る全身も瞬く間に凍りついていく。

またた
お
《デア・ブルグトム!》
くる
《アデ! アデ! ブル・ザグトム!》
踏み出そうとしても動けない。
邪神の両足は、すでに床と結氷していた。怒り狂い、ジャスティスに手を伸ばす。
クルセイダー
そげきじゅう
だが聖戦官の前では、レイズが狙撃銃を構えていた。ジャスティスを守るように、怒号を放つ。
どごう

「失せな！ ワイマールから！」
さけ
てつこうだん
叫んで、レイズは銃弾を邪神に撃ち込んだ。狙い違わず、
ゾダニウム徹甲弾は邪神の後頭部に命中する。
瞬間、堅く凍った邪神の肉体は、ガラス細工の如く微塵に砕け散った。
《デア・ブルグトム!》
しゅんかん か
ごと
みじん くだ
からだ
きし
「ぐっ........!」
邪神は身体を軋ませ、振り向いた。
その視線が、 レイズを見下ろした時.....
レイズは、 思わず口元を覆った。
おお

今、初めて気が付いた。
くさ
とうけつ
いま
こくはく
腐り溶けた邪神の顔は、半ば凍結している。だがその目鼻立ちは、未だ残されていた。
けつめいしゃ
酷薄そうな邪神の顔はまさしく、血盟者ボグダノフのものだったのだ。
ぞう
〈自信家だな、小僧・・・〉
うぬぼ
〈だが自信と自惚れは違う......〉
こうしよう よみがえ
脳裏に哄笑が蘇る。
のほ
吐き気と悪寒が足下から立ち昇ってきた。
だがレイズは......
「ふざけるなッ!」
ごうぜん
じゃしん
かた
傲然と銃弾を撃ち込んだ。
のどもと
邪神の額に、眼球に、喉元に・・・・
ぞうさく
その造作を吹き飛ばすように連射する。
「ここは俺の街だ! 今すぐ出て行け! 出て行け! 出て行けっ!」
からだ
続けて、身体を次々に撃ち抜いた。
くだ
指を砕き、手首を割る。
こし
肩を裂き、腰を撃つ。
その光景に、ハヤテも死力を絞った。
「クルーガー! 全隊射撃だ!」
軍師は血にむせながら、声を飛ばす。
「残弾にかまうな! 今なら邪神を倒せる!」
「撃てえーいっ!」
つらぬ
号令一下、無数の銃弾が邪神を貫いた。
あし
ゆか
腕が落ち、首が飛ぶ。 避けようとて、脚は床に張り付いている。その脚も粉々にやがて
吹き飛ばされた。
《デア・ブルグトム!》
《アデ! アデ···》
とぜつ
はへん
思念が途絶した。 邪神は無数の破片と化し、 がらがらとその場に砕け散っていった。
ジャスティスもようやく、 聖印を解いた。
「や......やった......」

「ジャスティス！ レイズ!」
ハヤテは、必死に身を起こした。
がれき かげ
義勇兵も瓦礫の陰から、二人に駆け寄る。
だがジャスティスはよろめきながら、倒れたロエルに近づいた。
「ロエル しっかりして、ロエル......」
「ジャスティス... あなた......」
ぼうぜん
少女はジャスティスの姿に呆然とした。
「今、傷を治すよ！ 待ってて・・・・・・」
サウンド
「だめ......私に奇跡は使わないで......」
痛みをこらえて、 ロエルはかぶりを振った。
「ライオットさんが戦ってるの... お願い、行ってあげて・・・・・・あなたの力は......」
そこまで言って、激痛に絶句する。
「ありがとう......ありがとうね........」
うる
ひとみ
ジャスティスは、潤んだロエルの瞳を見つめた。
何か言いたげな視線だが、今は言葉を交わす時ではない。
からだ
「うん!」
いつしゅん
ロエルの身体を義勇兵たちに預ける。
そして、すっくと立ち上がった。
振り返れば、 レイズの凛々しい顔がある。
「ジャスティス、行こうぜ！ ライオットが心配だ!」
そしてジャスティスとレイズは......
こうどう
自分たちを取り囲む無数の鉱山口に気づいた。 どの坑道からも、市民たちがあふれ出し、少年たちを見下ろしている。
かた
一瞬、レイズが身を硬くする。
だがその先頭で小さな手が振られていた。
「ジャスティス様あ！ レイズ兄ちゃん!」
少女が元気良く、声を上げる。
いつしょ
「リムロも行くう！ リムロも一緒に連れてってよお!」
かんせい
その声につられるように、無数の歓声が湧き起こった。
「そうだ、俺も行く!」
クルセイダー
「俺も連れてってください、 聖戦官様!」
はくしゅ
とき
歓声に拍手が加わり、やがて鬨の声となる。
ほほえ
その力強さに微笑み、ハヤテは手を打ち振った。
「行ってくれ.....」
咳き込み、か細い声で言葉を続けた。
「ライオットが待ってるぞ...!」

げきへ
ジャスティスは一礼し、狙撃兵に相対する。
レイズもうなずき、通路へと駆けだした。
くつおと
ひび
迷いの無い靴音を響かせて。
「待ってくれよ、兄貴！ ジャスティス！」
あわ
追いすがる仲間も慌てて走り出した。
彼らの最後の戦場へと‥‥‥

〈があああああっっ!〉
とつぜん
みもだ
突然、ボグダノフは空中で身悶えた。
みぎうで
ゆが
右腕を見つめ、激痛に大きく顔を歪める。
〈そんな......そんな馬鹿なっ!〉
〈まさかあの小僧っ......!〉
かくぜん
「こんな時に独り言かよっ!」
ちようやく
ライオットは、雪を蹴って跳躍した。
愕然とする血盟者めがけ、ゾダニウムの大剣を浴びせ斬る。だがボグダノフは、吹雪の中を舞うように、後方へと飛び退いた。
〈どうやら遊び過ぎたわ・・・・・・〉
〈時が無いのが悔やまれるな......〉
「ジャスティスのことか!」
血がしぶく胸元を押さえ、バウザーが叫んだ。その目の前に、ライオットも着地する。
「ちょっと本当なの!」
と、ヘッドホンにハヤテの声が響き渡った。
『ジャスティスが今そちらに向かった!』
ひがい
『鉱山の被害も軽佻だ！ 安心しろ!』
かんせい
通信を聞いた兵たちから歓声が上がる。
あんど
ライオットは、全身で安堵の息を吐いた。 何があったかは分からない。
だが勝利に近づいたことだけは確かだ。
ノイズ
うす
「さっきの魔導の効果・・・・・・かなり薄らいでるわよ、 ボグダノフ ......」
ちょうせんてき
挑戦的な声で言い、剣を正眼に据えた。
「あんたの力にも限りがある・・・・・・ ジャスティスはそう読んだけど・・・本当みたいね」
バウザーも、気温と風力の変化には気づいていた。
吹雪は勢いを失い、金属をも破砕する寒気は消えていた。 ワイマール全土を凍らす魔導など、そう持続できるはずもない。
ノイズ
「なら俺たちにも勝機が出てきたな......」

ようへい
にぎ
きょうげき
傭兵も剣を握り、側方へ進んだ。ライオットと二人、 血盟者を挟撃できる位置である。
つちけむり
あし
そろ
「そのぬるぬるした脚、歩きにくいだろう......俺が短く斬り揃えてやるぜ・・・・・・」
むし
〈ほざけ、蛆虫どもがっ!〉
フィフス・レイプ
ボグタノフの額に血管が浮き上がる。
血盟者は思念を集中し、一気に降下した。
〈第五撃!〉
デッド・ウインター・デッド
〈極寒戦冬絶滅打撃!〉
「みんな! 来るわよっ!」
に
叫んで、ライオットは横っ飛びに逃げた。
バウザーも、雪上に身を投げ出す。
りょううで
せんぷう
から
急降下するボグダノフの両腕には、魔導の寒気が旋風となって絡みついている。振り下
ろすやそれは、積雪を吹き飛ばし、大地を二つに割った。
地割れの隙間から、どっと黒い土煙が上がる。
ふう
「臆するな! 奴の動きを封じろ!」
義勇兵たちは、無数の火線でボグダノフの前進を阻む。だが躊躇もなく、血盟者はライオットに肉迫
した。
にくはく
どな
〈逃れられると思うかっ!〉
きょだい
ボグダノフはもう一撃、もう一撃と巨大な爪を振り下ろす。
攻撃用魔導が付帯した腕を受け流せば、剣の刃は破砕されるだろう。
けんやいば
はさい
「こっちにもいるぜ、 ボグダノフ!」
おそ
かいひ てつ
それを恐れ、ライオットは回避に徹した。
たた
叫んで、バウザーが飛び込んだ。
「生身の人間じゃ相手不足かよ!」
きょく
大剣に巨軀の重さを乗せ、重厚な一撃を右腕に叩きこむ。棘の生えた腕がひび割れ、上に青黒い体液
がぶちまけられた。
ようへい
〈おのれ、傭兵っ!〉

すかさず、ボグダノフも左腕を突き入れる。だがその四つの爪をかいくぐり、退きざまバウザーはさらなる一刀を斬りつけた。
「ライオット! 今だ!」
ちょうやく
怒鳴って、大きく後方へ跳躍する。
どうたい
注意が逸れた隙を逃さず、
ライオットは態勢を整え、照準を据える。下段から跳ね上げるように、刃を振り抜いた。
「しえやあああああっっ!」
ほうこう
戦鎧鬼の咆哮が雪原を揺さぶる。
だがボグダノフは笑ったまま、一刀をかいくぐった。 そして振り返る。
とっしん
目前には、再度突進したバウザーがいた。
しゅんかん
びしょう
瞬間、目が合う。そして微笑した。
じゃま
〈邪魔だ、人間......!〉
「どげえええええっっ!」
「バウザー!」
くちびる
ライオットの唇がわななないた。
みぎうで
ボグダノフの右腕が、傭兵の腹に深々と突き刺さっている。
その四つの爪は、バウザーの胴体を貫通し、背中にまで突き抜けていた。
「あ......ああっ......」
ひ とごと
けつめいしや
バウザーは、自分の腹を他人事のように見下ろす。だが血盟者が爪を引き抜くや、どっ せんけつ
ふんしゅつと鮮血が噴出し始めた。
「パウザー!」
「バウザー隊長!」
じゅうげき
一瞬、銃撃が止む。
ほうせん
おのれ
あわ
さけ
呆然とする兵たちの目前で、バウザーは己の血の海に沈み込んだ。
おろ
〈愚かしい男だ・・・・・・〉
あざわら
嘲笑い、血盟者はライオットに視線を変えた。
しょうし
生身の身体で戦いを挑むなど笑止だとどめは刺さぬ苦しんで死ぬがいい......〉
「がっ......ががっ.........」
バウザーの呻きは、もう声にもならない。
のどの奥からも血潮があふれ、呼吸を塞ぐ。
ようへ
自分の血で溺れ、傭兵は雪を掻きむしった。

慌てて、数人の兵士が駆け寄る。
「死ぬんじゃないわよ、バウザー!」
叫んで、ライオットは駆けだした。
おど
だが頭上からボグダノフが躍りかかる。
つめ
きゆうはく
振り上げた爪が、左右から急迫した。
おそ
せんがいき
〈もう遅いのだ、戦鎧鬼!〉
きょうかん
けん
叫喚に反応し、ライオットも剣をかざす。
ののし
そして己の過失を罵った。
「しまった......!」
かか
げきとつ
しゅんかん
やいば
反射的に掲げた剣は、まともに血盟者の腕と激突する。 瞬間、ゾダニウムの刃にひびが
入った。続けて、根本から断ち折れる。
くだ
砕かれた刃はそのまま宙を飛び、雪に深々と突き刺さった。
こうしよう
これで武器はあるまい!〉
眼前の哄笑に、ライオットは硬直した。
こうちょく
ひま
義手を引き抜く暇はない。
こら
鼻先まで達したボグダノフの爪に、戦鎧鬼は呼吸を堪えた。だが......
ぜつきょう
があああああっっ!〉
絶叫を発して、 血盟者は仰け反った。
けつめいしや
の
あわ
慌てて、ライオットは横に飛び退く。
じゅうだん
たま
ボグダノフのこめかみに、どこからか一発の銃弾がめり込んだのだ。 血盟者の肉体
穿つ弾。ゾダニウム弾に違いなかった。
だん
「レイズ!」
その狙撃力に、ライオットは確信して叫ぶ。追うように、澄んだ声音も聞こえてきた。
「第二撃......」
なつ
やけに懐かしい声が通りに響く。
ふぶき

J
ライフ
「生命譲渡治癒!」
おお
かなた
すいせい
雪に覆われた通りの彼方から、聖光が尾を引いて急接近する。 白い彗星めいたその光は、うずくまるバウザーを直撃した。そして淡い光で傭兵を包み込む。
「. . . . . これは. . . . . 」
しょうげき うそ
「. . . . . . ジャスティス!」
はんきょう
せんがいき
やいば
バウザーは、消え去る痛みに我に返った。
傷口が塞がれ、失血の衝撃も嘘のようだ。
そして目を上げ、口をぱくつかせた。
ライオットの胸の奥で、その名前が反響する。 戦鎧鬼は刃を失った剣を取り落とし、空手のまま声のする方を見つめた。
そこに小さな少年が立っていた。
せいせんじょう かた
にぎ
吹雪に聖衣をなびかせ、聖戦杖を堅く握りしめている。
「ライオット、今行くよ!」
叫んで駆け出す少年に、 ボグダノフは血相を変え、歯を剥きだした。
〈おとなしくしておれば良いものを!〉
「そうはいかない!」
じゃしん
しょせん
こざか
決然と、ジャスティスは言い切った。
みのが
「邪神と血盟を結んだ者を見逃す訳にはいかない! 創世神の名において、永遠の闇に放 逐するっ!」
〈貴様一人に何ができる!〉
どな
ボグダノフも、怒りを剥き出して怒鳴った。
クルセイダー
〈所詮、聖戦官一人ではないか!〉
「おっと、一人じゃねエぜ!」
みけん
不敵な声は、ジャスティスの背後から現れた。照準をボグダノフの眉間に合わせながら、狙撃兵はゆっくりと歩み寄る。
「レイズ、お前・・・・・・」
「パウザーのおっさんはしばらく寝てな!」
はな
照準から目を離さずに、言い放つ。
くちびる かた
レイズは、唇を堅く引き結んだ。
えちの
ゆず
「この獲物だけは譲れねェんだ!」

〈小賢しいことを......!〉
ちょうしょう
ボグダノフは、嘲笑と不満をちらつかせた。
じゅうこう
だが決然と、レイズは銃口を突きつける。
コープ
けつめいしゃ
がっち
れいてつ
じゃしん
照準器の中で、血盟者と視線が合致した。
じゅうだん
その眉間に一発......続けてもう一発と銃弾を撃ち込んでいく。
〈ぐっ......ぐぐうっ......!〉
血盟者は後退するが、 レイズは許さない。
かたまり
なく、ゾダニウムの塊をボグダノフの顔面にめり込ませていった。
こぞう
〈増長は死を招くぞ、小僧......!〉
ボグダノフは、果敢に腕を振り上げる。
だがレイズも黙して、一歩も退かない。
にら
冷徹な視線で血盟者を睨み、 機械的な動作で弾丸を薬室に送り込むだけだ。
(俺はもう逃げない......)
(こいつの前から二度と......)
のどもと
さらに喉元に一撃を撃ち込んだ。
「もう終わりだ、ボグダノフ!」
せんせいじょう
ジャスティスも聖印を結び、聖戦杖を突きつけた。
「邪神ンガイ・ヴェールと共に、永遠の闇黒に帰るがいい!」
ディストーション
念を集中し、奇跡増幅を開始する。
だがボグダノフも、 改めて思念をこらした。
おろ
クルセイダー
〈愚かしいな、 聖戦官......〉
〈我が主にもう余力が無いと看たか・・・・・・〉
〈それが命取りよ......!〉
かた
ライオットは身を堅くした。
サウンド
ジャスティスに残された奇跡は、あと一度のはずだ。 失中は許されない。
けん
「バウザー、剣を!」
ライオットはバウザーと目を合わせた。
しょうちゅう
せんがいき ほう
バウザーも、すでに掌中の剣を戦鎧鬼に放り投げている。
「任せたぜ、戦鎧鬼っ!」
がっちり受け取り、切っ先を据える。

しかし......
さくらん
〈いかがされた、我が主よ!〉
こた
〈我が呼びかけに応えよ! 今、力を......!〉
〈なにゆえ、私の願いを無視なされる!〉
りょううで
しだい
錯乱するボグダノフは、ふと自分の両腕を見下ろした。次第にひび割れ、崩れ落ちていく。最悪の事態を悟り、血盟者は絶叫した。
さと
けつめいしゃ ぜつきょう
〈ああああああっっ!〉
ブエ
同時に、ライオットとバウザーのヘッドホンが声を放つ。
「聞こえますか、 ロエルです......」
きょうこうれんたい
『第三教皇連隊から入電......』
げきたい
『邪神侯ンガイ・ヴェールを撃退・・・・・・』
たんぶたい
きょうこく とつぱ
『救援部隊、 フルダ峡谷を突破しました!』
あんど
二人で目を合わせ、 安堵の息を吐く。
「どうした、 ご主人様は不在かよ?」
「電話でもした方が早いんじゃないの?」
げきど
ボグダノフは、崩れゆく肉体に激怒した。
そしてジャスティスを見下ろす。
クルセイダー
ねら
聖戦官は、ぴたりと狙いを定めていた。
〈貴様だけでも道連れだ!〉
ルシフエル
ちょくめい
さすれば邪神帝様の勅命は......
かんりょう
ラストテイク
「奇跡増幅準備完了! 最終撃!」
ジャスティスは、激怒に応じなかった。
聖印をぐいと血盟者に突きつける。
パイロ
「神聖炎熱墮撃!」
サウンド
だれ
〈ああああっっ!〉
あしもと
ふんしゅつ
奇跡は、血盟者の足下から噴出した。
かがや

からだ こうそく
白く輝く古代神聖文字の列が、らせん状に流れ、ボグダノフの身体を拘束する。
頭頂まで捕縛すると同時に、一気に火炎が噴き上がった。創世神の遣わした炎が、
ボグダノフの身体を焼き焦がす。
クルセイダー
だんがん
ののし
〈貴様の手を見れば、みなは罵る!〉
《聖戦官だと信じる者などおらぬわ!〉
「ここにいるンだよ、バカ野郎!」
レイズは静かに引き金を絞った。
ろう
「誰にもそんな事は言わせねェ! 絶対に!」
弾丸は、ボグダノフの右眼にめり込んだ。
「撃て! みんな撃て!」
「ジャスティスを守れ! 撃ちまくれ!」
じゅうげき
つらぬ
ごと
続けて義勇兵たちの銃撃も、肉体を貫いた。 体液が噴水の如く舞い上がる。
〈ふざけるなあっっ!〉
けつめいしや
血盟者は、最後のあがきを見せた。
ジャスティスに向かい、大きく口を開ける。
せんがいき
からだ
のど おく
その喉の奥から、白い冷気が湧き起こった。
クルセイダー
〈貴様など聖戦官ではない!〉
クルセイダー
〈貴様は決して聖戦官ではないわ!〉
「危ねエ、ジャスティス!」
な
レイズが怒鳴って、引き寄せようとする。
クルセイダー びどう
だが聖戦官は微動だにしなかった。
ボグダノフの背後には、ライオットが跳んでいたのだ。
〈戦鎧鬼、貴様........!〉
「あの世へ行きなっ!」
たいけん
ざん
大剣を振り下ろし、血盟者の首を斬り落とした。 雪上に無惨な首が転がる。
炎にまかれた身体も溶け落ち、ぐずぐず溶解していった。
ようかい
「ライオット・ ・・・ありがと......」
ひざ
笑って礼を言い、ジャスティスは膝を突いた。 その身体を、ライオットが抱き留める。
「礼を言うのはあたしの方よ。 今日もご苦労様、 ジャスティス ・・・・・・」
じゃしゅうもん
二人の顔を、赤い邪宗紋の光が照らす。

かいこう
だれ
さぎ
怪光を、レイズや仲間たちも見つめていた。
バウザーは目を上げ、近づく気配に気がついた。
「レイズの兄貴一っ!」
デフやジャムが、雪を蹴散らし駆けてくる。
無数の義勇兵が、そしてより多くの市民の列もこちらに向かっていた。
みわた
その人の波を見渡して、レイズは言った。
「誰もいねエよ、 ジャスティス・・・・・・」
クルセイダー かた
レイズは、聖戦官の肩に手をかけた。
「お前の事、疑う奴なんて誰もいねエさ...たとえその印を見たってな...」
「ありがとう、だけど......」
「......お前さんは、この街を救ったぜ・・・・・・」
遮って、バウザーが白い息を宙に吐く。

「一万二千の命を救ったんだ・・・疑う者はもういやしないぜ・・・・・・」
ようへい
たばこ
そして傭兵は、折れた煙草を口にくわえた。
「..............ガキでなけりゃあ、一杯おごるところだ・・・・・・とにかく、がんばったな.........」
うれ
ジャスティスは嬉しそうに笑い返した。
せんがいき ほほえ
その様を、戦鎧鬼は微笑ましく見つめる。
ねむ
じゅうだん
「もう眠ってもいいわ、 ジャスティス・・・・・・」
ぬぐ
戦鎧鬼は、相棒の額から汗を拭った。
「戦いは終わったもの......しばらく静かに・ ・休もうよ............」
みよう うれ
腕に抱く少年の重さが、妙に嬉しかった。相棒は帰って来たのだ。戦鎧鬼の腕に・・・・・
〈それはどうかな......〉
不意の声に、全員が振り返った。
きょうふ
そして不気味な光景に恐怖する。
こうしょう
ボグダノフの首が燃え尽きながら、未だ不敵な哄笑を続けていたのだ。
〈終わりなき戦いの時代だ......〉
〈安らぐ間などあるはずもない......〉
そして永遠に・・・・・・貴様の存在は受け入れられぬわ・・・・・・なにせ貴様は・・・・・・〉
「やかましいんだよ!」
こし
ライオットは、腰から拳 を抜き放つ。
なな
銃弾は、斜めに頭蓋を撃ち抜いた。
みじん
ボグダノフの首は、微塵に四散する。
くちびる ふる
その光景に、ジャスティスは小さく唇を震わせた。
「まさかあいつ...父さんのこと......」
だが返事はなかった。
こうちよく
ライオットも握る拳銃を硬直させる。
じふぶき
ちょうしょう
二人の背中を、音を立てて地吹雪が駆け抜けていった。
あたかも血盟者の嘲笑にも思える、無慈悲な疾風であった。
むじひ

【エピローグ】

「......ロエル... ロエル......」
だれ
遠くから誰かに呼ばれた。

かくせい
薄暗がりの中、はっと覚醒する。
りょううで
くちびる
ベッドの上で身を起こしたロエルは、両腕の激痛に唇を噛んだ。
「あっ. . . . . つっ. . . . . 」
ひど
「起きない方がいい・
・酷い怪我だから. . . . . . 」
「ジャスティス. . . . . !」
かたわ
ほほえ
おどろ
ロエルは、傍らで微笑む少年に驚いた。
そして、自分の両腕を初めて見下ろす。
ひじ
かた
手首から肘まで、堅く白布が巻かれていた。
びょうとう
地下会議室は、無数のベッドで埋め尽くされている。臨時の野戦病棟には、負傷者の呻きと消毒薬の匂いが充満していた。
にお
じゅうまん
こしか
やさ
ジャスティスは小さな椅子に腰掛け、ロエルの背を優しく支えた。
「た、戦いは‥‥‥」
まくらもと
な
「もうとっくに終わったわ. . . . . . 」
不意に、頭上から声がした。
じゃしん
「ボグダノフも邪神ももういない. . . . . . あんたたちワイマールの勝ちよ. . . . . 」
枕元に立つライオットも、笑って言った。
となり
そして隣のベッドからは、身を起こしたハヤテが安らかな表情でうなずいた。
「ああ、終わったのだよ、すべて・・・・・・」
「あ. . . . . 」
しゅんかん
その瞬間、ロエルは言葉をなくした。
えつ のどもと
全身から力が抜けると同時に、強い嗚咽が喉元にこみ上げる。それをこらえて、少女は唇を噛みしめた。
「. . . . . . 終わった. . . 終わったのね. . . . . . 」
なみだ
ふる
あらゆる感情が一気に噴き出し、涙に変わる。 その震える背中を、ジャスティスは優しく撫でてやった。
「良かったね. . 僕も嬉しいよ. . . . . . 」
「. . . . . ありがと、 ジャスティス・ . . . .]
「じゃあ・・・・・・もう行くね. . . . . . 」

「えっ......?」
せいせんじょう
顔を上げたロエルの前で、ジャスティスは聖戦杖を手に立ち上がった。
ライオットも背中に荷物を背負っている。
あわ
「世話になったわね。慌ただしいけど......これであたしたち、 失礼するわ」
「待ってください! 街を出るんですか!」
「戦いは終わったからね......」
ジャスティスは、疲れた笑みでそう答えた。
とちゅう
なごりお
「僕たち、まだ旅の途中なんだ・・ ・名残惜しいけど、ずっとここにはいられないよ・・・・・・」
「どうして! ねえ、どうして!」
腕の痛みもかまわず、ロエルはジャスティスにすがりついた。
れい
あやま
「私、まだ御礼もしてない! それにあなたには.. 謝らなくちゃ!」
「御礼なら今、言ってくれたよ。 それに・・・・・・謝ることなんかないし......」
はな
てぶくろ
ジャスティスは、ロエルの手をそっと引き離した。
その少年の手は、厚い手袋で包まれている。それでも・・・・・・赤光が漏れていた。
「まだ・・・・・・消えないんだ・・・・・・」
ジャスティスはすまなそうに言った。
きょうこうれんたい とうちゃく
「もうすぐ第三教皇連隊が到着する。彼らに変な誤解して欲しくないんだ」
「要は、もめ事が嫌なのよ」
かた
肩をすくめて、ライオットが言った。
めんどう
「いちいち説明するの、面倒でしょ?だからとっとと逃げるわけ」
「私が説明します!」
たくさん
「ありがと。 でもあんたには、もっと沢山仕事があるでしょ?」
ライオットは、背後を振り返った。
おうが
横臥する負傷者。行き交う医療官。
息絶えた者には家族がとりすがる。
かん
「本当はこの街、これからが大変じゃない。 がんばって再建するのよ」
いっしょ
「なら一緒に...」
「それは無理だ、ロエル殿」
横からハヤテがそう告げた。
どの
「二人には二人の旅がある....行かせてやることだ」
ふる
なみだ
ロエルは唇を震わせ、涙した。
「どこへ行くの............」
ジャスティスの手を握り、問いかける。

「なぜ行くの...・・・理由だけは教えて・・・・・・」
「それは......」
びょうとう きょたい
ジャスティスが口ごもった時、野戦病棟に巨体が飛び込んできた。
せんけんたい
「来たぜ、ジャスティス! 教皇連隊の先遣隊だ!」
たばこ
さけ
バウザーは、煙草をくわえたまま叫んだ。
そうしゃじょう
「さっさと行きな、見つかるぜ! 操車場でレイズが車を用意してる!」
「すみません、今行きます!」
「おっと、手を握り合ってるな。 そんなに別れがたいのかよ?」
「そ、そんな......!」
くず
真っ赤になるジャスティスをこづき、ライオットはにやにやと顔を崩した。
うらや
「青春よねえ、ジャスティス! お姉さん、羨ましいわあ!」
「ラ、ライオット!」
こうぎ
せんがいき
かた
1717
たた
だが相棒の抗議を無視し、戦鎧鬼はバウザーの肩をぽんと叩いた。
たの
「臨時の相棒、ご苦労さん。 また頼むわ」
「本当は俺と別れがたいんだろ?」
じょうだん
「冗談! あたし、面食いなのよ!」
そして、ベッドのハヤテに振り返る。
軍師は穏やかな顔で、敬礼をして見せた。
すばや
ライオットも応じて、素早く背を向けた。
ようへい
「先に行くわよ、ジャスティス!」
「わ、分かったよ!」
真っ赤な顔のまま、ぎゅっとロエルの手に力を込める。
「いつかまた・・・・・来るよ!」
「ジャスティス!」
だが少年も、病棟を飛び出していった。
振り向きもせぬ二人に、 ロエルは大きく肩を落とした。
「こんな.........こんな......急に・・・・・」
びしょう
しかしハヤテは微笑してつぶやいた。
「それでいいではないか。 長く居着いても、別れは辛いものだ。それを知るから...・・・・・」
「ああ、出ていくんだろうな」
しえん
バウザーは、寂しげに紫煙をくゆらせた。
「あいつらきっと......こんな別ればかりなんだろうな......」
なみだ

傭兵の声に、またロエルは涙をこぼした。

見上げれば、粉雪が舞っていた。
おお
ワイマールの空は、相変わらず厚い雪雲に覆われている。
かれつ
みじん
だがもはや寒さに苛烈さは微塵もない。
降る雪も静かに、二人を見送っていた。
「じゃあ悪いけどもらっとくわ」
くどう
ほほえ
ライオットは、四輪駆動の武装バギー車を眺めて微笑んだ。
「正直、またこの雪道を歩くと思ったら、めまいがしてたとこよ」
かん
「燃料はちょオ満タン。 予備も一〇〇リットルは積んどいたぜ」
しょくりょう
「って言うか、整備もばっチシ。食糧も一週間分は積んだから問題ねエだろ」
機械油にまみれたデフとジャムは、嬉しそうに告げた。確かにバギーの後部座席は、燃料缶と食糧の梱包で埋め尽くされている。
こんぽう
たくさん
「こんなに沢山・・・・・・」
「いいって。 持ってけよ」
心配げなジャスティスに、レイズは鼻の下を指でこすった。
ろうじょう
「もう籠城は終わったンだ。 それに‥‥‥ お前らにも礼をしなきゃいけねえし........」
言って、強引にジャスティスの手を握る。
「また帰って来いよ、いつかな......」
「レイズ・・・・・・」
てぶくろ
にぎ
ジャスティスの手は、未だ手袋の下で鈍い赤光を放っている。だがかまわずにデフもジャムも、他の少年兵たちもその小さな手を交互に握りしめた。
こうご
「元気でな......」
「ありがとうよ......」
「また会おうぜ・・・・・・」
「ありがと......みんな............」
たまらず、ジャスティスはうつむいた。
ひび
その光景に微笑み、 ライオットは武装バギーのエンジンを高らかに鳴り響かせた。
「めそめそしてんじゃないわよ、男でしょ! さっさと行くわよ、ジャスティス!」
「あ...... うん......」
うる
「ジャスティス様、行かないでぇ!」
だが目を潤ませたジャスティスの胸に、小さな少女が飛び込んできた。
からだ
「リムロ......」
「行っちゃやだ! ここに居ようよお!」
なみだ

ぐすぐすと鼻をすすりながら、リムロは涙を聖衣におしつけた。
その身体をレイズが優しく引き離す。
はな
「わがまま言うな、リムロジャスティスはそのうち帰って来るそのうちな......」
「本当? 本当にホント?」
「本当だよ、また会いに来るからね......」
くろかみ
ジャスティスも黒髪を撫で、額に口づけた。
「僕の旅が終わった時、きっと・・・・・・」
「ジャスティス!」
クルセイダー
ライオットに呼ばれ、 聖戦官の少年もバギーに乗り込んだ。
「みんな、元気で!ありがとう!」
ねむ
どろみち
しつそう
雪を蹴立て、 バギーは泥道へと疾走する。
助手席にもたれたジャスティスは、ようやく睡魔を受け入れる時を迎えた。
「少し眠るよ、 ライオット......」
大きく息を吐いてつぶやく。
「着いたら起こして・・・・・今度行くのは......」
言いかけて、寝入ってしまう。
にぎ
いつしゅんあき
ほほえ
ハンドルを握るライオットは、一瞬呆れ、そして微笑んだ。
しだい
ルームミラーに映るワイマールの街並みは、次第に遠のいていく。やがて目に入るザクセンの峰々は、新たな旅路を示していた。
みねみね
もど
「また戻ればいいのよ、ジャスティス ・・・・・・」
眠った相棒に語りかける。
「あんたの旅、終わらせたらさ・・・・・・」
ささやいて、アクセルを踏み込んだ。
ほうこう
決意の声が、エンジンの咆哮にかき消える。
それでも戦い終えた少年は、安らかな眠りに落ちたままであった。

あとがき

「市川さんって楽器とか弾けるんですか?」などと人に訊かれることがあるのです。
音楽ネタを取り入れたファンタジー小説(このシリーズです)などを発表しますと。
答えは... 「全っ然、弾けません!」

うんし
もう、小学校一年生で習うハーモニカからつまづいてました。
たぶ
ちゃんと運指を要求される縦笛、オルガン、ギターなんざ「かんべんしてくれ!」と泣きたくなりましたね! いまだにワープロのブラインドタッチもできないし。

じゃあ音楽が嫌いとか言えば、聴くのは好きなんだなこれが。
もくしろく
きっかけは小学生の時に観た映画、『フラッシュ・ゴードン』と『地獄の黙示録』
どちらも「名作」と言うより「迷作」なのですが、 この際それは無視いたします。

『フラッシュ・ゴードン」のオープニングで、初めてクィーンの曲を聴いた瞬間!
とりはだ
映画館の座席でドワーッと鳥肌が立ったのが、今でも忘れられません。

力強く澄みきったヴォーカル。 せつなく、それでいて希望に満ちあふれたギターソロ。
大げさに言えば、あの瞬間こそ僕とロックの出会いだったのです。

逆に『地獄の黙示録』 は、じんわり虜にされた不思議な音楽体験でした。
全編通して随所に流れるドアーズの「ジ・エンド」の不気味さ。
なんかい
ほうこう
その難解な詩世界。 延々と繰り返される放送禁止用語の咆哮。
まがまが
ぶきみ
しかしその禍々しい十一分を超える長い曲にも、なぜか魅かれてしまったワケです。
よくばいぞう
真っ暗な部屋でヘッドホンで聴けば威力倍増良い子は真似しないように。

「だったら小説書いてる時は音楽かけてるでしょ?」
みみせん
とも訊かれますが、実はかけてないのです。 それどころか、耳栓して原稿書いてます。
好きな曲かけるとノリすぎるので、原稿書くどころじゃなくなります。

で、本書「ダーク・フロンティア・ブルース2」も、耳栓詰めて書き進めました。
せんでん
どこかのSF映画の宣伝文句じゃないですが、 「今度は戦争だ!」 です。
何か感想ございましたら、是非お便りください。ちょいと遅れますがお返事書いてます。

一巻にお便りをくれたみなさんにもここで感謝を!
引き続き、 ジャスティスとライオットの旅を見守ってやってください!

び れい
そして今回も、ぽぽるちゃさんの美麗なイラストで作品を飾っていただきました。
ぜひ
本書のイラストに惚れ込まれた方は、是非ほぼるちゃさんのホームページを探してみてください。
素敵な「可愛い系」イラストが山盛りです!
パソコンをお持ちでない方には、誠に申し訳ないのですが‥‥‥
サウンド

最後は一巻同様、〈奇跡〉〈魔導〉の元ネタで締めくくらせてください。
フロンティア
また、新大陸のどこかでお会いしましょう。
できれば、次はもっと早く......

市川丈夫

《曲名・バンド名・アルバム名 発表年》
TRAPPED UNDER ICE METTALLICA (RIDE THE LIGHTNING) 1984
COLD AS ICE FOREIGNER
(FOREIGNER) 1977
FLASH OF THE BLADE IRON MAIDEN (POWERSLAVE) 1984
HELL FREEZES OVER EAGLES
(HELL FREEZES OVER) 1994
COLD WIND TO VALHALLA
JETHRO TULL
(MINSTREL IN THE
GALLERY) 1975
DEAD WINTER DEAD SAVATAGE (DEAD WINTER DEAD) 1985

ダーク・フロンティア・ブルース2

市川丈夫(いちかわたけお)

平成27年1月13日 発行
発行者 郡司 聡
発行所 株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/
企画・編集 富士見書房
03-3238-8585（編集）
http://fujimishobo.jp
(C)Takeo Ichikawa, Poporucha 2001
本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
富士見ファンタジア文庫『ダーク・フロンティア・ブルース2』平成13年8月25日初版発行